

---

# Switch【モラトリアムを選ぶと言うこと】続・序章

作倉エリナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Switch【モラトリウムを選ぶと言ふこと】続・序章

### 【Nコード】

N4757B

### 【作者名】

作倉エリナ

### 【あらすじ】

地殻変動が起こった世界は、大きく変化をしていた。中王という支配者が現れ、戦える者が力を持つ時代になっていた。オワリ国の王子と、その護衛部隊を中心に繰り広げられる恋、友情、絆。圧制下で支配者に逆らいながら、変化と成長をしていく少年達の物語。

Switch【モラトリウムを選ぶと言ふこと】続章です。

## 第1話 続・世界を見る

01

ティアスは、ケガをして運ばれてきた客室をそのまま借りて、オワリ国にいたることになった。

サワダの父親がミハマの父親、つまりサワダ元老院議院がオワリの王に『自分が後見になる』といって話を通したらしい。

「聞いた？アイハラのいた時代ではね、あのティアスって女は、実はオレの女で、アイハラはずっとあの女を狙ってたらしいんですよ、これが」

「ほー、なるほどね。だからあの態度か。いやあ、アイハラくん、判りやすいなあ。いやいや」

「……そう言う話は人のいないところでしろよ！関係ないつつたの、お前らじゃん！！」

城の屋上で、2人仲良く煙草を噴かしながら横に並んで床に座り、向かいに座るオレをからかう。

イズミのヤツ、サワダの前だと随分優しいんじゃないの？ちくしよめ。

でも、こうしていると、学校の屋上で話してた時みたいだな。泉も沢田も、自信たっぷりっか、自信過剰って言うか、こうやって人のことをすぐからかってきたから。オレがヤツらから見たらいじられキャラだっただけかもしれないけど。まあ、泉は沢田ですらいじってたからな。新島くらいか。あいつは妙に大人びてて、いじられたフリはしてたけど、何だかずるい印象があったから。

そついや、ティアスがここにいてことは……ニイジマや、一緒にいたはずのセリ少佐はどうしてるんだろ。

彼女が危機の時に、確かに傍にサワダがいたから手が出せなかったとはいえ、何もしなかったんだろ。それとも、別の所にいたってことかな。

「……で、アイハラ的にどうなのさ、彼女は」

「だから、別人だっつーの！顔は一緒だけど、髪型とか違うし、あんなサワダみたいに戦うような子じゃないよ。フツの子だった」

オレの知ってる彼女と、こっちの彼女の大きな違いは、髪型だった。

腰まで伸びた長い髪に、違和感を覚えた。だけど、話してみたら、オレの知ってる彼女だった。

そして何よりオレは、彼女と秘密を共有してる。

「でも、縁だの何だの言ってたけどさ、ただの偶然ってことだね」「偶然？何が？お前の言うことは良くわかんねえよ」

「テツちゃん、吸いすぎじゃない？シュウジさんみたいになっちゃうよ？」

イズミにそう指摘され、サワダは苦笑いと共に、二本目の煙草をしまった。

その様子に、妙な違和感のようなものを感じたのはオレだけだろうか。何だか、サワダらしくないって言うか……。

イズミに対しては、なんか一言くらい文句を言いそうなモンなんだけど。「お前だって吸ってたんだろ！」とか、大したことじゃないけど……。

シュウジさんみたいって言うのがきついのか？

「偶然って?」

「だって、彼女はアイハラのいた時代では、テツちゃんの女だったんだろ?でも、テツちゃんと彼女がどうにかなるなんてあり得ないし、何よりミハマが興味を持ってるし」

「だよなあ。オレも別に、どうでも良いし」

「……ホントに?てか、なんでイズミも『あり得ない』とか言い切る?」

……あ、やべ。睨まれた。

「シン、睨むなよ。こえーぞ」

オレの表情が変わったのをみて、溜息をつきながらサワダがイズミをたしなめてくれた。

「でも、シンの言うとおりだよ。あり得ない」

サワダは……結局二本目の煙草に手をつけた。イズミはそれとめなかった。

気味が悪いほど、イズミはサワダに気を使っていた。いや、イズミだけじゃない。イツキ中尉も、ミナミさんも。もしかしたら、シユウジさんですら気を使ってるかも知れない。

サワダは、常に何か重いものでも背負ってるような顔をしながら、時折笑顔を見せてくれる。

オレですら、彼の笑顔に疑問を感じる。

「あり得ないテツちゃんに質問ですけど?」  
「なんだよ」

「何で彼女を助けたの？魔物と戦うのは良いけど、彼女を助ける必要はないね。共同戦線をはったわけでもないし。ほっとけばいい」  
「薄情！女の子が1人で戦ってんのに、助けもしないのか、イズミは！？」

助けなかったら、ティアスはどうなってたんだよ！！そこまで鬼か、この男は！！

「状況によるかな。でも、オレだったら、彼女は助けない」  
「なんで？！」

「そんなに目くじらたてんなよ。かつこわるい」

「かつこわるくない！当然のことを言ってるんだ、オレは！」

「ああ、惚れた女を助けないで、どうするってか？」

「そうじゃなくて！」

オレ1人で怒鳴ってて、なんか子供みたいだ。でも、イズミの言葉は納得できない。

「あの女は、怪しすぎるよ。オワリにあんな技を使う女はいないし、あそこまで魔物と渡り合える人間なら、何かしら、どこかの国でよい扱いを受けてる。だからこそ、元傭兵の集まりだった連中が、現中王直属部隊として国を動かしてるわけだ。どこの国も、腕の立つ戦士を集めるのに必死だよ。表だって研究が出来ないから余計に。そう考えたら、彼女は怪しい。一体何者だ？どこかの国の腕の立つ戦士で、この国を探りに来たんじゃないかってね。そう考えるよ」

溜息をつきながら説明するサワダの横で、イズミが苦笑いする。  
おおかたサワダが親切に、オレみたいな何も出来ない平和なガキに説明しているのを、「お節介だな」とでも思ってるんだろう。

「……どこの国に属することも由としない、流浪の旅人かも知れないじゃないか」

「映画の見過ぎだ。実際、そんなんじゃない今の世の中生きてけない。中王軍によってニホン国中くまなく探されてるからな」

「……なんだよ、それ」

「そう言う世の中ってことだよ。オワリの国でも、城の中でもオレ達には自由がない。お前、とんでもない時代に來たんだよ、判ってる？」

「判ってるよ。でも、城の中でもって……」

思わず、辺りを見渡した。

「平氣だよ、ここはね。オレに抜かりはない」

にやつと笑ったのはイズミだった。

「城の中は……？」

「たまに、中王軍のスパイが入ってたりするね。隱密部隊って言うの？こつそり各国の王宮に忍び込んで、中王にご報告してるらしいね」

さらつとそう言うサワダ。

おいおい。それって、とんでもない状況じゃない？常に監視されてるってことじゃん。戦国時代かよ！（似たようなもんか）

「……オレに抜かりはないってことは……」

「王子の護衛部隊近辺は、シンが片づけてるからな。大丈夫だよ。じゃなきゃ、オレ達、おちおち会話も出来ねえよ」

……簡単に言うけど、それって相当すごくない？さすが怪獸。だ

てにあんな魔物と渡り合ってないし。いや、それ以上にすごくないか？

「でも、護衛部隊近辺だけなんだ」

「他の所までいちいちやってらんないよ」

悪びれずにそう言うイズミを、サワダが笑い飛ばした。

ホントに、こいつらの味方って、護衛部隊だけなんだな。

だから、オレもまた、こいつらからは弾かれてしまうんだ。

02

「……なあ、中王は、何で各国にスパイとかいれてんの？だって、大名行列までやらせて、しっかり支配してるのに」

「さあね、気が小さいんじゃないの？」

オレの質問に対してそう答えたイズミを睨み付けたら、笑い飛ばされた。

「てか、元傭兵の集まりって言うてた、中王の周りの人は。なあ？」

「ああ、言った言った。オレらの年より上のヤツは知ってる。知ってるって言うても、各国の支配階級くらいだけだけど。情報操作もされてるし」

わざわざ説明してくれたサワダに、イズミがからかうように「親切」なんて言うて笑った。



「どういこと？」

イズミの方を見るのをやめた。

「テツちゃん。そんなヤツに説明したってしょうがないでしょ？ 大体、そいつの話がホントなら、この時代のことなんか、コイツには関係ないんだし」

「関係ないからこそ、知つといた方がいいこともあるかもな。ミハマなら、多分そう言うさ。そのつもりでコイツを放し飼いにしてるんだろ？」

放し飼い……言い得て妙とも言つべきか。

実際、王子の護衛部隊だって、オレに対しては微妙な態度だ。オレが悪いのかも知れないけど。王子であるミハマが、オレに対してもフラットな見方をしてくれた。だからこそ、こいつらもそれに倣っている。それだけだ。

痛いほど、判ってきた。

「関係ないからこそ、知らなくても良いことだつてあるさ。ミハマなら、そうとも言つだろうね。だからこそ、オレ達も放し飼いだよ。オレの態度を見てもね」

サワダは溜息で返事をした。

イズミの言葉の意味も判る。

ミハマはオレを全面的に信用してるわけじゃない。出会ってから時間を考えれば当然だ。

だからこそ、オレにも、オレを疑う者達にも、好き勝手にやらせている。

何より、オレはともかく、彼は彼の護衛部隊を、何より誰より信頼している。彼らがそれに応えるために動いているから、全幅の信

頼を寄せているのか、それとも、彼が信頼するから、彼らがより応えようとするのか。

「スパイ、いるんだろ？この国にも」

「いるよ？」

「だから、オレが余計なこと言ったらまずいんじゃないの？」

睨むようにイズミを見つめるオレに、彼は苦笑いで応えた。

「何度も言っけどね、オレはそれなりの階級の軍人で、この国の世話になるなら、それなりの態度しろっての。しかも年上なんだし。だってお前、テツちゃんと同じ年なんだろ？あれ？今年18なら、テツちゃんのが上？」

「……誰が年上？」

「だから、オレ。君の時代のオレのそっくりさんは、君と同じ年かもしれないけど、オレは今19歳ですから」

「……そうなの？学年一緒とかじゃなく？」

「なく！」

そう言えば、ニイジマも20歳とか言ってた気がする。なんか、ここまでそっくりなのに、年齢とか違うのって、逆に違和感あるんですけど……！

「そんなに驚いた顔しなくても。意味が判らん」

「だって！こんなに似てるのに、ついかまんまなのに！気持ち悪いよ」

「気持ち悪い意味がわかんねえし」

「もう良いよ。良いから、説明して」

「図々しいよね、アイハラくん」

そう言っていたけど、イズミは何故か笑っていた。  
だいぶ、態度が柔らかくなった気がする。

「要するにだ。今から25年前、当時傭兵だった現中王は、仲間と共に中央に乗り込み、中王を殺し、赤子だった中王の娘を幽閉し、その座に自らが座った。それだけのことだ」

「……クーデターみたいなこと？」

「それならまだマシじゃない？」

ホントに、支配者なんだ。今の中王は。

だから、逆らった国は武力制圧され、『墓』だなんて呼ばれる。逃げ場はない。この世界は、もうこの狭い場所しかないのに。

「なあ、その中王の娘って……？」

幽閉したってことは、殺されなかったってことだ。

なんでだろう。赤ちゃんを殺すのは忍びないってことかな？ 多少なりとも、人間らしい心があるってこと？

「行方不明だよ。5年前からね。まあ、前中王の娘が生きてるってことを知っているのは、中王軍でも一部だけだね。統括部があれば、血眼になって探してるし。行方不明になったとき、中央に入りしてる各国のエライさん達は、彼女が死んだものだと思ってる。そう発表されたし」

「意味が判んないって。何それ？ 何が真実で？ 誰が何を知ってるんだよ？」

「さあ？」

「何でイズミはそんなこと知ってるんだ？」

彼は笑顔で応えた。聞くだけ野暮なのかも知れない。コイツは何か底が知れない。

「中王が各国にスパイを派遣してるように、各国も対応してる。生き残り、のし上がり、支配から逃れようとしたり、うまく立ち回るためにね。情報がなかったら、何も知らずにのたれ死んでくだけだから、この世界では」

サワダが補足してくれた。

これは、彼の優しさなのだろう。……たぶん。

「中王って、いったい何なんだよ。世界の支配者？何がしたいんだよ。何で探してんの？前の中王の娘を」

「さあ。何がしたいかはよく判らない。だけど、中王の血を引くものを探すのには、何か理由があるらしい。こないだ、シュウジが何か言ってたな」

「言ってたね。まあでも、そんなこと、こいつに話しても仕方ないでしょ？必要ない。ただ、支配されてる側の正しい対応としては、どうやって支配されてるか理解した上で、NGワードを喋らないって言うのがベターじゃないの？」

彼は、これ以上喋るつもりはなかったのだろう。サワダの隣に座り、彼のマネをするように煙草を吸い始めた。

「支配されてるだけじゃ、納得いかないし、何とかしたいから、それなりの対応ってヤツ」をしてるんだろ？」

「当然だろ？何もしないままのたれ死ぬのだけはいやだね」

にやっと笑ったのはイズミだった。

「な？テツちゃん」

「……だな」

その笑顔に、オレですら違和感を感じてしまうほど、彼は力無く微笑み返した。

03

オレ達の間には、しばらく沈黙と煙草の煙だけが流れていた。サワダに似つかわしくない力無い微笑みが、オレからもイズミからも言葉を奪った。そして、そのことは他の誰よりサワダ自身がよく理解しているようだった。バツが悪そうに、また力無く微笑んだ。あの、無愛想で、口が悪くて、偉そうなサワダが。妙に優しいサワダは、オレの知ってる沢田とは似ても似つかなかった。いや、あつちの沢田も、優しいところはあつただけ。こんなに気弱というか、今にも消えてしまいそうな、儚さみたいなものとは縁遠かったから。

「悪い、オレ、会議あつたの忘れてた」

そう言つて、携帯ではなく、腕時計を確認して、サワダは立ち上がった。

「会議？イズミ……中佐は？」

「今日のは、おエライさんの会議。テツちゃんだけ。オレはテツちゃんと階級は一緒でも、生まれも育ちも違うからさ」

「何だよ、それ」

「文字通りの意味だよ。何で嫌そうにすんの、君が。君の常識にな

いつてことだろ？要するに。よっぽど平和だよねえ」

「いや、一概にそうじゃないけど……いろんな世界があったけど、でも、オレの周りでは……」

こんな手の届く世界で、そんな辛いこと言われたって。

「みただいな。じゃ、オレ行くから」

「うえ?!」

「つか、イズミと2人にしないでくれー!! 優しさ! 優しさプリズ!

オレの願いもむなしく、サワダは階段室の扉を抜け、下階に降りてしまった。かといって、この場で逃げるのも……。

「西暦つつたよな、たしか。2000年だっけ? アイハラの時代」

「まあ、その辺り……」

「知ってるよ。ニホンには名目上、階級差って言うのは存在しなかった。まあ、あるところにはしっかりあったんだけど。そういうの、気にもしてなかったわけだろ?」

「……うるさいな」

「君の感覚上、どう思おうと、この世界にも、この国にも、そしてこの城にも、きっちり階級社会って言うのはあるわけよ。それも、あまりいい感じでなく、ね」

「なんだよ。不愉快そうなの、イズミじゃんよ」

「……無視かよ。オレの顔すら見ないし。」

「でも、軍人としては一緒なわけだろ?それに、中佐って結構上だつて聞いたぞ?」

「そ、だから、この辺りまでが、今のミハマの力の限界なわけよ。」

彼の護衛部隊だけは、彼が選び、共に歩むことを選んだメンツ。だけど、彼がそれを望むにしろ望まないにしろ、何をどう頑張っても、この国の一番エライ人の息子なんだ。だから、彼を守り、彼の傍にいるものはそれなりの階級の者じゃないといけない。でも、貴族じゃないオレ達は、元々彼の足下にすら近寄れない存在。だから、重要な会議なんか、でれるわけもない。階級ばかり偉そうでもね」

「サワダは……」

「ミハマとは、王子と臣下の関係だけど、彼は王弟の息子だし、彼の従兄弟に当たる。相当偉い方の人だよ」

「そうだったっけ？」

「まあ、あんまりそう見えないんだけどね。ちなみに、シュウジさんも王妃様の実弟だから、階級も扱いも相当上だよ」

「ウソ言つてない？それ」

「まあ、嘘臭く聞こえるよねえ。シュウジさんだもんねえ」

「失礼ですよ、あんた達」

座り込んで話すオレ達の目の前に、いつの間にかシュウジさんが立っていた。もちろん、煙草をくわえたまま。

「だってしょうがないじゃない、シュウジさんだもん。会議は良いの？」

悪びれず、笑顔を見せるイズミ。シュウジさんの煙草に火をつけるため、立ち上がった。ホストかお前は。

「今まで将官クラスだけでみっちりですよ。今は休憩中です。テツは一緒じゃなかったんですか？」

彼はまるで山で空気でも吸うような顔で、煙を灰にいれる。

「たつた今、会議に向かったけど。すれ違わなかった？」

「いいえ、残念ながら」

「あ、そう。何、中佐ごときじゃ交ぜられないような、そんな会議なの？オレが呼ばれないのはいつものことだけだ」

「いても、いやな目に遭うだけです。判ってるでしょうが」

「だねえ。シュウジさん、将官会議あると、大抵いらいらしてるから」

なんか、どっちが大人か判らないな。茶化すようなしゃべり方のイズミだけど、端から見ると、シュウジさんのご機嫌をとってるようにも見える。

「そもそも、元老院が軍部の会議にしゃしゃり出てくる意味が判らないですよ。てか、私は軍部の会議になんか出たくもないんですけど。時間の無駄ですよ」

「しょうがないじゃん、軍師なんだから、殿下付きの。でも、元老院も、『この若造が』って言う思いを噛み殺しながら、シュウジさんには一目置いてるんだしさ」

シュウジさんは溜息と一緒に煙を吐く。いらいらしてるのか、煙草を捨てると力一杯踏みつける。見かねたイズミがもう一本勧めた。

「一目置くって？」

「この人、ただのオタクに見えるけど、こう見えて、国で一番くらいに優秀な軍師でもあるわけよ」

「へえ……」

「驚くдарろ？」

「驚くよ、そりゃ」

ヘラヘラしながらバカにするイズミと、どうしてもシュウジさん



が優秀だつて言うのを信用してない顔のオレに、シュウジさんが嫌な顔をする。

「……あ、そういえば」

怒ると思っていたシュウジさんが、突然、イズミを指さした。

「何、突然。お説教なら聞かないよ？」

「説教は会議の後にします。そう言えば、忘れてたんですけど、ミハマが呼んでましたよ。客人の部屋で。呼びに来たんですした」

忘れすぎだろ！

「客人……？ああ、噂の彼女ね。アイハラくんのお気に入り」

「その話題は忘れるよ！」

へえ、といった顔のシュウジさんの視線が恥ずかしすぎる。

イズミは笑いながら急いで階段室に向かって、下に降りていった。

04

彼を見送りながら、シュウジさんはオレのことを見つめる。まるで親のように。

「大変でしょう？1人って言うのは」

彼は箱から最後の煙草を取り出し、火をつける。

「突然、何ですか？」

「いいえ。1人になっていないか、心配してたんですよ、それなりに。……あの子達は、何とかというか極端なんですよ。敵と味方の差がね。ミハマのことが全てだし、他は敵にしか見えていない。まあ、それなりの価値が、ミハマにはあるからなんですけど」

「知ってます」

ミハマの価値だなんて、オレには判らないけれど。  
でも、彼らはオレのことを信用していない。それはよく判ってる。

「極端なりに、歩み寄りを見せてるじゃないですか。あの人見知り  
が」

「人見知り？サワダのこと？」

人見知りって言うか、引きこもりの根暗だな。精神的引きこもり。  
普通にしてる分、タチが悪い。

「シンですよ。あれは、扱いにくいでしょう。普段にこやかな分、  
余計にね。まあ、ミハマやテツのフォローもあるかも知れませんが、  
随分態度が柔らかくなってると思いますよ。何があったか知らない  
ですけど。良い傾向です」

……あれ、柔らかいのかなあ。

「あれで、まあまあ、柔らかいんですよ」

見透かしたようにそう言った。

「そう言えば、あの客人をお気に入りだと言っていましたね」

「いや、その……ほら、綺麗な子だし」

「君のいた時代の話ってヤツを、テツから聞きましたよ。あの子は

笑い飛ばしてましたけどね」

「別人だよ」

「君の口からそんな言葉が出るなんて、意外ですね」

……意外？なんで？

シュウジさんは、何でそんな……？？

「何で意外なんですか？」

「いえ……君は、あの時代に執着してるように見えましたから」

「当たり前ですよ。シュウジさんだって……ミハマ達に」

「そうですね。誰しも、執着するモノはありますからね」

なんて言ったらいいんだろう。

シュウジさんは案外、人を見透かしたような発言をする。まるで、大人みたいだ。

……大人か。

「まだ、元いた時代に戻りたいと思いますか？」

「何ですか。当たり前ですよ。……頼みますって、シュウジさんしか判らないんでしょ？多分」

「私でも、確証はないんですけどねえ。……いつそ、この時代を満喫してみたらどうですか？」

「いやですよ。こんな戦争やら、派閥争いやら、魔物まで現れるような世界。オレ、闘えないのに。戦い方も教えてくれないし。こういう場合、違う世界から来たヤツはスーパーマンになれるもんだって、ドラ もんの時代から決まってるだろ？」

「そんな都合のいい」

シュウジさんに言われたくはないかも。

「戦えないなら戦えないなりに、生き方ってモンがありますよ」

「シュウジさんみたいに？」

「私だって、戦ってますよ。軍師ですから。あの怪獣達を基準にしないでくださいね。あの子達こそ『特別』ですから」

「極端ってこと？」

「そうですね。中央内ですら、テツは特別扱いというか、希有の目で見られているというか。シンは、表には出てこないのでもないのでそうですね」

「そうなんだ」

嫌がりそうだな、サワダの性格上。人前で平気でピアノとか弾くくせに、意外とあがり性だし。騒がれるのか嫌がるし。

「じゃあ、私はこれで。もうそろそろ戻らないと五月蠅いんで」

煙草を消し、ご丁寧に携帯灰皿を取り出し、捨てると、オレに会釈をして階段室に向かう。

「戻る方法、お願いですからね！シュウジさんだけが頼りなんだから！」

「あまりあてにしないでくださいね」

オレの方へ振り向くことなく、軽く手を振りながら階段を下りていった。

「ホントにお前、タイムスリップとかしてたんだ。漫画か？」

「……うわ！びっくりした！！……ニイジマ……大……尉？」

後ろに立っていたのはニイジマだった。でも、軍服は着ていなかった。

「人の階級くらい覚えとけよ。まあ、制服着てないから無理もないけど」

制服着てても判んないよ。何か書いてあるのか？

それより、ここ、オワリ国なんですけど。良いのか、こんな所にいて？しかも、ここ、屋上だぞ？どうやって入り込んだんだ？

確かに中央の制服を着てても目立つけど、私服で歩いていても目立つぞ、ここは。

「何だよ、じろじろ見て。何か変か？」

「いや……ティアスのことが心配できたのか？もしかして」

「心配……まあ、そんなとこかな」

「セリ少佐が、サワダ達に見られてたけど。一緒にいたのがティアスだとは思ってないみたいだけど」

そう言ったら、ニイジマは人の悪い笑みを浮かべた。

「いいのか？そんなこと言っちゃって」

「だって、ティアスにその話をするスキがないからさ。大抵、誰か一緒にいるし。……何かミハマが妙に気に入っちゃってるみたいだし」

腹を抱えて笑っていた。いくらなんでも笑いすぎだろ。

「姫、性格はあれだけど、見た目はいい女だしな。元々、あの王子様は楽師を気に入ってたわけだし、当然といえば当然だな」

「今、そんな話してないじゃんよ」

「お前、誰の味方なの？」

ずるい。急にまじめな顔すんなって。それは、オレの知ってる新島には無い行動パターンだな。思わず後ずさりしてしまうが、すぐ後ろにあった柵にぶつかってしまった。

「もう一度聞こうか？誰の味方？」

05

逃げられない。

オレの頭の中はそれだけだった。

逃げる必要なんか無いはずなのに、オレの視線は階段室の入口に注がれていた。

「そんな怯えた顔すんなよ」

オレのこと脅しておいて、ニイジマは苦笑いをして見せた。

「オレがいじめてるみたいじゃんよ？」

いじめてんだよ。何だよなんだよ。どいつもコイツも、何でこんな……。

「誰の味方とか……そんなの、オレには判らないし」

「そう。それじゃ、お前が困ることになると思うけど。そんなずるいこと言ってるようじゃ。うちのお姫さんは、そんなヤツ、相手にもしないよ」

どうして、オレは『ティアスの味方』だと言わなかったのか。

彼女に、一番心を傾けているのは確かなのに。

「トージ！こんな所にいた！」

「うわ！なんだお前、びつくりさせんなよ！！姫の様子見てたんじやなかったのか」

助かった……のか？いや、状況が悪くなったのか？

振り向き、怒鳴るニイジマの後ろにはセリ少佐が立っていた。彼もまた、デニムに黒のジャケットで、軍服と比べたら随分軽装だった。

「姫の部屋には大抵誰かいて、なかなか近付けないよ。この国は、なかなか嚴重だしね」

……この人の笑顔には邪心がないよ！

同じにこやかでも、斜に構えてて常に黒い腹がちらちら見えてるイズミとは全然違う！ちよっと、ミハマと感じが似てるかも。

あれ？でもそれだとこの人も、ミハマみたいに含んだところがあるってことに……。

「コウタ、お前めっちゃ値踏みされてるぞ？」

「！なに言ってるんだよ、ニイジマ！オレ、そんな風に見てないじゃん」

「見てたよ。口開けたり閉めたり、目なんか泳いじゃって。判りやすい」

困ったような笑顔でそう言われてしまうと……何かホントに申し訳ないっつの。

イズミみたいに、嫌味たっぷりの方が気は楽かな……。後ろめたいときは。

「え？オレもするよ？値踏みくらい」

「ああ、はいはい。お前は良いから喋るなって」

「てか、紹介してよ。姫の写真持ってた子だろ？」

「いいよ、もう。お前は有名人だし、コイツはもう知ってるみたいだから。なあ？」

「うん。ニイジマも、セリ少佐も、雑誌で見た」

サワダとちがって、この2人は雑誌ごときでは騒ぎもしない。普通のこととして扱っていた。

「……オレ、そろそろ戻るよ」

今のスキに逃げてしまおう。何かニイジマもやっぱり怖い。オレの知ってる新島とは違いすぎる。似てるけど……オレは「怪しきもの」扱いだ。

「ちょっと待った。まだ用は終わってないし。無駄話しに来たわけじゃないからさ」

……やっぱり。なんか用があつたんだな。

猫の子を掴むように、軽々とオレの首根っこを掴むニイジマ。たったそれだけのことなのに、オレはもう動けない。

悔しいし……ホントにオレには何も出来ないことを自覚させられる。

「オレにはないよ」

「お前になくてもオレにはあるよ。ちょっと、頼まれて欲しいんだけど？」

「すみません。意味が判りません。勘弁してください」



「お前なあ。姫からパスもらっただろ？」

「でも、ティアスがここにいないなら、あんまり関係ないし」

そう言っで、ちよつとだけ恥ずかしくなつてしまつた。

「それなんだよな。……あんなケガするなんて思つてなかつたからさ。計算違いだ」

ニイジマはオレに突つ込みもせず、溜息をつきながらばやいていた。

「うん。姫がイライラしてるのが手に取るように判つてさ」

「……コウタ、お前それで部屋に近づかねえんじゃないだらな？」

「だつて、何か愚痴られそうだし。トージがフロアしてあげなよ」

「えー。やだよ。大体、カナさんに連絡したら、オレが怒られたんだぞ？ 2人もついていながら何やってんのつって。オレはその時いなかったし、姫の責任じゃんか」

「でも、トージだつてオレに怒つたし。お前がついていながら、あんな目にあわせてつて」

「いや、まあ。なんだ。まあまあ。忘れろよ」

つか、お前らオレの存在を忘れてるだろ。

今のスキに逃げるか。

「……で、用つて言うのはだ」

「……何でしょう？」

もちろん、彼はオレを逃がすわけがなかつた。再び首根っこを捕まれてしまつた。

「話を聞いて判るとおり、姫との連絡がとりづらい状況にある。あの人、ケガが酷くて動けないし」

「本人は、……随分平気そうな顔してるけど」

他の連中と一緒に見舞いに行ったときは、もう平気、みたいなことを言ってたけど……。

「ホントに平気なら動いてるだろ？あの部屋からほとんど出られないんだ。まだ時間がかかる」

「そうなんだ」

「それに、この国は……いや、あの王子の近辺に限ってだけど、ガードが堅くて近付きにくい」

「それって、イズミやサワダがいるからってこと？」

「そうだな。護衛部隊は厄介だよ。まあ、他は人数はいるけど、大したこと無いって言うか。うちにはコウタもいるし」

セリ少佐は微笑むことでトージの言葉を受け止めていた。こうして見てると、ただの人の良さそうな兄ちゃんにしか見えないんだけど。相当すごいってことだよな。

さっき、イズミの話を聞いてからだから、その価値はよく判る。

「もしかして、オレに、ティアスとの橋渡しをしろってこと？」

「そこまでは求めてないけど。そう言うこと？」

何で疑問型？失礼なくせに、求めてるし！？

オレだって、2人でなんて滅多に会えないのに！

確かにオレは、この城の中で、場所は限られてるけれど、自由に動けるようになった。

オレの学ランの胸には金色の小さなバッチがついている。ちよつと凝った彫りが入ってるくせに、星形でちよつとカジュアル。いぶした感じの色が、アンティークっぽくって嫌いじゃない。これがまた意外とかっこよかったりするんだけど。

だから、このバッチ自体に不満はないんだけど。

だけどこのバッチは、要するに識別の印なわけで。

まあ、名札だってそうなんだけど。でもこのバッチがどういう意味での識別なのか？それが判らず、ちよつとだけ不愉快だった。

でも、オレに自由が、限られた中での自由が与えられたのは、確かにこのバッチのおかげだ。

国でオレが軍服を着てるわけにも行かない。私服でも、この学ランでも目立つ。だから、この人は部外者じゃないですよ、という証なのだろう。

事実、先ほどニイジマ達やイズミ達が言っていたように、この国は外敵を警戒をしている。

そんな中、オレはただの刺激物にしかない。

だから自分で刺激物じゃないことをアピールするしかない。

でも、刺激物じゃないことをアピールできても、浮いてることは変わらない。

彼女の部屋へ向かう道のりも、オレは好きじゃなかった。

ここにいと、人目に付くのが、いやになってくる。

そして、いやでも人を必死で観察しなくちゃいけないことにも気

付かされる。

ホントは、ここにいるのは不愉快でしかなかった。感謝をするこ  
とは、別の話だ。

なのに、ティアスとニジマ達の間をつなぐ？この上、オレにこ  
こで一体どう動けと？！

ティアスの部屋に向かう途中で、何人も軍服を着ている人に会う。  
親衛隊以外、この城の上層階であるフロアで、オレが知ってる……  
つまりは過去で知り合いだったヤツに会うことはなかった。外で  
はたまに見かけることもあったけど。

階級の低い兵は、このフロアには上がって来れない……らしい。  
年齢的に、まだ士官学校生か、士官学校卒でも准尉か少尉、大抵  
は陸軍歩兵といったところだ。

要するに、このフロアは、あのイズミ達が下手に出るような、階  
級の高い人たちばかりなのだ。

だから、余計に居心地が悪い。

初めて会う人が、どれくらい偉くて、どんな扱いで、どんな立場  
なのか、ある程度は見極めなくちゃいけないってこと。

そんなめんどくさい上に、むかつくこと、いちいちしなくちゃい  
けないのがいやで仕方ない。

例えば……ちょうどティアスの部屋の前に立つ、軍服に身を包ん  
だ男性。もう、中身なんか見えやしない。間違えないために、まず  
軍服を、それから階級章を見ないと。

おそらく、この部屋に一緒にいるミハマか、イズミに用があるん  
だろうから、伝令だとしても少尉以上。伝令じゃなく、用があるな  
あ、もつと……。

胸に光る勲章と、襟に付いた小さな階級章。それを見逃さないように。

階級は少佐、勲章は1つ。でも、戦争での功績じゃない。

おそらく年は40近いだろう。豊かな口ひげを蓄えていることに、オレはやっと気がついた。

「……君は？殿下に……ご用ですか？」

口ひげの少佐は、オレを嘗めるように値踏みしたあと、胸に光るバッチを見つけたらしく、値踏みをやめ、言葉を変えた。

オレはわざとらしく敬礼して見せた。

「いえ。オレ……僕は結構です。この部屋の客人に用がありますので……。後ほど。外で待たせていただきます」

オレの言葉を受け、少佐は部屋の扉をノックし、許可を得て入っていった。

中は何だか賑やかだった。

そう言えば、サワダの父を後見に持つと言うことと、出会いのこともあって、彼らは彼女を警戒していたはずなのに、話している姿は何だか楽しそうだった。

その姿は、オレの不安を煽っていた。それは十分理解している。

部屋の外で待っていたら、ミハマとイズミが口ひげの少佐と一緒に部屋から出てきた。

「イズミ中佐は結構ですけど」

「いえいえ。王子の護衛が、私の仕事ですから」

笑顔を崩さないまま、減らず口を叩くイズミ。隣を歩くミハマが、オレの姿に気付いて苦笑いして見せた。

……何か、どつと疲れるな。  
思わず溜息をもらす。

今なら、部屋にはティアス1人か……。やっとまともに話が出来そうだな。

でも、何から話したら良いんだ？ まいるな……。ちょっと考えないと。

扉をノックするまでに、随分時間がかかったような気がした。

ニイジマがオレに何を求めているのか知らないけど、彼からの重圧はノックする手を鈍らせるのに充分だった。

「あれ？ アイハラ？ 何だよ、こんな所で」

「？ え？！ 何で、サワダがティアスの部屋から……？ 会議に行ったんじゃない」

不思議そうな顔でオレを見ながら、サワダは後ろ手に扉を閉めた。

てか、なんでミハマ達と一緒に出てこなかったんだよ。今まで……そんなに長い時間じゃなかったにしろ、もしかして2人きりだったってこと？！

「いや、報告会だけだったし、遅れていったからすぐ終わったんだ」  
「でも、何でここに？」

「いや、ミハマ達がいたから……。なに噛みついてんだよ」

苦笑いを見せるサワダ。……ちよつと大人気なかったかも。  
でも、よりにもよつて、サワダなんだもんな……。

「別に。なに話してた？」

「話？……話、ねえ……」

目を伏せる。その顔が、まるでオレの知ってる沢田のようで、  
…嫌だった。

「とくに何も？お前が気にするようなことは。自分の知ってる女と  
は別人とか言つときながら、相当だな」

「サワダこそ。何でそんな含んだ言い方するんだ？」

一瞬、サワダの表情が変わつたのを見逃さなかった。  
すぐに元に戻つたけど……慌てたような、悪いコトしたような、  
そんな顔だった。

「なにもない。あるわけもない。勝手に誤解すんなよ、めんどくせ  
え」

そう言つて、オレの前から逃げるように、彼は立ち去つた。

07

……絶対何かあつた！

怪しすぎるよ！好きになるわけなんか無いって言つときながら、  
あの態度！

「相原です、入って良い？」

思わず、ドアをノックする手に力がこもる。ちくしょう、悔しい……。何があったんだ。

ティアスもちつとも返事してくれないし。

「……ごめんね。どうかした？どうぞ？」

何だ、わざわざ扉まで来て開けてくれたんだ。申し訳なさそうに扉の向こうからオレを覗いていた。

「1人？さつきサワダが出てきたみたいだけど」

「……あ、うん。いたけど、一緒に他の人もいたよ？」

いや、そうじゃないだろ？時間差があっただろ？

「入ったら？こんな所で話さないでも」  
「うん」

1人きりなのに、あっさり部屋に入れるなあ……。平気なのか、そう言うの。

もしかしたら、サワダのこと……。いや、だったらわざわざ『他の人も一緒に』なんて言う必要がない。

何度かこの部屋に入ったけど、2人きりになるのは初めてだった。大抵誰か一緒だったから。

それは、他の連中がオレのことを信用しきってないのもあるのだろうけど。



だって、この部屋と、オレにあてがわれた部屋は、随分扱いが違う。広さも、オレの部屋の倍くらいはあるし、ベッドも広い。

テレビもあったけど……ティラスはつけてないみたいだった。オレの部屋が素泊まり客多めのビジネスホテル（安め）だとすると、この部屋はシティホテルのエグゼクティブフロアにありそうな部屋だった。言ったこと無いからよく判らないけど。

でも、やっぱりベッドには天蓋がある。意味が判らん。

彼女は後見にサワダの父親である元老院議院がついている。オレのように招かれざる客ではないということかな。

だって、彼女も私服でこの城にいるのに、よそ者なのに、オレのつけているバッジはない。

だからと言って、この部屋には当然、生活感なんて無いけど。

「体……もう、起きあがっても大丈夫なの？この間は起きあがるのも大変だったのに」

こんな言葉をかけることすら難しい距離感なのに、どうやって連絡係など！

「だいぶね。いつまでも寝てるわけには行かないし。時間もつたないから」

「若いのに、生き急いでるな」

「そうかもね」

彼女は悪戯っぽい笑顔を作って見せた。

「座りなよ。まだ、体が辛いだろ？」

「ありがと。君は優しいね」

「勇十で良いよ。オレの知ってるティアスは、そう呼んでたから」

そう言ったら、彼女は少しだけ戸惑っていた。申し訳なさそうな顔をして、目を伏せ、オレの顔を見ないようにベッドに腰掛けた。

『オレの知ってるティアス』

オレの知ってる彼女なら、気にするだろうことを判ってて、そうであることを期待して、わざとオレはそう言った。

彼女はオレの携帯のデータを消したことを、申し訳なく思っている。だからパスをくれたし、優しくもしてくれる。

そこにつけ込むようにいったら、言い方が悪いだろう。オレはくすぐっただけ。

「……ユウト。その椅子に座ったら？」  
「うん」

おそろおそろ、オレをそう呼んだ彼女に、オレは満足した。いい気分だ。

彼女が、オレの知る彼女であることと、オレと彼女の共有するこの時間に。

オレの知ってる彼女とは別人かも知れない。でも彼女は、オレと時間を共有した、あの子をこんなにも思い出させる。

「サワダと、何の話をしてた？」

「何でさっきからサワダ中佐の話ばかり??」

「いや……まあ……。そりゃ……。いや、サワダってさ、何っーか、女の人苦手、みたいな話を聞いてたから、意外だなー……。なあんて……。」

「何それ。その言い方。何かトージみたい。やだあ?」

唇を尖らせ、むっとしてみせる様は、オレの知ってる彼女そのものだった。

逆にあの、中央の広場にいた、顔を隠した楽師の姿からは想像がつかない。

「あんまり、エライ階級の人って感じじゃないんだ？」

「そんなこと無いわよ？これでもそこその階級ですから」

今度は悪戯っぽい笑みを浮かべて見せてくれる。

「ティアスって、いま幾つなの？」

「失礼ね。そんなこと、直球で聞かないでよ、もう。20よ。トージと同じ年」

そう言えば、ニイジマも年上なんだっけ、オレより。あんまりそんな風に見えないけど。

「ふうん。ここの護衛部隊もそうだけど、それって……あんまりよく判らないんだけど、すごいんだろ？その年で、あの階級って言うのは」

「ああ、それはあの男の敷いたルールがメチャクチャだからよ。強ければ、戦って勝てば、上に上がるだなんて。まあ、のし上がるのにはちょうど良かったけど」

あの男って……もしかして中王のことですか？支配者じゃないかよ、もう。

その制度でのし上がってる人間にまで、メチャクチャとか言われてるし。

……てか、サカキ元帥との会話を聞いてても思っただけど…

…中王に与してるわりに、忠誠心みたいなモノが感じられないって言うか。ここにいる護衛部隊と比べると、似てる部分もあるし、違いすぎる部分もある。

護衛部隊は、オワリ国に所属してるのに、愛国心というか、王とか、国自体への忠誠心のようなモノが薄い。国のために戦うし、国を守るために動いているのだけれど、彼らにとっては王子ミハマが全てだ。

王子が国を守るから、彼らも国を守っている。そんなところがある。だけど、彼らの王子への忠誠心は強く、重い。

良いとも悪いとも思わないけど、護衛部隊も、ティアスも、組織の中で浮いてるように見える。

「ちゃんと黙ってていてね。こんな話。判ってると思うけど」

ティアスは、人の悪い笑顔を見せた。余裕たっぷり。

08

黙ってていてね。なーんて、かわいいこと……。

……ちがうな。彼女はもしかして、釘を差した？オレのこと信用してない？

だって彼女は、オレの持ってた彼女の写真を消したり……でも、お詫びだと言ってパスをくれたり。

彼女の行動には理由がある。

だから、時々こうして心に棘が刺さるような、そんな真似をされるときついけど、仕方ないと納得できる。

出来てると思う。

「どうしたの、そんな辛そうな顔しちゃって」

「……そうでもないよ」

「ごめんね、こういう話し方、良くないとは思ってるんだけど」

そう言って可愛くほえむ。

「いや、ホントに気にしてないよ。だって、ティアスの立場とか、いろいろあるんだろ？」

「ユウトは優しいのね」

彼女は笑顔を崩さない。動くこともなかったけれど。

「立場があることを振りかざして、わがままを言ってるだけの人だっているのにな」

「ティアスは、違うよ」

「そう？ありがとう」

……これって、ちょっといい感じじゃない？！

ティアス、オレのこと、かなり好印象だよね！

って、オレは以前もそう思ってたんだっけ。なのに、沢田にとられてたわけで。

初めてあの2人がキスしてるとことか見かけちゃったときは、本気でショックだったぞ。あいつら、少しは人目を憚れつつーの！

「あ、そうだ。オレ、ニイジマに……」

ここで一気に彼女との距離を縮めたかった。

ニイジマのことをネタに、彼女との秘密を増やすつもりだったのに、彼女は人差し指を立てて、オレに喋らないように要求する。

「だめよ。誰が聞いてるか判らない」

「……あ、そうだね。ここ、オワリの国で……」

彼女にとって、ここは敵国だ。複雑な関係ではあるけれど。

だけど、彼女はオレの台詞に、首を横に振った。

「それだけじゃ、無いけどね」

「……どういうこと？」

「名前は言っちゃダメよ。頼まれてるのね？」

オレは黙って頷いた。

「ありがとね、ユウト。引き受けてくれたんだ」

彼女の笑顔に、思わず何度も頷く。彼女が感謝してくれるなら、それで充分だ。

彼女はベッドから立ち上がり、少しでも苦痛に顔を歪ませた。支えるために、オレは立ち上がり、彼女に駆けよる。

彼女はその手を拒否して……拒否したくせに、オレに近付き、耳打ちをした。

「伝えて。『しばらく動けないから、2週間後に彼の合図で動く』」

と。『それまでに連絡を取れる体制を整備して』」

内容は全く色気がないけど、こんな耳元で囁かれたら、ときどきするって！

「また、頼むね」

平気な顔をしてたけど、彼女はかなり苦しそうにしていた。  
そして、彼女はやっぱりオレの手を拒否した。

「……辛いなら……」

「なに？」

「辛いなら、そう言えば？手を借りたら？別に、悪いことじゃないと思うけど。オレなんか、頼りまくりだよ」

もつと笑ってくれると思った。でも、彼女は微笑んだまま。  
そう、微笑んだままなんだ。ずっと、同じ笑顔で。

「借りてるよ？あいつらとかね。良くしてくれてる。ユウトにも、頼ってるよ」

「逃げなくても」

「あはは。ごめんね。気分悪くしちゃったんなら許してくれないかな？ちよつとそう言うの、苦手なんだ」

それって、男が怖いとか、そう言うこと？

そういえば、ちよつと、びくついてたって言うか……。何かあったとか？

彼女の視線は、まるでオレに絡みつくようだったけど。誘われてるようではまらないけど、でも、彼女がそう言うなら。

「ごめんね。ちょっと休ませてもらっても良いかな？」  
「あ、うん……。ケガしてるのに、無理させちゃったね」  
「気にしないで。また来てね」

さっきまでの視線は何だったのか。

彼女はいつも通りだった。その姿に多少引っかけりはあるものの、彼女に見送られ、部屋を出る。

「なに、いい雰囲気でないの？彼女と。うまくやってんじゃん」

扉の外にいたイズミに声をかけられる。つか、盗み聞きしてたのか？！

『だめよ。誰が聞いてるか判らない』

……こいつか……！？それって、こいつのことか！？

「ミハマと一緒にいたんじゃないかったのかよ」

「いつも一緒にいるわけじゃないだろ。勤務中だし。オレはオレで、自分のなすべきことをしてるだけさ」

「ふうん。こつ言つの、仕事なんだ」

「どうだろ。仕事になるかもね、その内」

彼は悪びれることなく嫌味をオレにぶつけた。



「……オレ、部屋に戻るから」

こっそりイズミから距離をとったのだけれど、彼は簡単にオレの肩を掴み、引き留めた。

「まあまあ。ちょっとお茶でもしない？」

「いやだよ。オレは可愛い女の子としかしない」

「え、オレ、可愛いじゃん」

「身長30cm減らしてから言え」

「うわ、酷いこと言うなあ。誰に向かって口きいてんの？」

そんなに力を入れたようには見えなかったのに、イズミは軽々とオレを持ち上げ、方向を変えた。

「さあて、どこがいいかなあ。オレ、シロノワールとか食いたいな」

「え？本気で出かけんの？マジでナンパ？！」

「お前みたいな嫌なヤツ、ナンパしねえって」

そう言いながら、オレの意志を無視して、引きずってエレベーターに押し込めた。

角で座り込んだまま、オレはイズミの顔を見上げることすら出来ない。

「……何故でしょう。屋上とかでも……よくない？」

「いや、オレは人と話をするときは、敵も味方もいなくて、人の多い所って決めてんのよ」

「意味が判んない……。さっきは屋上だったじゃんよ」

「相手が、テツやシュウジさんだったから」

「なにそれ」

初めてオレは、イズミの顔を見ることが出来た。彼はいつもの人の悪い笑顔だった。

それを見て、どうしてティアスの笑顔を思い出したのか、自分でも判らなかった。

「あそこは、手の中に収まりそうな、狭い世界を見渡せて、いい気分になれる場所だから」

「余計、意味が判らないよ……」

「残念。珍しく、本当のことを言ったのに」

エレベーターの扉が開いたと同時に、イズミは再びオレの首根っこを掴んで、引きずり出す。

「シン、どこへ行く？アイハラくんから手を離したらどうだ？痛そうだ」

「ミナミさん！！」

王宮の出口で、無言で笑顔を浮かべたままオレを引きずるイズミを見かねて声をかけてくれた。

イツキさんの言ったとおりだな。オレに対して怒ってたとしても、優しいよ、この人は。

「ちょっと、コーヒー飲んでくるだけ」

「……そうか」

オレを嘗めるように見るミナミさん。

「良いから、普通に歩かせたらどうだ？」

「逃げるんだよ、コイツ。オレがおこってやるって言うてんのに」

「どうせ経費で落とすつもりだろうっ？」

「あつたり前じゃん。何で男に、オレが金出してやらなきゃいけないのさ。すぐ戻るから、ミハマには黙つといて」

「戻ったら、話を聞こう」

あれ？もしかして、ミナミさんも納得済み？これって、いつもの行為？

オレのこと、疑われてるって言うか、疑わしいモノに対して尋問するのを黙認してるってこと？

「ミ……ミナミさん……オレ、何も」

「何もないなら、シンにそう言っていただければ」

「！マジっすか」

助けてはくれない？

引きずられるままのオレを、ミナミさんは見送るだけだった。

「食べないの？シロノワール」

ホントにコメダに連れて来やがった。しかも、自分で注文しといで、オレに押しつけるし。

王宮からほど近い、地下鉄の駅の目の前にある喫茶店に、イズミは迷うことなく連れてきた。要するに、いつもこういうことをしてるってことだ。

怪しい奴と話するとき……王宮で話したくないとき……ミハマにも内緒にしたいとき。

そのわりには、店にはそれなりに人もいる。この中に、敵が紛れてたらどうするんだ。5組くらいしかないけど、判ったもんじゃ

ない。

「ん？オレ、甘いモノ苦手なんだよね」

「だったら頼むなよ」

「食べないの？」

「いや、食べるけど」

オレは甘いモノは大好きだ。むしろコーヒーは苦くて飲めん。勝手に注文しやがって。強引な男は嫌われるぞ。

「つか、自分の立場判ってる？」

「判ってるよ」

「判ってる人の態度じゃないけどね。めんどくさいから、本題からはあるけど、君、あの子とはどうなの？」

「どうって？」

「どこまで彼女のことを知ってる？」

「どこまでって？」

「いや、もうやっちゃったんかな、って思ってた」

こんな真っ昼間に、こんな人のいるところですよ話じゃねえだろ！

「オレ達、ほとんど話も出来てないんですけど」

「まあ、それは軽い冗談なんだけど。あの子、そんな簡単に出来るような子じゃなさそうだし。お高いっつか」

「別に、そんな感じの悪い言い方するような子じゃないし」

「いや、どうだろ。ものすごい人を拒否してる感じがするけどね。判らんように気を使ってるけど。神経質っつか、なんというか。めんどくさそう」

「あんまり悪く言っなよ」

「悪く言っただよに聞こえるんだ。失礼だよなあ」

充分すぎるくらい嫌な言い方してるじゃねえか。

「オレ、あの子自体は全然嫌いじゃないよ。ただ、怪しいだけ」

それはそれで、困るんですけど。ちくしょう、どうしてやろう。

「ミハマに内緒にしてまでする話なんだ、それ？彼女がミハマのお気に入りだから。よく、部屋に来てるらしいし？」

「それは別に、ミハマの自由だからさ。関係ないけど。そんなことより、あの子が似てることの方が、問題かな」

誰に、と彼は特定して言ったわけではないのに、彼女の部屋から悪いことでもしたような顔して出てきた、サワダの姿を思い出していた。

「ウソつけ。関係ないだなんて」

「まあ、いろんなことが、いろんな所と密接に絡み合ってるわけよ」「イズミが勝手に絡ませてんじゃないよ。オレ、関係ないし」

あ、今の、ちょっとやばかったかも。オレはかなり冗談っぽく言ったのに、言っただけなのに、イズミの目は超怖かった。

「呼び捨てにすんなって言ったる？」

顔は大抵にこやかだけど、その顔をさらに大きく動かし、にっこりと笑って見せた。だけど、目が笑ってないんだって、お前は！！

「じゃあ、率直に言おうか。君、彼女が何者か、知ってるんじゃないの？」

「……何者って？」

「それはオレが聞いてるんだよ。さっきも言ったる？怪しいって。ついでに、君もね」

「オレには何も出来ないつつたの、イズミだし」

「そうなんだよね」

どっちだよ。

まあ、ティアスのことに気付いてるわけでは無いみたいだから、良いけど。

「アイハラはさ、何も出来ない、何も知らない。ミハマがそう言うんだから、多分そうなんだよ」

運ばれてきたコーヒーに目を落とし、何も入れてなくせにスプーンでゆっくりかき混ぜ続けていた。

「まあ、オレもそう思うよ。ただ、お前は隠し事はしてる。ミハマはそれを知ってるけど、それを口にしない」

目を合わせない。その怒りにも似た、重い心の向く先はオレなのか、それとも彼の主なのか。

「程度にと思わないか？すべては」

「言ってることが……よく……」

彼は顔を伏せたまま、上目遣いでオレをにらみつけた。

「はつきり言つとくけど、オレはこの狭い世界を守るためならなんだつてする。やっと見つけた、オレが生きていけるこの場所を」

「別にオレは、邪魔しないつて。ほんとだつて」

茶化す気にはなれなかった。

切実で、何だかクレイジーな彼の瞳が、怖かった。

重いよ。重すぎるよ！

「ミハマがお前をどうフォローしても、これがオレの仕事だから。彼女にどんなに心移していても、オレは疑つてかからないと」

「何で疑う必要があるんだよ」

「……本気で言ってる？」

何を知ってるんだ？オレが彼女のことを知ってるつて、疑ってる？

「オレは、別に彼女に怪しい所なんてないと思うけど」

「それは、君にとつてね」

「何だよ、はつきり言えよ。そんな隠して喋らなくとも！」

「やだよ。めんどくさい」

ちくしょう。何だよ、こんな所に連れ出して、自分のことは喋らないつてか？

「彼女を疑つてんだろ？でも、ミハマに気を使って、こつやつてこそそ動いてる。動いてるのには、何か理由があるくせに。疑ってるなら疑ってるなりの、理由があるんだろ？」

「疑ってるのは、オレじゃない」

「めっちゃ疑ってるっつーの！」

「オレには、確証もないし、あんなにはつきりと彼女のことを知ることもない。だけど、怪しいことは確かだ」

「イズミじゃないのか？彼女を疑ってるのは？誰？ミハマ？シユウジさん？それとも……」

イズミは顔色一つ変えずに、いつもの笑顔のまま、オレを見ていた。

「……サワダ？」

「残念だねえ。アイハラはさ、あの子のこと、気に入ってたんだろ？それを、元々いた所では、テツのそっくりさんにとられちゃって」「話を変えんなよ。大体、お前が先に……」

重たい話を、まるで自らの思いを、オレに教えてくれるようなことと。

もしかして、これって、オレのこと、多少なりとも信用してるってことか？

ミハマにも、サワダにも話にくいことを、オレに話してくれてるだけなのか？

「先に……何だよ？」

「いや、なんでもない」

イズミの表情は変わらない。なんか、あんなこと言うから、急に申し訳ない気分になってきたじゃないか。

やっと見つけた、生きていける場所だなんて。

もしかして、イズミだけじゃなく、ほかの連中もそんなこと思っ



てるのかな？

だとしたら、オレとはあまりに意識が違いすぎるよ。

「何だよ、何へこんじゃってんの？」

「別にへこんで無いっつーの！」

「ああ、そう。アイハラ君、気がちいちゃいからなあ」

「小さくねえよ」

「ああ、違うね」

人の悪い笑顔に変わった。いや、まあ、普段も人が悪いんだけど、余計に。

彼はわざとらしく、タバコを手にとって見せた。演じてるって感じがしますけど。

「世界が狭いんだ。悪かったよ」

少しだけ、認められたような気がしてたのに、何でこんな言い方されないといけないんだ。

## 第2話 続・これもきつと何かの縁

01

「申し訳ありません、お客様。閉店のお時間になりますので……」

この店の店長と思しき初老の男性に声をかけられ、オレは初めて窓の外を見た。空はまだ明るい。

「今、何時ですか」

そう言った後で、白夜だったことを思い出した。どうも、時間の感覚が狂うな……。

閉店時間からかなりたっていたのか、店内には誰もいなかったし、店長はかなり不機嫌そうな顔でオレを睨み付けていた。口調が丁寧な分よけい怖い。まあイズミに比べたら、たいしたことは無いけど。彼は白いシャツの袖をまくって、似合わないミリタリー調のごつい時計をチラツと確認した。それから、さりげなくオレの方に、時計を見せるかのように腕を傾けた。よく見たら、壁には時計がかかっていた。

「11時12分です」

「……いい時計ですね」

「ええ、新作なんですよ」

彼は満面の笑みをたたえていた。

オレは胸をなでおろし、即座に立ち上がった。

「すみません、帰ります」

急いで店の外に出て、少し離れた場所にある公園のベンチで座り込んだ。こんなに明るいの、いや明るいからこそ人がいなかった。結局、店長に声をかけられるまで、オレは喫茶店の片隅の席に座り込んだままだったのだ。何でもここで言われなければいけないのかと、正直、理不尽だっと思っていていっぱいそのまま、時間だけが過ぎ去っていくのを感じていた。

イズミは、なぜか迎えに来たサワダに連れられ、さっさと城へ戻っていった。サワダがオレのことを気にかけてくれていたようだったが、何を言ってくれたのかは覚えていない。恐らく、いつものことなんだろう。今までも、彼がこうやって敵を排除して来たに違いないことは容易に理解できた。

「なにやってんだよ、お前？」

「うわっ……て。何だ、ニイジマかよ。脅かすな」

後ろから声をかけ、肩をたたいたのは、私服姿のニイジマだった。いつもならここで笑いながらしゃべるところだけど。

「こんな思いつきり人目につくところに座り込んでいて、脅かすもくそもあるか。そういう時は、たいてい心に疾しいことがあるから驚くん」

「別に無い」

「ああ、そう。疾しいことは無くても、なんか抱えてるって感じはするけど。まあ、オレにはどうでもいいことだし」

「だから、何でそういうこと！」

オレが怒鳴りつけたときには、ニイジマはオレの隣に座っていた。

「うちのお姫さんにさ、頼まれてんだよ。お前には優しくしてやってくれて。戦い方も、戦争すらも知らない子が、いきなりこんな状況にいたら大変だろうし、可愛そうだからって」

「何それ、ほんとに？ティアスがそう言ったのか？」

「あのなあ。いくらなんだって、上司が言った言葉を違えて言うほどバカじゃないぞ」

「バカとか言つてないって」

なんか、時々子供みたいなこと言うよな、こいつ。結構、優秀な軍人のくせに。

それにしても、ティアスがオレの事をそんなに気遣ってくれてたんだ。オレの前ではあんなつれない態度を見せることがあったけど、ニイジマにそう言うことを言ってるってことは、たぶんそれが彼女の本音なんだろう。

「つーか、そのニイジマの態度は、やさしさなの？」

「優しいだろ？だって間違ってたか？オレの言ったこと？」

「間違つてない」

オレは簡単にイズミとの会話についてニイジマに話すことにした。ニイジマの口からオレの現状が伝わることで彼女に優しくしてもらいたいって言う下心がなかったと言えば、うそになる。

「なんというか、イズミ中佐は相当切れ者かも知れんな。これは要注意」

「切れ者？何で？この話で??」

「わかんないの？お前、たいしたこと言われたわけでもないのに、揺さぶられてるよ、それ」

「オレが、揺さぶられてる？」

「まあ、気づいてないなら良いんだけど。いや、たいした男かもね。しかも、ずっとそう言うことをしてきたんだろうな」

「それはオレも思った」

公園の時計の針だけが、オレに時間を教えてくれる。こんな夜遅くに城に帰っても入れてくれるのかだけが心配だったけど、帰りたいわけじゃなかった。

「イズミは、ミハマと、その護衛部隊のためなら何でもするんだろうな、きっと。そんな気がする。オレは彼から見たら、外敵ではないんだ」

「だろうな。姫も、それをひどく感じるって言ってたし」

「でも、ミハマがティアスのこと気に入ってたんだから、多少は……」

「いや、だからこそ余計に、警戒してるんだろう。姫の周りは近づけない。護衛部隊に警戒されても仕方ない要素がそろってしまっている。どうやら、サワダ議員も、敵として認識されてるみたいだし」  
「他はどうか知らないけど、ミハマとは相当仲が悪いかな」

そういつて、ニイジマにティアスが怪我をした時の、ミハマとサワダ父の様子を話したら爆笑されてしまった。

「ガキだな」

しかも、その一言で一蹴するか、お前は。確かにオレも同じことを思ったけど。

でも、少しだけ気が楽になる。ティアスのこともそうだけど、ニイジマもこうやって話をしていたら、何だかオレのいた時代の彼のように、安心できる。もしかしたら、彼は、彼らは、本当にオレの

ことを受け入れてくれるかもしれない。

いつか必ずオレは元の時代に戻るけど、だけど、どこか抛り所が無くちゃ、正直つらいよ。

ニイジマは、イズミみたいにいつも笑ってるようなやつじゃないけど、今日は何だかにこやかだった。

「うちのお姫さんさ、怪我して、ちょっと気弱になってるからさ、悪いけど、フォローしてやって。オレたちも気にしてるんだけど近づけないからさ。お前には連絡係ばつかりして悪いとは思ってるけど」

「いや、それは、それがティアスのためになるのなら、やるよ。怪我、かなり辛そうだったし」

「だな。あんなところじゃ、おちおち怪我也治せやしない。あんなに警戒されてちゃ」

そっか。そうだな。イズミは、ミハマが彼女に興味を持っていることで、余計に彼女に対して警戒心を抱いている。何かあったときに、彼女が裏切り者だとわかったときに、傷つくのは他でもない、彼の一番大事な主なんだから。

だとしたら、もしかして、あのときのサワダは？

『話？……話、ねえ……とくに何も？お前が気にするようなことは』

「サワダがティアスの部屋にいたのって、彼女を疑ってたから、確認のため？」

「なんだそれ。サワダ中佐が姫の部屋につて……二人きりで？」

「うん。でも、ティアスもサワダも何も無いって否定するから」

オレに食って掛かったくせに、『ああ、そう』なんて気の無い返

事をしながら一人で頷いていた。

02

しばし考え込んでいたニイジマだったが、突然、勢いよくオレのほうに振り向いたかと思ったら

「そう言えば、お前、携帯持ってたよな？」

「……持ってるけど、通じないよ？」

「なんで？」

「いや、まあ、この時代に作られたやつではないからで無い？」

「そうか、そうだよな。そうか」

ニイジマたちからすれば、オレと頻繁に簡単に連絡が取れたほうが楽なんだろうけど。

「てか、ティアスの携帯にかければいいんでない？！」

「いや、まあ、あの人、携帯壊してるわけよ」

「そんなの、サワダのお父さんから渡してもらえば？」

「いや、まあ……」

「何だよ、何で言葉を濁してんだよ」

「いや、まあ、それとこれとは、また別って言うか……」

「べつ？」

「いや、まあ、頻繁に電話とかしてられない状況なわけよ、あの人  
は」

「オレだって、今日みたいにイズミに拉致られたりしてますけど」

「いや、まあ、とにかく、頼むわ」

なんか、急に怪しくなってきたな……。もしかして、オレに、彼女との連絡を取ってほしいわけではないのかな？

「何が目的？」

あえて彼のまねをして、オレは真正面からにらみつけた。

「いや、別に？」

「オレがティースと連絡を取る必要って、無くない？」

「いやいやいや。必要だよ？」

「そうか？だって、確かにニイジマたちが直接彼女を見て守ることは難しいかもしれないけど、連絡を取るだけなら、別に電話ですればいいことだし」

「いや、まあ」

ますます怪しい！なに考えてんだ、こいつ！！

「……つか、その……姫のこと、見といてほしいわけよ」

「は？なんで？」

「判るだろ？あの負けん気の強いお姫さんが、素直に人の手なんか借りないってことくらい。口では『頼りにしてる』とか『助けて貰ってる』とか言うけどさ、実際のところ、一人で何でもしちゃうって言うか、勝手に動いちゃうわけよ」

「なんか、それ、わかるかも」

『ありがとね、ユウト。引き受けてくれたんだ』  
？

彼女はそう言ってオレに感謝するくせに、支えるために、駆け寄ったオレの手を、やんわりと拒否をした。



「だろ？しかも、あんな大怪我しちゃってさ、心配かけんなって話だよ。カナさんはぶち切れるし、コウタはおろおろするばかりで、オレがこうやって根回しするしかないわけよ」

何だ、怪しいかと思ったら……端に彼女を心配してってことが。彼女との関係を円滑に進めるための根回しなわけね。

それならそうと、最初から言えばいいのに。もしかして、照れくさかったんだろっか。

「もしや、ニイジマって、ティアスのこと……」

「いや、ありえない、絶対無理。大体オレ、彼女いるし！」

「うへー初耳」

「そりゃそうだ、言ってるじゃない」

あ、そっか。あっちのニイジマではないんだった。聞いたこと無くて当たり前か。

新島って、落ち着いてる割に、なんか浮いた噂とか聞かなかったんだよな。

「誰？美人？オレ知ってる人？」

「美人だよ。会っただろ？」

「会った？？ティアスじゃなくてって……もしかして、サエキ大尉？あの人いくつ？」

「まだ28だよ。あの人、それ気にしてんだから、あんまり言うなよ？」

めっちゃ美人だし。こっちの時代なら、年は違っても女優だよ！すごくねえ？

「うーん、ティアスとサエキ大尉なら、結構考えてしまつかも。美人だしなあ」

「タイプぜんぜん違うし。綺麗なら何でも良いのかお前は」

「間口が広いって言うてくれ。綺麗なお姉さんも、かわいい女の子も大好きだ。選べって言われたら、難しいだろ？」

「まあな。でも、姫は、性格があれだぞ。面倒だぞ。悪いことは言わないからやめとけて。ああ見えて根暗だし」

彼はオレを茶化しただけだと思う。

でも、オレはその言葉に答えられず、黙ってしまった。

「もしや、本気だった？見掛けはかわいいけど、あれでも大佐殿だぞ？」

「まさか。だって、別人だし」

「ああ、携帯に残してあった『姫』ね。なに、そっちはまともなの？」

「まともって……。お姫様捕まえて、なんて言い草だよ。まあ、まともって言うか、優しかったよ。あんな魔物相手に立ち回るような子じゃないし。あんなにかわいくて、優しいなんて、最高じゃない？」

だけど。

だけど、どうしても、あの陰のある表情が、オレの心に引っかかる。

彼女と共有した秘密が、彼女を支配するはずの秘密が、オレを支配する。

オレの知ってるティアスでは無くて、こっちのティアスのことばかりを思い出す。

「あれに似てる女が、優しいとは思えんけど……」

悪態をついていたはずのニイジマは、いつの間にか消えていた。  
どうして？

辺りを見渡すが、見当たらない。何で急に……。

「アイハラくん。どこに行ったかと思ってた。こんなところに。一人？」

声をかけてくれたのはミナミさんだった。

そっか。そういうことか。彼女が来たから、姿を見られちゃまずいと思って、どこかへ隠れたんだ。言えよ、びつくりしただろ？

「一人です。もしかして、探しに来てくれたんですか？」

「ああ。殿下と……テツが心配していたから。シンがおいてきたと言って」

「で、ミナミさんが迎えに来てくれたんですか？ 女の人一人で、危ないですよ？ イズミがミナミさんを一人で外出させるとは考えにくいんですけど」

いや、軍人だから、そういう問題じゃないんだろうけど。他の男を捜しに、って言ったら、絶対止めると思う。

「シンには内緒で来た。テツが行くって言ってたんだけど、彼は怪我をしてるから。帰ろうか、この時間は、許可証がないと門が開かないから」

ミナミさんの気の使い方に、ティアスを思うニイジマのことを思い出してしまった。

「オレ、迷惑かけてました？」

白夜の中の公園を、ミナミさんはオレの先に立って歩く。見晴らしのいい安全な道を選んでいよう、城に向かうには、少しだけ遠回りだった。

彼女の腰に下がるレイピアを見てしまったオレは、彼女の後を恐る恐るついていく。軍人なのだから当たり前だし、あの城の中では慣れたけど、やっぱりこの物々しい格好とこの平和そうに見える町並みには違和感を感じてしまう。

「いや、君のせいじゃない。シンが悪いんだ。大方、君に酷いことでも言っただろう。どうしても、人に対して優しく出来ないんだ、あの子は。だから、その……おこがましい言い方かもしれないけど……」

彼女が口ごもる。固くて、不器用で、まじめで、ともすればきつい印象を与えかねない人だけど、彼女はまっすぐで優しい。たぶん、ここにいて誰よりも。

「大丈夫です。気にしてませんから。慣れました」

「申し訳ない。そういつてくると、助かるよ。でも、あの子も、君にはずいぶんなれてきたというか……以前ほど、頭ごなしに疑ってかかってはいないと思うよ」

「はい。オレも、そう思います。なんか、時々勘違いしそうになるくらい」

「勘違い？」

「そう。オレのいた時代の、泉真と。多分あいつ、サドっ気あるんですよね。それはこっちもあっちも変わらないって言うか。サワダに対して、異常なほど気を使ってるってこと以外は、まあ、概ねあんな感じだったし」

彼女が反応したのはサワダの名前と、イズミが彼に気を使ってるってとこにだろう。黙ってしまった。

「いや、その。ちょっと違うかな。こっちのイズミは、たくさんの敵と、護衛部隊のみの味方って区切りを持ってるけど、あっちの泉はごく少ない味方と、中間と、敵って感じだから。まだ遊びがあるかな。時代もあるかもしれないけど」

「そうだね。シンにはそういう意味での遊びが無い」

彼女自身も気づいたのか、無理やりいつものあの硬い笑顔を浮かべ、イズミの話をしてくれた。

「遊びが無いから、人にきつくあたることしか出来ない。昔から、そうなんだ」

「仕方が無い？」

「いや、そこまでは言わないよ。ただ、私のせいもあるから、私からきつくは言えない。殿下が嗜めて下さるから、最近はある程度少しマシになってきたほうだ」

「ミハマが嗜めて……」

「コワ！怖すぎるって！あのキラキラ王子様、顔と発言と物腰に似合わず、締めるとこはキツチリ締めるんだよね。やっぱ、あの王子様にはなんかあるよね。あのイズミが、窘められる、だって。」

でも、イズミがきついので、何でミナミさんのせい？

「あの、イズミとミナミさんって……付き合ってたわけではないよね？」

だって、この人はサワダのことが好きなのに。どうして彼女はこんなことを言うのだろう。イズミは、この人しか目に入っていないけど。

「まさか。弟……いや、出来の悪い息子……。そんな感じかな？」  
「ずいぶん色気の無い関係だね……」

ちよつとだけ、イズミが気の毒になった。

「だけど、あの子が望むなら、仕方が無いのだろう。私は、あの子の人生に対して、責任があるから」

「責任……」

彼女の言葉は重い。多分、オレだけではなく、イズミ自身にとつても。どんな責任かは知らないけれど、彼女のその言葉が意味するものは、おそらくイズミが求めているものではないはずだから。

イズミが、あんなにもミナミさんに執着してるくせに、距離を縮めているくせに、動かない理由が、少しだけわかった気がする。

好奇心だつて判つてた。この人たちは、それを排除して生きてきてるのもわかつてた。でも、聞かずにはいらなかった。

「責任つて？」

彼女は、まじまじとオレの顔を見た。まっすぐ城に向かっていた足を止めて。そうして、初めて、「仕方ないな」といった、諦めにも似た笑顔を見せた。

オレが知る彼女の笑顔で、初めてぎこちなさを感じ無かった。

「あの子は、私のせいで、自分のために生きられなかった。私のために生きてくれていた。今までも、そしてこれからもそうだろう。あの子は、いつも自分のためだといって、自分以外の誰かのために生きる。その誰かを、彼が選べればよかったのだけど、彼は自身の意思で選ぶことの無いまま、私のために生きることになった。だから、私は、彼の望みに出来る限りこたえる。それが、私が唯一彼に出来る報いだ」

この人は、どうして泣きそうな顔で、こんなに綺麗に微笑むんだろう。そんなの、ずるい。

「でも、誰かのために生きるのって、それって、自分がそうしたいからそうやって生きるんだと思うけど。イズミは、別にミナミさんのせいで、なんて思っていないと思うけど。あの男が、そんなことするとは思えないし」

「そうだね。殿下も、そうおっしゃっていた。彼が執着してるのは、彼が戦う理由は、彼と、彼の大事な誰かとのつながりのためなんだと。それを守るためなら、その世界のためなら、彼は何でもするし、してきたのだと。だから、彼の行為も、彼の思いも、彼以外の何者にも縛られてはいない。だから、気にする必要は無いと」

穏やかな表情で、ミハマを、イズミを思う。彼女を取り巻く、ぴりぴりした空気が、緩んだように感じた。ミハマの言葉が、彼女を動かしたのが、その場にいなかったオレにも、よく理解できた。

「だったら、私にも、彼とのつながりを大事にする意思があるし、彼の行為に報いようという自由がある。責任もあるし、その責任から逃れる言葉かもしれないけど」

彼女はそれだけはつきり言うと、再び、城に振り返り歩き出した。

04

黙ってオレの前を歩く彼女との沈黙が重くて、判っていながらどうでもいいことを聞いていた。

「そういえばオレ、夜、城の外に出たの始めてかも。あんまり、外に出してもらえないし」

「城の者は、ほとんど外には出ないよ？街の人も、このくらいの時間だと、殆どみんな外には出ない。君のいた時代は、こんな時間以外に出ていたの？」

「うん。て言うか……こんなに明るいと、夜って感じがしない。確かに、昼とか、朝に比べたら、ずいぶん空の色は違うけど、太陽が見えないのがおかしなくらいには明るいし。あ、でも、北欧にいた友達の話では……」

ティアスが、一時期ドイツにいたって話を聞いたことがある。太陽は完全に沈むけど、真っ暗にならない時期があるって言うっていた。多分、こんな感じなんだろう。夏だから、よく深夜に遊びに出かけていたと言っていた。

もう、時代が違う話とはいえ、ティアスの名前は出せないけれど。



「ホクオウ？」

「えっと……そっか。ほら、世界地図の西のほうに大陸が少し残ってたろ？あの辺のこと。オレのいた時代には、あの辺にでっかい大陸があったの。で、こういう白夜みたいなのってその大陸のすっごい北の方とか、南にも大陸があったんだけど、そのすっごい南の方であつた現象なんだって。だから、同じ日本でも、オレは白夜って初めてなんだよね」

「でも、深夜に歩いたら危ない。この季節は明るいとはいえ、深夜には魔物が出る」

「……あつ」

そっだ。深夜になると魔物が出やすくなるって言ってた。だから、店も、この時間に閉まるんだ。オレがいた店以外、ほとんど閉まってたし、店長が長居してたオレに嫌な顔した理由がちょっとわかった気がする。

「……あれ、この季節って……？？いま、冬じゃないの？」

ずいぶん寒いし、オレが元いた時代では12月だったから。

「白夜は、夏の間だけだよ？」

「夏でこんなに寒いのか？冬とかどうすんだよ！陽も落ちるのに！」

みんな長袖だし、コート着てるのに！

「そうか。うーん……寒いけど、まあ、何とかしてるよ。都市自体に暖房システムが働くから、今より少し寒いとを感じるくらいですごせるよ」

騙された気分です……。冬だと思ってた。そうだよな。白夜って、夏の現象だよな。オレ、大丈夫かな。この鍛えてる人たちと一緒にされても困るんですけど。でも、よくよく考えたらそうなるのか。地殻変動で緯度まで変わってしまったって、オレの知ってる世界とは随分変わってしまったているのだから。

何が辛いって、ほぼ、常に冬……？

「城の中は、貴族も多いし、かなり快適に出来てると思うよ、君にとっても。だから、あまり出歩かないほうがいい。今日は、シンのせいだったけど」

「そうですね」

確かに、あんまり厳しさは感じなかった。ミナミさんの台詞に、小さな棘を感じたのは、たぶん気のせいだ。

「でも、地殻変動があったからって、こんなに気候まで変わっているのか？ 同じ国とは思えないよ。町並みが似てるだけに、不思議な感じがする」

「そう。ホントに似てるんだ。地殻変動以前の町並みを残そうと、この国は努力してきたらしいから」

「そうなんだ。そういえば、シュウジさんがそんなこと言ってた」

「そうだね。あの方は、とても歴史にお詳しい。君が、あの方の知識を証明してくれることは、誰にも言えなかったとしても、嬉しいと思うよ。この町が変わっていく前で、本当によかった」

「変わる？」

彼女は黙って頷いた。

「聞いたろ？ 中王の政策により、古い街並みを残してはいけないん

だ。少しずつ変わっていつてる。君がテツと会ったN町は、中心部から外れているから、ほぼ昔のままだけど、この辺りは中王の監査も入る」

声を潜める。誰が聞いてるか判らないって言うのは、皆に徹底されてることなのかも知れない。

「監査って？」

「ああ、定期的に中王軍の者が各国に入るんだ。町並みのチェックばかりではないけれど。年に4回。季節の変わり目にね。次は3月1日だから、あと1週間だ」

「ふうん。抜き打ちとかじゃないんだ。それって、いつ、誰が来るとか、どこを見るところかってことも、事前に判ってるもんなの？」

「ああ、あらかじめ、統括本部から通達があるよ。次回は統括本部のサエキ大尉と西二ホン管理部のカツラ少尉相当官だったかな」

「……中佐、とか大佐、とかは来ないんだね」

「年に一回は来るよ。このじきはたまたまだよ。オワリは大国だから、監査の回数も多いし」

「じゃあ、他のもつと小さな国は、回数自体少ないってこと？」

「状況によるさ」

そういつて、彼女は少しだけ遠くを見つめた。

「誰が、どうやって監査してるなんて、誰も知らないんだから、ホントはね」

彼女の言葉の重たさが、痛いほどよくわかった。

思わず立ち止まって、オレは彼女を見つめてしまった。彼女もまた、オレを見ていた。その表情が、だんだん陰しくなってきた。

「……ミナミさん？オレ、また何か悪いこと……」

「動かないで、ゆっくり、私のそばに」

腰に下がるレイピアに手をかけていた。ゆっくりと抜いたその剣先は、可憐といえば聞こえは良かったが、弱々しかった。

「空？」

「ああ」

彼女と同時に空を見上げる。明るかったはずなのに、いつの間にか暗くなっていた。陽が沈んだわけではなかった。地平線は先ほどと同じく、昼と夕方の中間のような色だった。空の一点から、墨が染みこむように黒い色が広がっていた。

「まだ、やつは姿を見せてない」

彼女はそう言ったけれど、あの黒い染みからは、今にも何か出てきそうな、何か禍々しい生き物の気配を感じた。

「その間に一緒に走って出口に向かう。やつが現れたら、私が君と併走しながら、引き止める。その隙に君は一人で公園を出て、城へ入るんだ。これが通行許可証だ」

彼女の視線の先には、もう城が見えていた。でも、そう言われても。

「ミ……ミナミさんは？だって、空から来る魔物って、サワダだって手こずってたのに」

声が上がってしまったけど、ここで一人で逃げたら男じゃないで

しょう?!

「おそらく、大丈夫だ。倒せるかは判らないけれど。ただ、君を守りきれる保障はない」

冷静に分析されましても!

その言葉が、オレを逃がすための詭弁なのか、ただの分析なのかはわからなかったけれど、要するに、とにかく逃げた方が良いつてことね?まだ、敵の姿は見えないけど。

「走れ!」

彼女の合図で、走り出す。後ろから獣の雄たけびのようなものが聞こえたが、振り返ることは出来なかった。

05

「走って!」

いや、もう、走ってますけど!てか、それって……。

……見るんじゃなかった。彼女の声に思わず後ろを振り向いてしまったら、やっぱりいた。

なんて言ったらいいんだろう。動物的ではない。まるで、黒い雲の塊が、意思を持って動いているというか。煙よりはずっと濃く、強く、はつきりと存在感を放ち、後ろから追ってくる。

てか、何でもそもそも追いかけて来るんだよ!?

気配を感じるだなんて、テレビの中の世界だけだと思ったけど、はつきりと判る。ダンプカーが迫ってくるような、そんなイメージかもしれない。ただ、何かヤバイ感じだけがどんどん強くなる。

「うわ!」

いきなり、ミナミさんが無理やり公園の出口の方へオレの背中を押した。振り向くと、彼女はあの細い剣を構え、雲の塊と対峙していた。

「ミナミさん!!」

「いいから、早く!!」

「でも!!」

置いてけるわけ、ないだろ!? 確かに怖いけど、でも、女のヒトを一人で戦わせて、オレ一人逃げろだなんて、ありえないでしょ?!

「ミナミさん!!」

オレが彼女に近付こうと一歩踏み出したその時、彼女は雲の塊に吹っ飛ばされ、オレの足下に滑り落ちた。

「早く!」

背中を痛めたのか、ぎこちない動きで必死に起きあがっていた。

「でも!」

明らかにあの魔物に対して、抵抗する術がないんじゃないのか？  
だって、イズミやサワダが魔物との戦闘で、特別視されていたの  
で、要するに他の人では何とも出来ないってことだろ？

「一緒に逃げよう！無理！おいてけない！」

ミナミさんは黙って首を振る。

「私でも、何とか出来る。でも、君を守りきれないと言ったはずだ」

落ち着いた口調で、でも、率直すぎて心に突き刺さるような台詞  
を彼女は吐いた。

要するに、オレは邪魔ってこと？足手まといになるってこと？

彼女は、黙ってしまったオレを無視して、雲の塊のような魔物に  
向かっていく。

細い剣が、光を帯びる。剣よりも、むしろその光が雲を切り裂い  
ているように見えた。光の中に、暗雲が溶けていく。そのたびに、  
獣のような雄叫びをあげ、魔物が小さくなっていく。

彼女もまた、あの護衛部隊の1人なのだと。そう思わせるだけの  
実力だった。長い髪を振り乱しながら、暗雲が動物の手のような形  
を取って彼女に向かってくるのをぎりぎりの所で避け、少しずつ切  
り裂いていく。

切り裂いた雲が飛び散り、彼女の体をかすめ、オレの傍まで飛ん  
でくる。

「何をしてる。早く逃げろ！」

飛び散った雲を追って、彼女がオレの元へ駆けよってきたが、動  
けなかった。

「どうした!？」

「……いや……その」

揃ってオレの足下を見つめた。

雲のようだった魔物が、人の手の形を取って地面から生えていた。オレの足に絡みついていた。気付かないうちにオレの体にまわりついてきた。

「だから……」

言っただのに。

彼女はそう言いたかったのだろう。でも、オレの顔を見て、やめた。黙ってオレの足下に絡みつく、人の手の形をした魔物を切り裂いていく。

オレは本当に、ただの足手まといだ。

こんな状況なのに、心が重くて、動くのが辛い。

彼女の体を、雲が人の手の形を取ってかすめ、傷つける。でも、彼女は剣を振るう手を止めない。滲む血の痛みを意図的に無視しながら、オレを助けるために剣を振るう。

オレは何も出来やしない。

どうしたらいい？

「……ミ……ミナミさん……」

オレを置いて、逃げて。本当はそう言いたかったのに。彼女はそう言ってくれるのに。オレにはどうして言えないんだろう。

黒い雲はいつの間にか、コールタールで象られたマネキンのような姿をとって、ぎこちない動きでミナミさんの背中に近付いていた。オレの声と、震える指先が指し示すモノに、彼女は気付いて振り向いた。



「……っ！」

魔物の黒い右手が、ミナミさんを吹っ飛ばした。それと同時にオレの足に絡んでいた黒い手が、足に食い込んだ。まるで杭が刺さったような傷みが広がる。

「え?! うわ!!」

しかも、オレの血だらけの足から杭が抜けたような感覚があったと思った途端、一瞬黒い雲がオレの体を包むように広がり、再び手の形を取って実体化した。ただし、今度はオレの体を潰せるほど大きな手に。

押しつぶされたまま、鼻から黒い雲が入ってくるのが微かに見えた。アンモニアに似た、鼻をつんざくような匂いがある。

ヤバイ……オレ、死ぬのかな……。息が……苦しい。

06

ヤバイ……オレ、死ぬのかな……。息が……苦しい。

「……あれ？」

体が軽くなった。なんで？

……体に何か不愉快なモノが入ってきたような感覚が残ってて、気分は悪いけど。足も痛いし。

「ティアス！」

寝ころんだままのオレの頭の上に立っていたのは、まだケガをして寝ていたはずのティアスだった。手にはジャックナイフ。もしかして、こんなモノで魔物を？オレを助けてくれた？

「大丈夫？」

「とりあえず、生きてるけど……あの、ティアス」

気が遠くなりそうだ。だけど、この状況で、ティアスを目の前にして、これ以上かつこ悪いところは見せられない。

「サワダ中佐、ミナミ中佐は？」

え、サワダ？

「ミナミさんの傷が酷いからオレが連れてく。動けそうにないし。アイハラは……動けそうだな」

「この足を見て、それを言うか？」

この血！すげー出てんのに！

「そんだけ騒げるくせに、何言ってやがる」

「ユウト、落ち着いて。血はたくさん出てるからケガが酷そうに見えるけど、実際はそんなに深くないから。大丈夫よ。歩ける？」

サワダは横たわるミナミさんを気遣い、彼女の横に跪く。意識を失っていたらしい彼女は、サワダの存在に気付いて、大きく身を震わせた。

「サラさん、平気？」

「テツ……？どうしてここに？」

「いや、アイハラもちつとも帰ってこないし、サラさんも出かけたって言うから、こんなこつたるうと思つて。大方、シンがこいつを置いてきちやつたから、責任感じて迎えに来てたんだろ？心配したよ」

「心配？私を？」

彼女を抱きかかえるようにして、丁寧に起こすサワダの行為に、ミナミさんの表情は急激に変わる。女の子そのものというか、少女マンガみたいだった。こんなに判りやすく、人の顔って変わるんだなつて思ふくらい。

彼との距離を、彼の行為を、彼の言葉を、ミナミさんが異常なほど意識してるのが、離れた場所から見ているオレにもはつきりと伝わる。

……ティアスは……どう思ってるんだろう？

いや、関係ないか。こつちのティアスは、サワダのことなんて何とも思つてないんだから。ただ、どうして一緒にいたのか気になるけど。

「傷が酷いから、動かないでいて……聞いてる？サラさん？」

「あ……う、うん」

彼女はなすがまま、サワダに抱きかかえられる。子供のように真っ赤になって、顔を伏せていたが、残念ながら彼には気にした様子はなかった。

「毒を持つてるタイプではないみたいだから、大丈夫だとは思って  
ど」

「テツ、彼女は……？どうして一緒に？」

いま気づいたのか、ミナミさんはティアスの存在に怪訝そうな顔を  
する。

彼女は彼女で、相当複雑だろう。怪我をして寝てるはずの客人が、  
サワダと一緒に自分を助けに来たなんて。

「別に、一緒に来なくて来たわけじゃない。それくらい判ってるだ  
ろ？」

「そう言うことを言ってるわけではない。状況を聞いてるんだ」

真っ赤になつて俯いてるだけかと思つたら、ミナミさんはまっす  
ぐ彼を向き、彼を問い正す。ただ、またすぐに俯いてしまったけれ  
ど。

「空から来る魔物に対する抵抗力が、この国にはまだ無いようです  
けど？」

「……いま、そんな話はしていないし、この国にはテツ……サワダ  
中佐も、イズミ中佐もいますから」

「私の国でも、そのような魔物が出て、私はそのための抵抗力を持  
つために動いています。怪我をしてるからと言って、ここで寝てる  
時間はありませんから」

彼女は、サワダの肩越しに、じつとティアスを見つめていた。普  
段冷静なミナミさんらしからぬ表情だと思った。

「外に出ていた事に関しては、ご迷惑をおかけしています。でも、  
この件に関しましてはサワダ議員も了承済みです。サワダ中佐と

は、そこでたまたま会っただけです。私は、彼には疑われているようにですしね」

微笑を浮かべながら、ごまかすようにミナミさんに説明をする。そして助けを求めるように、サワダに話を振った。

少なくとも、オレにはそう見えた。

「よく判ってるみたいだな。良いから行こう、サラさん。傷が酷いんだから。オレがシンに怒られるよ」

「私は……その」

「大丈夫じゃないって。たまにはオレの言うことも聞きなよ」

惚れた弱みというやつか。彼女は、彼に何も言えない。この二人が例えば男女の関係ならば、明らかに男のほうは、何かをごまかしている態度なのに。

それに、何か疑わしいと思ったから、ミナミさんも突っ込んだんじゃないのか？何も無かったら、何も怪しくなかったら、納得するって。

「ユウト、平気よね？」

「え？うん……」

ホントは、かなり痛いんですけど。

「冷静だな、案外。もっと心配するかと思った」

嫌味たっぷりの表情で、彼はティースに笑いかけた。彼らの間に流れる空気は以前と同様に、緊張感のあるものだったけれど。ただ、明らかに何かが変わっていた。

「あなたこそ」

彼女は同じように含んだ笑顔でそう言って、彼女はオレの前を歩く。

それを、オレはおそらくかなり物欲しげな顔で見つめていたのだろう。

「きついなら、手を貸すけど？」

そう言ってくれたサワダの表情が、なんだか怖かった。そこに、オレは裏を感じてしまう。

「いや、大丈夫だって。ぜんぜん平気！」

「そう。ならいいけど」

彼女と彼は微妙な距離を保ったまま、城に向かって歩き始めた。

07

サワダはミナミさんを抱きかかえたまま、城の門番に許可証を見せ、城に入ってしまった。

「……あれ？ティアスは？」

「さあ。許可証を持つてるようには見えなかったけどな。どこに消えたんだか。怪しいことこの上ないな」

そう、彼は言うくせに、何だか嬉しそうに見えた。

オレの思い込みのような気も、ほんの少しだけしてたけど、どんな怪しさが増すんですけど。彼らの間に流れる空気を、疑わざるを得ない。いや、仮にオレの知ってる二人のような、そんな色気のある関係ではないにしても、彼らは何か秘密を共有しているようなそんな感じがする。いや、秘密を握られているというか。

「怪しいって言うくせに、なんか、楽しそうでない？」

門を通り抜け、ライトアップされた中庭を歩き、正面玄関へ向かうサワダの横に並びながら

「オレが？別に、楽しくはないさ」

やっぱり、サワダは楽しそうに見える。何より、彼に抱えられるミナミさんが、不安そうに彼を見ていたのだから。

「お前こそ、いったい何を疑ってんの？」

「何って……」

オレの様子がおかしかったのか、彼は吹き出し、誤魔化すように

「お前が言っただろ？『別の人間だ』って」

と言って、笑顔を見せた。ただ、その笑顔はとても、オレの知る沢田の父親に似ていたけれど。こっちのサワダ父は、まだよく知らないけれど。

以前、泉が沢田父を『存在自体がエロイ』なんつって、褒めてんだか褒めてないんだか、あまりにもそのままかつ直接的過ぎる、際どい言い方で表現していたけれど、その言葉がぴったりだと思った。男から見たら、微妙に不愉快な存在だ。

オレの知ってる沢田にもその片鱗はあつたけど、こんなにすくはなかったかな……。まあ、別の人間なんですけど?!

「お前こそ、何か知ってるんじゃないの?あの女について」

サワダはそう言ったとき、オレを見ずに目の前にある正面玄関の扉を見つめていたけれど、彼の肩越しに、ミナミさんがオレをじっと見ていた。まるで様子を伺うように。

「何かって……?オレが知ってるティラスは、こっちの女じゃない」「そう」

含んだ言い方だな。オレの答えは完璧だったと思うぞ?おどおどしてなかったと思うし。

どういふつもりか知らないけれど、彼はそれ以後、黙ったまま、ホテルそのままの自動扉を抜けた。

エントランスはいかにもホテルっぽいくりで、本当に昔のものを再現してるんだと感じたが、奥にあるエレベータールームにつながる部屋から先は、一見木製の扉をかたどった重い鉄の扉が聳え立っていた。ここであつたん客を受け付け、どこへ招き入れるか振り分けているのだろう。見た目がホテルなだけで、中は実はかなりしっかり管理されているのかもしれない。

500年もたつてはるはずなのに、何でここまでこだわるのか。オレが過去に執着するのとは違う。怨念にも似たものを感じていた。それは、なんだか、オレがこの時代のサワダ達全員に感じる、微かな違和感にも似ていた。

「おっと」



エントランス側からは受付で操作しないと開かないはずの扉が、自動で開いた。それに驚いて、ミナミさんを抱えたままのサワダが扉から距離をとった。

「遅いし！つーか、何でサラ、怪我してんの？！」

「おまえが迎えに行かないからだろうが。オレのせいじゃない。それより、医務室！」

「……テツちゃん、オレを怒ったな？」

不満そうな顔で、怒ったサワダではなく、オレを睨み付けながら、扉の横に設置されていた内線を手に取り、連絡を始めた。

確かに、オレが帰ってこなかったのが悪かったかもしれないけど、それは責任転嫁だろう？大体、元は外に連れ出しておきながら放置したお前が悪いんだし。

……とは思うものの、口には出せない。やっぱ、まだ怖い。でも、『怒ったな』って。子供か、こいつ？確かに子供っぽいところは多々あるけど。でも、それもわざとって感じもするしな。これも、イズミ曰くの『氣遣い』ってやつか？！

「本部の医務室が空いてるって。珍しく誰も使ってないみたいだ。担架出すって言うてくれてるけど、テツちゃんがそのまま抱えてった方が早いよね？」

受話器を戻し、歩き出すイズミ。それにサワダもついていく。

「お前が抱えていけばいい」

「テツちゃん、悪いけどそのまま。あまり動かしたくない。それより急ぐ」

ため息をつくサワダに、照れるミナミさん。すれ違いはしても、

サワダもイズミも、お互い妙に気を使いあっていて、ちょっとだけ心が和む。イズミは、彼女が好きなくせに、彼女がサワダを好きなことを知っているのだろう、あの過敏な男が気づかないわけがないし、好きな相手にだけはとことんまでに気を使う男だ。

でもそれが、自分から彼女が離れていってしまう結果になっても、それでいいと本気で彼は思っているのだろうか？

サワダは……案の定、鈍かったな。イズミに気を使ったつもりだったんだろう。ぶっきらぼうで不器用だ。それが妙に、オレの知ってる沢田を思い起こさせる。あんなに含んだ言い方が出来るくせに、ずるいよな。

これが、オレが彼らに感じてゐる違和感なのかな？

「アイハラくんは？」

黙ってついてくるオレを気にしてくれたのは、ミナミさんだった。

「自分の怪我が酷いときに、あんな迷惑なお子様のこと気にしないでいいって。てか、アイハラ、怪我してんの？」

畜生、いつものイズミに戻ったな。このやろう。わざわざ後ろからこっそりついてくるオレのそばに寄って嫌味な顔で笑っていた。こいつ、へらへらしやがって、笑ってればい冷たいこと言ってもいいと思ってやがるな、たちの悪い。

「してるっつーの！見る！この大量の血を！」

「たいしたことないって、こんな。大げさな」

「血はたくさん出てるからケガが酷そうに見えるけど、実際はそん

なに深くないから』

彼女のあのセリフは、パニックってるオレを落ち着かせるためのものだと思ってた。

「その程度の判別も出来ないの？」

「出来るか！オレのこと、何も出来ないつつたの、イズミじゃんよ！」

「敬称つける！まあ、自己分析は出来てるようで、何より？」

またしても嫌味ぽく笑うけど、オレはいま正直、イズミなんてどうでもよかった。

「シン！何も判らないと判っているなら、もう少し考える。アイハラくんに当り散らすんじゃない」

まったくだ。やっぱり、ミナミさんは優しい。それに引き換え、イズミは冷たい。でも、彼の言ってることは、ティラスと何も変わらない。言い方だけだ。

「だって、こいつ、ぜんぜん平気でしょ？大体、歩いてんだもん。こんなん怪我のうちに入らないって。甘えてんの」

『ユウト、平気よね？』

『冷静だな、案外』

でもティラスは……彼女だけは、オレの知ってるあの子と変わらず、優しいはずだ。

「そういう話をしてるわけじゃない。もう少し優しくできないのか

！  
」

それがたとえ、別の人間だったとしても。彼女だけは。

08

それがサワダの気遣いなのか、オレにはわからなかったけれど。彼はミナミさんを医務室まで連れて行った後、医務室の先生に状況報告をして、彼女に精一杯優しくしておきながら

「オレ、ちょっとミハマに報告してくるわ。ミナミさんのこと、頼む」

とだけ残して、彼女の手当てを手伝うイズミが制止も聞かず、医務室を出て行ってしまった。

彼女は、彼にいて欲しいんだと思うけど、そういうところの判らない男だな、ほんとに。

「待たせてしまって申し訳ない。災難でしたね。客人のお名前は何と言いましたか？」

ミナミさんの手当てを終え、彼女をベッドに寝かせた後、座って待っていたオレに先生が話しかけてくれた。イズミはもちろん、オレの方など振り向きもせず、ミナミさんの横につきっきりだ。

浅黒い顔にたつぷりの白いひげを蓄えた、初老の男性だった。白衣を着ているからよく判らないけれど、かなりいい体格をしている。

「アイハラです。すみません、こんな夜中に」

「はは。良いですよ。この季節は何時間でも残業してられますから」

えっと……なんか、そういうジョーク的なものは、感覚が違いすぎてよく判らないんですけど。

「それだけ、人に気が使えれば大丈夫だ。怪我をしたのは足だけですか？サワダ中佐のお話では体内に異物として魔物が侵入してきたとか？」

「え？はい。でも、もう別に。ちよつと、違和感が残ってるくらいで」

サワダのやつ、あの状況でよく見てるよな。でも、見てたくせに、オレを助けに来たのはティラスだった。それって……。

「毒のない魔物だと中佐はおっしゃっていたけれど、ちよつと見せてもらえます？私は魔物の影響に関しては専門ではないから、何とも言えませんけど……」

「あの……毒がある魔物の場合は？」

「え？そりゃあ、ものにもよるけど、なんともしようがないよ。今の医療じゃ、どうしようもないから」

この人、ほんとに医者？？笑い飛ばしちゃったよ。

「そんな当たり前のことを聞いて、どうしよう？そんなに心配しなくても、中佐がきちんと状況説明をしていってくださったから、対処できるさ。あの方は若いが魔物の対策に関してはスペシャリストだから」

そうか。オレが何も知らないってこと、知らないわけだもんな。

余計なこと言ってしまった。

「あ、でも、それなら、イズミ中佐も……」

「サワダ中佐のおっしゃることですからね」

なんか、引つかるな。嫌な言い方。

喋りながらも、喉の奥を見たり、目の中をのぞいたり、足の手当てをしたり、と手際は良かった。良かったけど、なんか、ながら作業ってどうなんだよ?!。

「足の傷だけのようですね。傷も深くないので、1週間もあれば完治しますよ。歩くのにも支障はないようですし。それから、体内に異常はないようです。無理やり侵入されたから違和感残っているでしょうが、痕はない。ただ、新しいタイプの魔物のようなので、しばらく様子を見てください」

「ありがとうございます」

と言っでは見たものの、なんか、納得いかないな。これで良いのか？

不満を思わず顔に出していたら、奥のベッドから、イズミがオレを手招きしていた。

「ちょっと、彼女の様子を見に行っても良いですか？」

「どうぞ」

ひげ面の軍医は常に笑顔の気さくなおじさん、と言った感じだったが、オレはどうにも好きになれなかった。

「何だよ。ミナミさんは……?」

「大丈夫だよ。きつともうすぐ殿下がいらっしゃるから」

ベッドで横になりながら彼女はかすれた声でそう言った。いつもの硬い笑顔を見せながら。

反面、イズミはむっとした顔で、軍医を睨んでいた。

「余計なこと、喋るなよ?」

「え?……あの人に?」

椅子に座ったまま、声を潜めて話すイズミにつられ、オレも彼らに顔を近づけ、小声で話す。

「何で?」

「別に、ミハマが来たらわかるさ。テツのやつも、余計な気を使いやがって……」

「その……テツのことだけど」

彼女が体を動かし話を始めようとしたので、彼は彼女を抱えるようにして優しくもとの姿勢に戻してあげていた。

「テツがどうかした?」

「彼女と……サワダ議員の客人と一緒に、助けに来てくれたんだ」

「一緒に?何で?つか、何であの子、外に出てるの?大体、まだケガが酷いくせに?」

「わからない。後で確認しようと思ったけど。お前も何も聞いてないのか?」

「聞いてないよ。アイハラ、お前、なんか知ってんじゃないの?」

「知らないよ」

「そうだね。知らなかったら、突っ込まない」

オレを睨むイズミを制すように、彼女がフォローを入れてくれ

た。

「でも、こいつは」

「シン、今はアイハラくんの話じゃない。そんなに彼を責めるな。彼は何も知らないよ。彼女が外に出ていたことに関しては、サワダ議員に確認したほうが良いだろう。彼女の行動に関しては、現在後見である彼がすべての権限を持っているし、彼が口を利けば、外に出ることも、行動の自由も得ることが出来る。それだけの話だ。ただ、そうなってくると」

「そうだね。テツの言ってた説は、結構濃厚な気がするな。何で一緒にいたかは微妙だけど」

ちらつと、イズミが彼女を伺う。多分、彼女もオレと同じで、あの二人の仲を疑ってる。でも、オレが彼らを疑う理由と、彼女が彼らを疑う理由は確実に違うはず。何で、彼女は彼らを疑っているんだろう？

「あの二人って、もしかして、仲良い？こないだ、二人きりで部屋にいたのを見たけど」

「さあ？テツは何も言わないし、あの人そもそも女嫌いだし。その割には、まあ、よく話はしてるみたいだね。ミハマが彼女のところに行くのについていてたんだけど、慣れたんだか、二人でも平気みたい」

そこまで言うてから、彼は彼女を気にして、話すのをやめた。オレの知らないうちに、いつの間にか、彼らは近づいていたってことか？

「ミハマはティアスのこと気に入ってた」

「だね。珍しく……っ！か、初めてじゃない？あんなにご執心なの。



可愛いもんだけど。まあ、あんまり良いこっちゃないけどね。あの人の息がかかってるなら。テツの言う説がホントなら。テツがあの子と仲が良くなるなんて、考えにくいけど？ねえ、サラ」

彼女に対する問いかけが、どんな意味を持っていたのか。彼女は黙って頷いた。彼女が二人の仲を疑っているといズミはわかってるくせに、ああいう言い方をする。だけど、その様子は、さっきみたいにサワダに花を持たせる行為に比べたら、ずっと自然な気がした。

彼女のこと、欲しいと思ってるなら。

09

時計が深夜2時を指していたけれど、外は夕暮れのままだった。城の中は随分静まりかえっていたはずだけれど、医務室の扉の外が急に騒がしくなった。

「全く、あなたはホントにどうしようもないですね。わざわざテツが報告しにきたんだから、おとなしくしてなさい！」「だって、心配だろ？？シュウジ、五月蠅い！」

ミナミさんの傍らで、イズミが声を殺して笑っていた。中に入っ  
てこないのに、誰がきたかすぐに判るって言うのは凄いつつーか…  
…バカだな。

「これはこれは殿下。こんな夜更けに」

軍医は襟を正し、満面の笑みで扉を開け、敬礼をした。判りやすく態度が変わったのを見て、イズミの言いたいことが判った。

「いや……それより、ミナミ中佐は？」

子供のように言い争っていたのを見られて恥ずかしかったのか、ミハマもシュウジさんも2人揃って咳払いをしてから、営業スマイルで軍医に答えた。

「ええ。奥のベッドに。傷は大したことありませんが、しばらく安静にしていた方がいいですね」

「そう。ありがとう。こんな夜中に悪いね」

軍医の態度の変化を知ってか知らずか、ミハマは笑顔を見せ、彼を労った。そのミハマの後ろで、シュウジさんは黙って、彼らの様子を見ていた。

「……テツ、いないな。てっきり一緒に戻ってくるかと思った。いつもなら、シュウジさんと一緒にミハマのことを怒ってるのかなのに」

イズミが隣に立つオレに聞こえるかどうかと言った声で呟いた。多分、ベッドに横たわるミナミさんには聞こえていないだろう。でも、彼の言うとおりだ。ここにサワダがいないのは、何だか不自然な感じがした。

「サラ、大丈夫？」

ミハマは心配そうな顔でオレ達の元へ駆けよってきた。その様子を、軍医は眺めていた。隣に立ったままのシュウジさんを気にしながら。

「ミ……殿下。申し訳ありません、こんな時間に」

「いいよ。心配だったし」

彼もまた、ちらっと、軍医の方を見た。それはホントに一瞬のことであったけれど。

「誰一人、欠けてもらっても困るから」

その台詞は、果たして誰に向けたモノなのか。彼の台詞と笑顔に、何より、誰より喜んだ顔をしていたのは、イズミだった。

「殿下、サワダ中佐はどうしました？」

軍医がいるせいか、イズミが気持ち悪いくらい丁寧ミハマに話しかける。

「後から来るって言ってたけど。ちょっと、用があるって言ってたから」

「用事？こんな時間に？」

「うん。……スズオ力准将！」

ミハマが、軍医の隣で煙草を吸っていた（ここ禁煙だと思うけど）シュウジさんに声をかける。それを合図に、シュウジさんは軍医に人の悪い笑顔を向けた。

「申し訳ありませんが、席を外していただけますか？殿下のご命令ですので」

「え？は……」

「殿下のご命令です」

軍医は敬礼をし、医務室を出ていった。それを見届け、シュウジ

さんがオレ達の方へと歩いてきた。

「あの人、医者なら偉いんじゃないの？年もそれなりにいってたし。まあ、ミハマの命令って言われたら退くしかないだろうけど。階級章、見たこと無いヤツだった」

「ああ、そうですね。軍医はまた別の階級になりますから。彼は軍医少佐ですから、上の方ではありますね。こんな夜に出てくるような階級の人ではないんですけどね」

彼は説明しながら近付いてきたが、さすがに煙草の火を消してから、ベッドの横に立った。

「そう？テツちゃんの名前出したら、喜んで準備してくれたよ？」

不愉快そうに答えたのはイズミだった。そう言えば、内線かけたのは彼だった。

「まあまあ。いつものことですよ。シンが怒ったところで、彼らが変わるわけではない。もっと建設的に、復讐することを考えた方が」  
「復讐を建設的に考えてどうするんだよ」

ミハマが溜息をつきながらシュウジさんに突っ込む。この人も、頭がいいんだか、何だかなあ。

「サラ、無事で良かったよ。先生には連絡してあるから、もう少しゆっくり休めと思うよ」

「ありがとうございます」

先生は、外にいますけど？もしかして、以前サワダの話をしてたときに言ってた「先生」かな？サワダの主治医みたいなもんだと思

つてたけど、もしかしたら、この人達にとって気心の知れてる医者  
ってことかも。

イズミやミナミさんは、階級が高くて、この国では扱いが悪い。  
あくまで相当官であつたり、出生が違つたり、なんて言うくだらな  
い理由ばかりだけだ。

「動かしても良いらしいから、明日には部屋に戻ろう。今夜はオレ  
がここにいますから」

彼がこんな穏やかな笑顔を人に見せられるのかつてことに、オレ  
は驚いていた。開いた口がふさがらない。イズミは、ミナミさんを  
安心させるために、優しい言葉を彼女に聞かせる。

「そうか。悪いな」

それに対して、ミナミさんも優しく微笑んだが、あつさりしたも  
んだつた。うまく行かないもんだな。これが、サワダ相手だつたら、  
彼女の態度は全然違つていただろうに。

「とりあえず、テツがもう一度、顔を出すと言つてたので、それま  
で待ちましょうか。アイハラくん、その窓開けてくれますか？」  
「あ、はい」

オレに指示しながら、シュウジさんは煙草を取り出した。怪我人  
いるのに吸う気だよ、この人。あと、オレも一応怪我人なんですけ  
ど。動けるけどさ。

仕方なく、言つとおり窓を開ける。ベッドからはちよつと離れ  
てるから、まあ良いか。

「てか、ちよつとくらい我慢できないのかよ？まあ、良いけどさ。

せめて、そっちの奥で吸ってきてね。換気扇の下。アイハラ、ついでにあっちの窓も開けて」

「人使い荒いな」

文句を言いながら窓を開けた。位置関係がよく判らないけど、中庭と、その奥にある温室が見えた。確か、反対側は訓練場に直結してるから、こちらは穏やかなもんだった。客間もこちらに面してるはずだ。まあ、医務室が訓練場側や墓場側にあつたら、落ち着かないだろうけど。ここは3階だから、けっこう下の様子がよく見えるし。

深夜の夕暮れの中、奥にある温室を囲む木々の間を縫って歩く2人の影が見えた。

見間違えるはずがない。ティマスとサワダだった。

10

何で？何でティマスとサワダが……。

勘弁してくれ。もしかして、オレが危惧していたとおりになったってことか？あいつら2人、あんなこと言うくせに、こそこそ会ってるってコトかよ。こっちでまで？

どうしたらいい？どうしてやろうか！ちくしょう。こんなコトつてあるかよ。ティマスは、あんなにオレに優しいのに。あんなに可愛い顔を

見せてくれるのに。

「何、どうしたんだよ？アイハラ」

その声に、思わず振り返ってしまった。しかし、その時にはもう遅かった。イズミがオレの後ろに立っていた。オレ、そんなにおかしかった?!

いや? 良いのか? 結果オーライか? サワダとティアスがこそそ会つてること、ミハマが知ることになるんだから。そうしたら、多分、こつちのサワダなら彼に気を使いそうな気もするし。

「外になんかあるの?」

ミハマもまた、イズミの様子なのか、オレの様子なのか、とにかく不審に思ったらしく、立ち上がった。

「いや、別に。夜は危ないから、やっぱり閉めとこうか。シュウジさんが外に出るっつーことで」

「私が危ないのは良いんですか?!」

しょ……証拠隠滅した! この男!! 笑顔のまま、何も見なかったフリをして、彼は窓を閉め、オレにもベッドの横にある椅子に座るように促した。その笑顔が、怖かった。

なんだそれ、意味が判んない。

『テツちゃんと彼女がどうにかなるなんてあり得ないし、何よりミハマが興味を持ってるし』

そんな風に思ってるくせに、黙認かよ。だったら、オレからミハマに……。

「ミハ……」

「アイハラ、怪我、どう?」

オレの言葉を遮るように、声を掛けてきたのは他でもない、イズミだった。

「え？いや、もう……平気だけど」

「だよな。軽かったし。かすり傷だったから、血が止まれば大したこと無いだろ？出歩ける？」

オレの首根っこを掴み、引っ張るイズミ。それをミハマとミナミさんが制止しようとしたが、無視して、彼は部屋の外にオレを引っ張り出した。

扉の外には軍医とイツキさんがいて、何か険しい顔で話をしていた。

「シ……イズミ中佐、どちらへ？」

イツキさんの表情が、にわかに明るくなった。それに、イズミも笑顔で答える。

「ちょっと、彼にお話が」

軍医の手前、オレの首根っこを掴む手を離してくれるかと思ったのだが、逆に彼はその手に力を込めた。そして、彼の様子を伺いながらいつもの嘘臭い笑顔を見せた。

「申し訳ありませんが、彼女にも中に入らせるよう、殿下から言付かっておりますので」

「そうですか。申し訳ありません」

彼女は中尉で、彼よりも位は下に当たる。何を話していたかは知らないけれど、どうせその内容は、イズミがオレの首に力を込める



程度のモノだろう。聞きたくはなかった。

イズミが後ろを振り返らず、オレを引っ張って廊下を進むのに入れ替わりに、イツキさんが中に入っていた。その様子を、軍医は眺めていたが、どんなつもりだったのかはオレには判らない。

「なんだよ。いいかげん、離せって」

随分、軍医の姿は遠のいていたのに、イズミはオレの首根っこを掴んだままだった。どうやら、離す気はないらしい。猫のようにオレの首を掴んだまま、気にせず引っ張り続けた。

「いま、見たこと」

歩き続けて、もう、城の中央にあるエレベーターの前まで来たとき、やっとイズミは立ち止まり、口を開いた。

「サワダとティアス？」

「口外無用な」

「なんで？」

「なんでも。平和のためさ。何事も、タイミングが肝心なわけよ」

にやっと、人の悪い笑みを見せた。それって、つまり……

「伝えないわけじゃないってこと？　つか、お前の心持ち次第ってこと？　全て」

「そんな、オレがいつ上から見たよ？」

「いつもだよ」

わかんねえな。イズミって、肝心なところは煙に巻くんだ。思わせぶりの台詞と、思わせぶりの態度。心を見せてるフリをしながら、

簡単に人を突き落とすし。

こうやって、オレにはそんな風に言うのって、オレのことを同じ目線で見てるのかと思えば、やっぱり上から目線だし。

「何が平和になるんだよ。お前の言うことは意味が判んない」

「てか、アイハラ的には何で平和になると思えないのさ？」

「サワダとティアスって、どう見たって怪しいよ。こそこそ2人で会ってたり、一緒に外に出ていたり。それ、イズミは知ってたのか？」

「半分くらいね」

「ミナミさんは知らなかったのに？見た？あのミナミさんが嫉妬してんの」

「お前もね」

「オレのことは置いとけよ」

「何で？アイハラだって、充分すぎるほど、嫉妬してるから、そうやってテツにばっか食いつくんだろ？だって、ミハマだって彼女と二人で会ったりしてるのに、それは気にしないんだ」

「色気の問題じゃね？」

オレから手を離し、突き飛ばすように体を離す。あまりに乱雑な扱いに、ちよっとだけ傷ついたぞ、この野郎。

「……まあ、ミハマじゃあな。色気ゼロ。彼女といっても、ままことみたいななんだもんな」

「サワダは存在がエロイのに？」

「そうそう。……て、何でそんなこと」

「オレの知ってる泉も、そう言ってたんだよ。沢田本人でなくて、沢田父のことだったけど」

「あ、そう。あの親子もな。本人、めっちゃ嫌がるから、似てるとか言っとなよ？」

そうやって、サワダに氣遣うくせに？なに考えてんだ？  
思わず、不審な目で彼を見上げた。

「誤解の無いように言っとくけど、オレ、テツのことは敵だと思ってるから。まあ、いまは一応、味方なんだけど」

「……なんだそれ。意味が判らん。イズミって敵に氣遣うのか？あんだだけ、護衛部隊以外のヤツに対して、酷いくせに？それ以上にサワダに、氣持ち悪いくらい氣を使ってるぞ、お前って」

「使ってるさ。テツにも、ミハマにもね。でも、敵だよ？その方が自然に見えるだろ？」

イズミの言ってることも、判らないでもない。だけど、そんな不自然なこと、あっても良いんだろうか。

不自然に見えるのは、オレが彼らに、まだ過去との繋がりを求めているからだろうか？

### 第3話 続・支配するもの、されるもの

01

エレベーターの前で待つこと30分くらい。その間、イズミはサワダの話には触れず、くだらないことを延々と喋り続け、オレもあきれながらそれに答え続けた。

「何してんだ？お前ら？」

エレベーターから出てきたサワダの姿に、オレは心底胸をなで下ろした。

同時に、彼を嫉妬の目で睨み付けてしまっていたけれど。

「コイツを連れ出してただけだよ。みんなまだ医務室にいるから、行こうか」

「？ああ、そう」

オレの背中を突き飛ばすように押し、エレベータに突っ込んだ。中で転けてしまいそうになった体制を整えているうちに、扉が閉まった。

「なんだよ、一体！！」

いじめか？これはいじめか？つか、上の階に行きたいのに、勝手に下に行ってるし。ボタンくらい押させるよ。サワダがDMなら、イズミはまさにDSだろうが。自覚してんのか、あの男は！

1階に到着し、扉が開く。開いた扉の隙間から誰かの姿が見えたとき、何だか気まずくて思わず顔を伏せた。もう、みつともないよ

な。ボタン押し間違えたみたいで。

「どうしたの、ユウト？ 医務室に行っただんじゃないの？」

乗ってきたのはティラスだった。降りようとしないうちを不審な目で見ながら、一緒にエレベーターに乗った。

「乗るとき、サワダとすれ違った」

「……そうなんだ」

その間は、無いよな。まあ、完全に判ってての嫌味だったから、仕方ないかも知れないけど。

だって、このタイミングは……無いだろうよ。もう少し気を使えよ、2人とも。あからさますぎるだろ？ 少なくともエントランスまで、彼らは一緒だったはずだ。

「さっきは助けてくれてありがとう。でも、途中で消えちゃったから、心配してたんですけど」

「あ、そうだね。ごめんね。でも、あの人達、私のことあんまり信用してないって言うか、ものすごく疑ってるから。余計なこと聞かれないうちに、と思って」

「消えちゃう方が怪しまれない？」

「でも、それならどうやって出てきたんだって話になるじゃない。一緒に戻る必要はないし」

なんか、納得出来るような、出来ないような。

「サワダと、一緒に助けに来てくれたから、一緒に出てきたのかと思った。その方が納得できる。あいつ、あんなんでもここのおエライさんみたいだし」

行為を肯定してやれば、話を聞きやすくなるんだって、オレの知ってる泉は言ってた。

もしかしたら、こっちのイズミも、そう考えながら話してるのかも。

「違うわ。たまたまよ。出てきたら、会っただけ」

「なんで出てきたの？」

「何でそんな風に聞くの？」

ちよつと、不機嫌な顔を見せる。その様が余計に怪しかった。

「なんで出てきたの？」

「……だって、魔物が出てきてるでしょ？この国は。まだ、対抗力がほとんどないに等しいじゃない」

「ニイジマ達と連絡とりづらいつて言ってたくせに、こんなに出歩いているの、おかしくない？」

「前よりは、とりやすくなってるよ、私のケガが治ってきてるんだから」

彼女は笑顔一つ見せず、むつとした顔のままですう吐き捨てた。扉をじつと睨み続け、エレベーターがついた途端飛び出した。

「え？あ、ごめんって！」

追いかけようとオレも出たけど、さすがに足が痛くて走れない。てか、ティアスもまだそんな、走って良いような体じゃないはずなんだけど。戦うなんてもつてのほかのはずだし！はずなんですけど……。

オレが弱っちいのかな……。それとも、ティアスがものすごく無

理をしてるとか？

ああ、もう……しかもものすごく怒らせちゃってるし。

余計なこと聞きすぎた。でも、怒るってことは、やましいことがある証拠、なんだよな。隠さなくても良いじゃんよ。いや、隠すなら、もっと完璧にしてくれよ。オレがへこむ。

なんだこれ。オレ、こっちのティアスのことが好きだったわけじゃないはずだろ？オレが好きなのは、オレにもみんなにも優しいあつちのティアスだ。

確かに、こっちのティアスならフリーだし、オレだけが彼女の秘密も握ってるし、落とせるかもって思ってた、頑張ろうとは思ってたけど。

それにオレは絶対、元の時代に戻るつもりなのに。

なんでこんなに、彼女に振り回されちゃってたんだよ？！

02

早く、戻らなくちゃ。

あちらとこちらの彼女の存在が、オレを急かす。

オレの記憶に残っている最後の彼女の存在を、必死に思い出す。

それにすがりついているのが、はっきりと自覚できる。

早く、帰りたい。こんな所にいたくない。

足取りは重かった。自分でもびっくりするくらい、体が動かなくて、それでも何とか部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。塞いだはずの傷口から、包帯越しに血が滲んでいた。その血が、傷つき、横た

わっていたミナミさんの姿にかぶる。オレが、あんな目にあつたら一体どうなってしまうんだろう。

この世界には誰もいない。ティラスも、サワダ達も、所詮はオレの知らない連中だ。

だけど彼女だけは、……ティラスだけは違はずだった。それなのに。

「アイハラ？起きてる？」

ノックと共に聞こえたのは、ミハマの声だった。こんな時間に、王子様が何やつてるんだよ。出ないわけにも行かないので、足を引きずりながら扉を開けた。

「ごめん、寝てた？足のケガをサラが気にしてたから」

そう言つて彼がオレに手渡したのは、換えの包帯と傷薬（ちなみにかなり怪しげな色をしていたのだけれど）だった。オレは彼に中に入るよう促し、椅子を勧めた。

「ミナミさんが？自分もあんなにケガしてたのに？オレのケガなんか大したこと……」

「シンがアイハラのことを引っ張つてたからさ。無理はしちゃダメだよ」

だからって、わざわざミハマが来るか？

「あ、オレがここに来たこと、シュウジにもシンにも言っちゃダメだよ。軽はずみなことするなつて、五月蠅いんだ」

「うん。だいぶ軽はずみだと思う。確か、王子様じゃなかったっけ？」



「王子様だよ？それでも」

笑い飛ばす。彼の持つ雰囲気はまさに王子様と言わんばかりの、オーラのようなモノを持っているのだが、行動が伴わない。

「ごめんね。多分、振り回されていると思うけど」

「え？」

「オレからも、言っとくから」

「……別に。だって、ミハマのために動いてるだけだろ？あの人達。別に、なんも悪いコトしてないし」

ふてくされたようにそう言ったオレに対して、ミハマは笑顔を見せる。

「そうだね。でも、それがアイハラにとっては良いことでも、悪いことでもある。そう言うもんだろ？だから、そんなこと、言わなくていいって。ありがとう」

……やば。今、ちよつとどきつとした。男相手なんですけど。そう言うことさうつと言う？！こんな真つ直ぐで、優しくて、いい人で……。あいつらが彼のために何かしようって頑張るのも判らないでもない。

『口外無用な。平和のためさ。何事も、タイミングが肝心なわけよ』

イズミはああ言ってたけど。でも、ミハマに今の状況を知らせなくて良いのか？オレだって、あの2人のことが気になる。だったら、彼の置かれている立場ならなおさらだ。

ミハマとサワダの距離。彼の、彼女への思い。

下心が、あわよくばという思いが、無いとは言わないけれど。

「……サワダって、ミハマと仲良いんだろ？ 臣下だけど、幼馴染みだって」

「うん。何？ 突然」

「だったらさ、同じ女の子を好きになったりしたこととかないの？ 一緒にいたなら、会う子も一緒なわけだろ？」

ミハマは腕を組んで考え込む。考え込むようなことじゃないから、彼なりのパフォーマンスなのかも知れない

「無いかな、そう言うの。オレ達、好みが随分違うから」

「なるほど。ミハマは、サトウさんはタイプじゃない……と」

「あはは、そうなるね」

「あ、ごめん。ここの人たち、彼女のことに触れたがらないから」

でも、ミハマなら、笑い飛ばして話を聞いてくれる気がしていた。彼が一番気にしているだろうけど、彼が一番、受け皿が広いというか。ずるいかも知らないけど、彼にこっそり聞くのが一番良いかも知れない。探り探りだけど。

「神経質に見える？」

「少し。でも、ここに来てから、サワダとサトウさんが一緒にいるとことか見たことないし。あれかな。昔つき合ってたけど、今は別れてて、サワダが気にしてるから、周りが腫れ物扱い……とか？」

ミハマは、ただ微笑むだけだ。

「ほら、なんて言うの。こう、一般的に考えてって言うか。やっぱ、元カノ元彼とか気にするじゃんね？」

「そうだね」

「だから……かな？つて。違うみたい？」

やっぱり、微笑むだけだった。

「あのさ、言にくいのかも知らないし、知らせたくないのかも知れないけど、でもさオレも、どうやって気を使って良いか、判んないんだよ……」

「そっか。そうだよな。ごめんね。でも、テツとサトウさんて別に何も無いんだよ。サトウさんが好きなのは、テツキさんだしね。でも、ちよつといろいろあつてさ」

あれ？今、さらつとスゴイこと言わなかったか？

テツキさんて……サワダの父さんだろ？ミハマが敵視してる数少ない人間だろ？！しかも、サトウさんがサワダの好みとか何とかも簡単に肯定するし。

えつと、重いつつーの！

03

待て待て、自分。あつさりミハマがこんなコトを言ったとは言え、こんなにおろおろしてどうする。別に、サワダがサトウさんを好きで、サトウさんがサワダ父を好きでも、別に彼らの間に実際に何かあつたわけでもないし、

……何かあつたらどうしよう。なんか、こっちのサワダ父って、いろいろ悪いコトしてそうなんだもんな。だとしたら、あいつらがあんなに気を使ったり、サトウさんのことを敵視したりする理由も判らないでもない。極端だとは思うけど。

「どうかした？」

「いや。別に。なんか、ごめん。変な話、させちゃって」

「何で？どうしようもないし、アイハラ言うとおりでしょ。知らないきや気も遣えないし、知らないことで怒られてるのは割に合わないよ」

この立場の人に、そう言ってもらえるのは本当にありがたいけど、でもミハマって、ホントの所どう思ってるんだろ。だって、ティアスのこと……。

そう言えば、この人、気があるような台詞を簡単に言ってたわりに、生々しさがないな。

「ミハマって、サトウさんのこととか、ホントはどう思ってるの？王子様じゃなくて、ミハマはさ」

「難しいこと言うね。でも、王子であるオレも、普段のオレも、オレなんだけどね」

「だけど、本音って隠してない？特に、立場があるんなら」

「隠してはいないよ。黙ってはいるけど」

そう言うのを隠すって言うんだよ。

「みんなが気を使ってくれてるとおりだよ」

珍しく彼は目を伏せ、微笑んで見せた。微笑んでるはずなのに、その姿はきれいなのに、怖かった。

「ああ、そう。相当極端だよ、それって。違う？」

「極端……かもね。なんと言ってくれてもいいけれど」

「開き直っちゃってるよ……」

何があつたんだ。聞きたくもないけど。

彼女がサワダに、なんかしたってことだよな。だから、ミハマは怒ってる。それを、あの人達は気を使ってる。彼ら自身の怒りも相まって。

でも、そんなに気にするようなことなのか？あいつだって、もういい年なのに。女がこつちを振り向かないくらいで。違うのか？

「何があつたか聞いてもいい？」

「聞いても、大したことじゃないよ」

「大したことじゃないなら、聞きたいかな」

「ああ、そうかあ……。事實は大したことじゃないんだけど。結果がね」

結果？サワダがどう思ってるかってこと？

あの、常に何か重いものでも背負ってるような顔をしながら、時折笑顔を見せてくれるサワダが、一体何を考えてるかってこと？それが聞きたいんですけど？！

よく考えないと……。

ミハマは、イズミのように攻撃的に出ることはないだろう。だからこそ、気を使うべきだし、考えて言葉を出すべきだ。

簡単に見透かされても、オレの失態を、オレ自身が知ることが無くなってしまふ。

『どうしたの？大丈夫？何があつた？この台詞って、すごく人を追いつめると思わない？』

心配されるくらい、別に良いじゃないかと思うけど、イズミはそれがサワダを追いつめると言った。でも、要するにそんな言葉が受け入れられないほど、まずい状態ってこと？それって？

『いいんだよ。一人にしてやるしかない。閉じこもっちゃってんだから』

『死神は、オレがどういう状態なのか、判ってたんじゃないのか？だから、用があるなんて嘯いて』

イズミも、ティアスも、彼の様子を、何かが彼を落としていることを、知っているし気付いている。

『オレもあの女も、自分の墓を掘っているんだ』

そして、彼らが頻繁に使う『墓』と言う言葉。サワダは、誰かの墓を掘り続けているのかと思っただけ、そうじゃない。自分の墓を掘っている。何のために？

『同病相憐れむって言葉、知ってる？』

『何を下らんこと言ってる、あんたは』

ティアスもまた、自らの墓を掘り続ける。彼女と彼は、『同類』なのだ。少なくとも、お互いにそう感じていたはずだ。他の誰が否定しても、彼ら2人はお互いに。

その2人が楽師とオワリの雄将としてではなく、ティアスとサワダとして出会ってしまった。だから、彼らが一緒にいるのは、必然的なものなのか？

「以前、イツキ中尉とも話したんだけど、サワダは、どうして墓を掘るのかな？その理由を、みんなは知ってるんだよね？」

心臓が押しつぶされそうだった。ミハマが思うか、判らなかったから。ただ、心配しても、彼がどう思っているかなんて、オレ

には判らないんだけど。

「明確な理由を知ってるわけではないと思うけどね、みんな」

「でも、共有してる」

「ただの精神安定剤がわりだよ。ああして墓を掘っていると安心するみたいだから。罪を償ってる気分になるんだろうね」

彼の言葉は、やっぱり重い。かわらず、淡々とした口調で、微笑んだままで、重い言葉を紡ぐ。

「だとしたら、あの、中央の楽師も同じなんだね」

「どうして？」

「知ってる？ミハマ。あの2人、『同病相憐れむ』ってヤツらしいよ？そう言ってるのを聞いたんだ。だとしたら、ティアスよりずっと、楽師殿の方が彼にお似合いじゃない？」

ずるいと思った。自分のこと。でも、彼と同じように、何気ないフリして喋ってしまえばいいんだとも思った。

「そう、奇遇だね」

「……奇遇？」

「ティアスにも、彼は同じように思ってるみたいだよ？」

その台詞は他でもない、彼が彼女を疑っていると言っていることを示していた。

04

ミハマの表情は変わらなかった。彼の台詞が、本当は何を意味し

ているのか。オレには判らなかつた。判らなかつたけれど。

「……同じように？つて？」

「うん、だから同じように。テツがあゝの楽師殿に感じているものを、ティマスにも感じている。あまり良い言葉とは思えないけれど、その、同病相憐れむってヤツだね」

「……そう言う……」

「そんなに、同じように感じる人って、たくさんいるのかな？」

ミハマの台詞が意図することを、今度ははつきりと理解することが出来たと思う。

「ティマスと、あの楽師殿が似てゐること？」

「そうだね。オレもテツも、違う意味で、そう思つてゐる」

「違う意味で？」

「うん。オレは、ティマスも楽師殿も、人の傷みを受け止められる優しい人だと思つてゐる。アイハラが少し話してくれた、君の時代にいたティマスのような人だつて、オレも思つた」

オレは黙つて頷く。今は全面的にその意見に賛同できないけれど、オレの知つてゐるティマスのように感じるときがほとんどだけど、でも少しだけ、強すぎる部分も感じてゐる。

「でも、彼女の優しさつて、自分の重みがそうさせてゐると思わない？表面的な優しさに誤魔化されそうになるけど」

「表面的？よく判らないよ」

「その場限りの、気遣いなんて、出来る人はいくらでもゐるし、要領のいい人ならほぼ確実にそうするだろ？」

この人、このキラッキラの爽やか笑顔で、酷いことさらつと言い



ませんでしたか？！それを優しさと言わないわけ？この人。イメー  
ジ違うな……ってことも無いか。

「ええつと、あれですよ。ティアスは、そうじゃなくて、優しい  
って言ってるわけだよね？」

「ん？そうだよ？何かおかしいこと言った？」

「いや、言っていない……よ？」

この人の笑顔って、邪氣がないんだよな。台詞はなんか重いんだ  
けど。騙されそうになるな。騙されちゃいけないって言うのは、こ  
の人の周りの人見てたら、強く思うけど。

「サワダとは違う意味って？」

「うん。まあ、テツは、あんまり女の人、信用してないしね。だか  
ら、ちょっとフィルターがかかってるって言うか。ティアスも、あの  
楽師殿も、自分と同類って言うか、ちょっと似てるんじゃないかっ  
て言ってる。自分の悪い部分というか、重く暗い部分に」

ミハマの表情が曇る。こんなにはつきりと、強く思い表情を見せ  
ることは少ない。だけど、その表情は大抵、彼らのことを考えると  
きに見せる。

「オレも、テツとティアスは似てると思ってるよ。でも、あいつが  
思ってるみたいに、悪い意味じゃなくて。あの人達、根が暗いんだ  
よね」

「サワダが根暗なのは判るけど」

「あはは。ごめんごめん。根暗って言うのは言い方が悪いよね。ち  
よっと、内にこもる部分があるって言うか。こもりすぎてて、本当  
に人のこと考えてるのに、それがうまく伝わらないって言うか。テ  
ツは口が悪いし、プライベートでは気遣いもそんなにうまい方じゃ

ないから、あまり優しいように見えないかも知れないけど」

「そんなことはない。サワダは、まあ、確かに口も悪いし、言い方もきついけど、優しいところあるなっと思うよ」

それはもしかしたら、比較対象として側にイズミがいるからかも知れないけど。あの二人は、二人とも口が悪いけれど、面白いくらい正反対だ。

「そう、アイハラならそう言ってくれると思ってた。ありがとう」

何でミハマが礼を言うんだよ。どうして良いか判んないって、そう言うことされると。

「いろいろフォローされてるの、知ってるし」

「良かった。でも、本当は、みんな優しいよ。オレだけは、あんまり優しくないんだけど」

「そうかな？ミハマは優しいけど？」

「オレは、喋り過ぎなんだ。何も言わないことも、多分優しさだと思う。テツのことで怒ることも、その理由を言うことも言わないことも。事実を告げることだけが、優しいことだとは思わない」

「それはそうだけど……でも、今、ミハマ」

「だから、オレは優しくなんかないんだって。この手の中の世界を守り、大きくしていくことだけが全て。そのために動くって決めた。だから、それ以外のものに対して、オレは厳しい。そんなの優しくなんか無いじゃないか」

「仕方ないんじゃないか……」

仕方がないことだと。オレは思ったけれど。だけど、その優しさも厳しさも、オレに向けられているとしたら？

ミハマの優しさでオレはここにいる。だけど、彼の世界は、あの

護衛部隊だけ。もしかしたら、この国も入ってるかも知れないけど、この国にだって敵はいる。

彼は黙っていることも優しさだという。だから、イズミやイツキ中尉がサワダのことを語らないのも、サワダに対する優しさであると同時に、オレに対する優しさだと。

彼らが黙っていることが、本当の優しさだとしたら、今、ミハマがオレにいろいろなことを告げていることが厳しさだって、彼は言ってるのかも知れない。

でも、そうは……思えないし、思いたくもない。

「ミハマって、ティアスのこと、ホントの所どう思ってるの？ イズミなんかは茶化してるけど？」

「どうだろ」

「どうって？！そこは誤魔化すんだ。ずるいな」

「誤魔化してないって！」

照れてる！この人照れてるよ！ああいうこと、さらっと言えるくせに、この手のことは全然ダメなんだ。判りやすく顔も赤いし。

「アイハラだって」

「オレ、そんなに判りやすすくないって。別に、こっちのティアスは、オレの知らない人だし」

そのはずだけれど。

「いや、まあ、ね？」

「意味判んないし。何だよ」

真正面から突っ込んで、こんなにあからさまに照れるとは思わなかったな。でも、この様子だと、サワダとティアスのこと、多分な

にも知らないよな。もしかしたら、疑ってもいないのかな？『テイ  
アスよりずっとお似合い』なんて、遠回しすぎる台詞じゃ、ミハマ  
には通じないのかな。

「もし、サワダに彼女とられちゃったら、どうすんの？」

「取られる？別に、オレと彼女は何もないし、テツとも無いよ。で  
も」

その台詞は、彼がそのことを考えようとしていない様にもとれた。

「でもって？」

「ホントにそうだったら、それはそれで良い傾向なんじゃないかな  
？」

良い傾向って！？

05

オレが、彼の台詞の真意を問いただそうと口を開いたとき、彼は  
笑顔で持ってきていた包帯と傷薬を差し出し

「オレ、手当てしようか？」

なんて言いながら、まるでめであつた包帯を解き始めた。彼がこの  
話を終わらせようとしているのは明らかだった。だけど、彼の綺麗  
な笑顔の持つ圧力に、逆らえなかった、何故か。

「……ありがとう」

「自分で包帯ほどける？薬を塗るから」

もう、ほとんど痛みはなかったけれど、包帯をはずしたら、オレ

の足は赤黒く変色していた。おかしいな。普通に歩けたし、イズミ達の言うとおり、（最初はびっくりして大騒ぎしたのが恥ずかしいくらい）そんなに酷くない気がしてたのに……。なんかこれ、おかしくない？

てか、こんな状態なのに薬を塗るだけかよ。しかも、あの恐ろしい緑色つつか、腐った色の。ミハマを信用してないわけじゃないけど、あの医者の人信用してないわけじゃないけど、見かけ何とかならないのか？

「こついつのつて、薬で治るの？」

「治るものと、治らないものがあるけど。魔物が相手だったからね、なんとも」

そう言えば、あの軍医もそんなこと言ってたな……。判んないことの方が多いってことか。やっぱりこの薬、信用度が低いかも。

「今夜、君たちが出会った魔物は、少なくともテツ達ですら初めてみるタイプだって言ってた。ティアスもね」

「……ティアスに話を聞いた？オレを助けてくれたんだ」

「又聞きだけど。魔物を退治したときに、テツが彼女に聞いたって。戦い方が判らないと、あいつらとは戦えないから。データは持ち帰ってきてるけど」

「そうなんだ。なんか、色気のない会話」

少しだけ、ほっとした。もしかしたらこっそり会っていたのも、サワダのことだから対魔物の話を聞き出したのかも知れない。

……それはそれで、彼女にとっては困るだろうけど。

「彼女は天から来る魔物への対抗力を持つてる。彼女や、テツキさん曰く『国が北に近いから、脅威にさらされていた』って話だよ」

オレの様子を見て、そう教えてくれたくせに、笑った。

「結構、過酷な環境にいたのかな？だから、あんなに強いとか？だって、ミナミさんだって、この国では上の方の階級なのに、戦えるのに、あの魔物に対しては何も出来ないに等しかった。いくら、魔物に対するのには戦い方があるからって」

「そうだね。サラも、魔物に対する対抗力は持っているけど、あの天から来るものには力が及ばないと言っていた。シンやテツが彼女ともデータをシェアしてるけど使いこなせるかどうかは別なんだ」

おそらくそれは、あんなに研究しているシュウジさんが、魔物と戦う力がないことに等しいのだろう。

「彼女は戦えるし、知識も豊富だし、それを応用する能力もある。シュウジもテツもシンも、彼女を評価していたから相当なものなんだと思うよ？」

伊達に、中央の大佐じゃないってことか。

ミハマはオレに薬を塗ったあと、包帯を巻こうとして、解いた。しかし、その後が酷かった。長く伸びた包帯と格闘しながら、ねじり、ぐちゃぐちゃのまま、巻き付けようとしたので思わず止めてしまった。

「ごめん、ミハマ！オレ、自分でやるから！」

「え？そう？」

「……よく、他の連中にもそう言われない？」

「わりと……」

これが普通だと思っ  
てませんか？重傷だぞ？不器用すぎる！てか、

自覚させるよ！教育係だろ、シュウジさん！！

「サワダってさ、女の人苦手だって言うけど、ティアスとはよく話すんだ。気にならないの？まあ、色気のない話ばかりって感じみたいけど」

「うーん。オレとあの子が仲良くなることを、シュウジやテツやユノはあまり良い顔しないんだよね。テツキさんの息がかかっているとか、正体不明だとか言ってる。まあ、その兼ね合いで、彼女の所に行くと大抵テツがくっついてきて話してるうちに、慣れちゃったみたいだよ？」

……ああ、サワダ父の。ミハマって普通に話に出すけど、二人で話してる時って、すごく険悪だろうが？なんでこんな風に、笑顔で話が出るんだろう。

「別に、サワダのお父さんも、エライ人じゃん。身分がどうかって話もあれだし、敵対勢力と仲良くなることが悪いとは思わないけど」

「だよねえ。オレもそう思う。でもまあ、シュウジ達はテツキさんの狙いを、オレの失脚だと思ってるからさ」

やれやれ、と言った顔で天を仰ぐミハマ。思ってるってなんだよ。変なの。

「っーか、失脚って。」

「またそう言うことさらつと言う！失脚って？何で？だって、サワダ父には王位継承権はないって聞いたぞ。あるのはミハマと、サワダと……」

「まあ、そう言うことだね。テツが王位についたら、その実父であるテツキさんは必然的にここでも扱いが変わるからね。でも、オレ

はそんな小さいことに彼がこだわってるようには思えないけどな」

「小さくないよ！小さくない！」

「でも、テツが王位についても、テツはオレのこと裏切らないよ？」

そんなの、判ないだろ！

さすがにそうとは言えなかったけど。

06

ミハマにオレの言いたいことは伝わったのか、そして彼が伝えなかったことがオレに伝わっているのか。どちらも成されていないよな、そんなもやもやとした感覚がオレの中に残った。だからかも知れない、彼が立ち去った後も、ただ黙って彼の座っていた椅子を見つめていた。

オレが気にしすぎているだけなのかも知れない。ティ阿斯とサワダのこと。本当は、気にする必要もないかも知れないし。大体、オレが欲しいのは、こっちのティ阿斯じゃないはずだ。だけど。

そのはずなのに。なのにどうしてこんなに心が重いんだろう。

あいつらが一緒にオレとミナミさんを助けに来た……それだけなら良かった。あいつらが一緒に中庭でこそこそ会ってたりなんかしたから。こんなに引くかかる。

布団にくるまったまま、そんなことをずっと考えていた。いつのまにか時計は5時を指していた。空は、昼に比べれば暗いとは言えずと明るいままで、そんなに時間がたっていた気がしなかった。

嫌な気分だ。

はつきりしたかった。怖かったけれど、オレは再び窓の前に立ち、



中庭を見下ろした。もちろん、随分上の階なわけだし、医務室から見下ろしたときのように、はっきり何があるか判るわけじゃないけど。大体もう、サワダもティラスも、城に戻ってきてたんだから、いるわけもなかった。

「え？」

気のせいだろうか。木が揺れるその隙間に、人影が見えた気がした。遠いし、木陰にうまく隠れているせいか、すぐに判別できなくなったけれど……。

怖くなってきた。あの時、3階の医務室から見下ろした、あの二人だと思ったら。

スリッパを脱ぎ、靴に履き替えた。その時、自分の足を見てびっくりしたけれど、あんなに赤黒く腫れ上がっていたはずなのに、随分治まっていた。傷みはほとんど無かった。

急いで部屋を飛び出し、エレベーターに乗り、二階に向かう。この時間は、おそらく外には出られないだろうし、オレが出入りできるフロアは限られているから。

3階フロアを進んでいく。窓側には全て部屋があるので、中に入らないと、中庭を見下ろすことが出来ない。とは言っても、医務室くらいしか入れる部屋はないんだけど。

うろろろしながら探していたら、奥の廊下を突き当たったところに、唯一中庭に面している窓があった。その窓は開けることは出来なかったけれど、外の様子を伺うことは出来た。さっきよりははっきりと人影を確認できた。それでも、木々が揺れるその一瞬だけだったけれど。

やっぱり、サワダとティラスだった。寄り添っているように見えるのは、オレの気のせいかな？

「ここら。口外無用って言ったろ？なにこんな所にまで確認しに

きてんだよ。さっさと部屋に戻れって」

「……イズミ……中佐」

そう言えば、今夜はミナミさんの側にいるって言ってたな。だったら、ずっと医務室にいろよ。

「別に、見たくて見てるわけじゃない……」

「わざわざ、こんな所に降りてきてるのに？あいつら、あれで隠れてるつもりなんだから、ほつといてやれば？」

いや、充分隠れてますけど。よっぽど目を凝らしてみないと判らないし。静かに、気配を殺したまま、彼はオレの隣に立ち、中庭を見下ろした。

「ほつといても良いわけ？」

「今はね。テツが、ホントの所どう考えているか判らないし。彼女も」

「同病、相憐れむって？」

イズミは一瞬、押し黙った。彼がそんな態度に出たことに、オレは驚いたけれど。

「誰だよ、そんなことお前に言ったの」

そうぶしつけに言うてから、また少し、沈黙が流れた。

「……ミハマ？ミハマだよな？」

「オレが、彼にそう言った。サワダとあの中央の楽師の話を」

「ああ、そう。彼は、それを知っていても、口にはしないのに」

『そう、奇遇だね。ティアスにも、彼は同じように思ってるみたい

だよ？』

奇遇だったのは、サワダが『ティラス』と『楽師』それぞれにそう思っていたこと？それとも……

「奇遇だな。同じ話をするなんて」

「そうだな。うん……ホント」

ミハマって、どこまで、何を理解してるんだ？そしてその思いを、彼ら護衛部隊は全員共有してるのか？それともイズミだけか？

もし共有しているのだとしたら、サワダがあんな行動に出るわけがないだろう。

それとも、端にティラスのことを楽師だと疑ってるってことだけを共有してる？

「……中央の楽師と、ティラスのこと、似てるって言ってたよ、ミハマは」

空の色が、すっきりしなかった。再び大きく風が吹いて木々が揺れる。その隙間から見える二人の姿は、深夜の公園でいちゃつくカップルそのままだった。

「ああ。だから、気に入ったんだよ。知ってる？」

「どこが似てるんだよ」

「根暗なところかな」

「意味わかんねえ。素直に『顔が好みでした』って言う方が判りやすいよ」

そうだな。なんて囁きながら、イズミはげらげら声を上げて笑っていた。

「でも、サワダも、同じこと言ってたって、ミハマは言ってた」  
「だねえ。ただ、ミハマとテツが似てるって言った部分は違うと思うけど？違うはずなんだけどね」

げらげら笑うくせに、いやに真面目な表情で外を眺めていた。

「テツは、彼女を疑ってるんだけどねえ」

「ミハマは？」

「さあ。どっちでも良いんじゃない？」

どっちでも良いって、そんな答えがあるか。そもそも、お前んとこの王子様であり最高責任者じゃねえのか？！でも、やっぱりサワダが疑ってるって言うのは……。

「疑ってるのに、ああいう真似するような男なんだ。サワダって」

「どうだろうね。ミイラ取りがミイラになって所じゃない？その内、答えが出るさ。だから言っただろう？時期尚早だって。あの状況、今は見逃してやろうよ？」

「……それって」

「どう転ぶか、判らないからさ」

イズミは、やっとオレの方を見ていた。企んでいるのが、オレにもよく判った。

07

イズミに促され部屋に戻ったものの、結局一睡も出来なかった。

ふらふらの頭で、ミハマのいるフロアに向かう。彼の気遣いで、彼と彼の護衛部隊が食事をするときに呼んでもらえている。他の客人と一緒に食事をするのは大変だろうと言うことで。オレは、ミハマが父親であるオワリの王と一緒に食事をとらず、専用フロアで食事をとっていることに驚いたけれど、もうそう言うもんだと納得するしかないのだと思うことにした。

彼らはいつものようにミハマを囲んで、一つの正方形の大きなテーブルで食事をとっていた。たくさんのバターロールとハムエッグにサラダ。それからオレンジジュース。王子様にしては簡素な気もしたけど、充分すぎる食事だ。時代なのか、好みなのかは知らないけれど、今まで口にしたものは、全部とにかく塩辛かった。気になると言った程度だけ。

オレはミハマの真正面に当たる、彼から一番遠い席にいつものように座った。その時初めて気がついたけれど、いつもミハマの右隣に座っているはずのサワダがいなかった。ケガをして医務室にいるミナミさんがいないのは判るけれど。

「おはよう、アイハラ。眠そうだね？大丈夫？昨日遅かったし、ケガしてるから……」

「あ、全然。大丈夫だって。それよりサワダは？珍しいね、いないの」

昨夜、随分遅い時間というか、ほとんど早朝だったんだ、ティアスと二人で中庭にいたのは。途中で見ることをやめたけれど、彼らはいっつまでああして一緒にいたんだろう？その後、寝てるって可能性もあるな。

「ちょっと、お使いに行ってもらってる。ご飯くらい食べてけばっ

て言っただけ、先に行くって」

ジュースのボトルをとろうと手を伸ばしたミハマを制し、代わりに注いであげたのはイズミだった。そのまま席を移動し、いつもサワダが座るミハマの隣に座った。

「あ、そうなんだ」

「眠そうだったから、無理しなくて良いのに。シンが代わりに行くって言ってくれたのに、ねえ？」

同意を求められ、頷いたイズミだったが、彼はいたって普通だった。眠くないのかな……。

「良いんじゃないの？ ついでだからさ。あいつが行くつつってんなら、行った方がいいって。自分で気付いてるなら、その方がいいって」

「うん。まあ、そうなんだけどね」

「人のことを心配してられるような立場ですか、あなたは。もう少しちゃんとしなさい、ちゃんと」

初めてみたときから全くもって違和感の無かった、食事中に新聞を読みながら説教をするシュウジさんの姿が、今日は妙に違和感があった。どうしてだろうと見ていたら、その違和感の正体に気付いた。今日は制服着てる！ちゃんとした格好だ！

「シュウジさん、今日は何かあるの？」

「何ですか」

「いや、……違和感ありまくりでしょ？」

オレの突っ込みに、不思議そうな顔で隣に座るミハマに尋ねるが、

彼もまた笑顔で即座に突っ込んだ。

「普段の自分を振り返りなって。オレにちゃんとしろって言う前にさ」

「ちゃんとしてるじゃないですか。制服まで着て」

「普段してないくせに」

この二人じゃ埒があかない。オレは隣で笑いながら彼らを眺めていたイツキ中尉に聞くことにした。

「中央の監査の人が来るのよ」

「へえ……」

あれ？その話、昨日聞いたな。

「ミナミさんに聞いたけど、それって、来週じゃないの？3月1日だって言ってた気がする」

「ええ。先月そう通達があっただけど、昨夜急に統轄本部の方だけ先に監査にいらっしゃるって連絡が。急な話だから夕方になるそうだけど、準備で今日は忙しいみたい。テツちゃんは出かけて正解かもね」

「統轄本部……。確か、サエキ大尉が来るって」

「ええ。サエキ大尉って方を知ってるの？」

「あ、うん。中央に行ったとき、少しだけ話をしたんだ。綺麗な人だったから、覚えてただけで……」

一言余計だったかな。イツキ中尉は「そう」とだけ言って微笑んでいたけれど。

もしかして、サエキ大尉はティアスのことを心配して？いや、いくらなんでもそれはないか。仕事だろうし。でもニイジマ達の話だ

と、相当心配してたみたいだし……。

「お仕事があるから、制服着てるんだ、シュウジさん」

「……普段も、お仕事してるんだけどね」

思わず二人で苦笑い。可愛いなあ、イツキ中尉は。

「何ですか、そこ二人。こそこそして！」

真正面から睨み付け、オレ達二人つつーか、オレを指さしていたのはシュウジさんだった。何か悪いことでもしたかな？メガネ光ってますけど。

「人を指さすなって、シュウジさんが言うんじゃないですか。恐！」

「怖くなんか無いです。いいから、離れなさい」

お父さんか！？ちょっとシュウジさんがあり得ないくらい怖いので、これ以上突っ込むのをやめたけど。オレは。

「何おっさんみたいなこと言ってんだよ。シュウジさん、だっさいな」

「何ですか」

「いや、だから、行動が」

何故かムキになるシュウジさんを、イズミが苦笑いを浮かべながらからかっていた。

「監査の人が来るってことは、みんな忙しいんじゃないの？てか、サワダはいなくていいの？」

「ええ。だからすぐ戻ってくるわよ」



気にせずイツキ中尉に話しかける。何か、シュウジさんのあの態度って、やきもちっばいんだけどな。さすがに、そんなこたないか。

「お使いって、何しに行つたの？」

「先生を呼びに行つてくれてるの。サラさんの様子を見るために」

「そう言えば、軍医のおっさんも、よく判らないからどうとか言つてたけど、詳しい人なの？」

「そうね。ここの軍医よりはずっとね。でも、やっぱり信用できる先生がいた方がいいでしょ？」

「……そうなんだ」

納得できない話ではないけど。何か、城の中にいる人より、外人の方を信用してるって言うのもなあ。今までずっとそうしてき たってことなんだろうけど。仮にも、王子様とその護衛部隊なのに？

「こんな忙しいときに、サワダがわざわざ？電話で呼べばいいじゃんよ」

「いいのよ。お使いなんだから」

何か、隠しているような口振りだったというか、イツキ中尉らしからず、先にオレに情報を与えてくれていたことに違和感があったけれど、やっぱりなつて感じだった。

これも多分、サワダへの気遣いなんだ。彼らの。

オレには一体何をしているのかは見当もつかなかったけれど、城全体が慌ただしく動いているのだけは判った。廊下ですれ違う軍人

達は、オレなんかに構ってる暇は無いとばかりにばたばたしていた。人に気にされないと言うことが、こんなに楽なものだとは思わなかった。

楽ではあるけど……寂しいもんだな。不審がられていても、存在してるように見られていた方が、いいこともあるっつーか……贅沢な悩みだけど。

元々オレなんて、ここでは厄介者って言つか……。サワダに出会って、ミハマが助けてくれなかったら、今ごろどうしていたか判らないくらいだもんな。ミハマが拾ってくれたからこそ、ここでの扱いが良いこともあるし、面倒なこともある。

まあ、拾ってくれたミハマはともかく、彼の周りからは、まさに招かれざる客として扱われているけれど。

オレを受け入れてくれたのは、多分ティラスとミハマだけなのに。

そのティラスは、結局オレがいた時代の彼女と同じく、サワダの元へ走ってしまったわけだ。別の人間だの何だの言っておきながら、結局はそうなるんだ。

……まだ、決まったわけではないけれど。オレの思い違いかも知れないし。そうと思いたいし。

「イズミ……中佐！」

「申し訳程度に中佐ってつけんなよ、もう。今日は部屋でおとなしくしてろよ」

廊下の窓からぼんやり外を見ていたオレを見かねたのか、どこかへ向かっていたはずのイズミが、あきれ顔で近付いてきた。彼が制服を着ていることはそんなに珍しいことではないけど、わざわざ見

せびらかしているかのようだった。

イズミって意地悪だけど、悪いヤツじゃないんだよな。そう思うけど。機嫌のいいときは、普通に面白いヤツだし。元の時代に戻ったら、絶対仕返ししえやろう。

「イズミも忙しいのか？」

「いや？仕事探しに行っても、雑用押しつけられるだけだし。忙しい顔してるだけ。お貴族様達だけ、頑張っていればいいんだって」

「ふうん。シユウジさんとか？」

「あの人、たまには仕事をした方がいいんだって。やれば出来る人なんだから」

「だったら、サワダもいた方が良くない？」

「まあ、出迎えるときだけいればいいんでない？うちの看板だからね、王子様とセットで」

一緒に窓から外を眺めながら、げらげらと笑った。その言葉の意味を必死に考えていたけれど、ただの軽口であって欲しいと願うばかりだ。

窓から見える中庭と、その先に広がる城壁。さらにその先には墓場が見える。

「墓、見てたの？」

「いや……そう言うわけじゃないけど……」

墓は、あまり好きじゃない。

『……お前のじゃないよ』

サワダはそう言ってくれても、『アイハラユウト』の墓があるのは事実だし。

『サワダ中佐と、同じ理由よ』

ティ阿斯とサワダを繋ぐ場所なのかも知れないし。サワダが楽師をティ阿斯と認識していなくても、ティ阿斯はサワダに対してそう思ってるってことだ。

彼らはあの場所でつながってる。まあ、実際は中庭でしたけど？

「実際さ、どうなのさ、あの二人？」

「ああ、あの二人？」

オレもイズミも、忙しそうな軍人達が通過するだけの中庭を眺めていた。

「決定的な証拠が欲しいところだな」

「証拠？」

「あくまで、二人でこそ会ってただけっつーのは、いくらでも言い逃れできるしね」

「意味が判らん。何に対して言い逃れるのか、会ってただけですむわけないだろうがよ」

「でも、テツだしね。あいつのことだから、会ってただけって言うてもわりと信用できちゃうし、何かあったって言われても、そりゃそうだよな、ですむわけだし」

「なんじゃそりゃ。サワダなら、どっちもオツケーってこと？イズミなら間違いなく、何かあったって言われるだろうけど」

こいつ、笑い飛ばした。普通にやってそうだな、そう言うこと。

「ミイラ取りがミイラになって言ったのに。よくわかんねえよ、状況が。オレはそんなんじゃないって、あの二人が出来てんのか出来て

ないのかだけが知りたいの！」

「お、ストレートに来たな」

ずっと笑ってら。楽しんでるだけの様にも見えるけど。こっちは照れくさいっつーのに。

「本人に聞けば？」

「……本人って、サワダ？イズミが聞けよ」

「違っつて、彼女。ティアちゃん」

何でこっちでも、いつの間にそんな馴れ馴れしい呼び方になってんだよ。

「オレが！？」

「他に誰が？確認できたら報告よろしく。彼女、さっきサワダ議員となにやら打ち合わせしてたけど、終えて部屋に戻ったの見てたから」

オレの肩を叩き、立ち去る。振り向いたら、彼はこちらを見ることなく、手を振っていた。

彼の言葉に動かされたわけじゃないけど、オレはその足で彼女の部屋に向かった。

09

彼女の部屋の前で声を掛けてみたが、返事がなかった。そのことに少しいだけ、ほっとしてしまった自分が嫌だった。だけど、このままで終わらせるのも何だか悔しかった。多分、イズミのせいだ。

窓から再び中庭を臨む。さっきよりも全体が一望できた。普段よ

りずっと、人が慌ただしく動いていることがよく判る。

1階に下りて、案内板に従って中庭に向かう。ここに来て随分経つけど、中庭に出るのは初めてだった。昼は簡単に出られるけれど、夜は中庭に通じる出口に衛兵が立っていて、入れないことを知っていたから。あまり、出歩くのは得策じゃ無いというのは、オレ自身がよく判っていたことから。

中庭に出ても、城の中と同様、オレのことなど構ってる暇など無いと言った感じで皆通り過ぎていく。普段なら、オレの胸に光るバツジを見て、声を掛けてくるなり、訝しげな目をするなりするのに、人の流れに逆らいながら、昨夜、彼女たちの姿が見えた辺りに向かう。木陰にベンチがあったり、広場になっていたり、公園のようになっている、上からは見えなかったが、城内の人々の憩いの場になっているような場所だった。彼女たちは、ここに座っていたのかな？

「あら、ユウト」

木陰にあるベンチの一つに座っていたのはティラスだった。部屋にいないと思ったら、こんな所に……。昨夜もいたくせに。

人といるときは元気な顔をしているが、実際はまだケガが治っていないはずだ。だからかも知れない。うつすら汗の浮かぶ額を拭きながら、ややぐつたりとした表情で座っていた。

「昨夜のケガは大丈夫？」

「オレは、全然平気だよ。ちょっと痛いけど、歩くのには困らないし。ティラスこそ……」

「私も、大丈夫よ。少しは動かないとね」

オレは昨夜、彼女を相当怒らせているはずなのに、彼女は笑顔を見せてくれる。何もなかったかのように。彼女が優しいからだけで

はないと思うオレは、やっぱり自惚れてるのかな。

黙って彼女の隣に座った。ちょうどサワダがしていたように。彼女は何も言わなかった。

「そう言えば、来週来るはずだった監査の人、今日来るんだってね。こんなに城の中が慌ただしいの、初めて見たよ。スゴイ影響力だ」  
「そうね。でも、仕方ないわよ。それくらい中王の影響力は大きいのよ?」

ゆつくりと、彼女の視線が辺りを見渡しているのが判った。頭は一切動かさずに、周りの様子を伺っているのが判る。判るのに、彼女の声は朗らかだった。

彼女が辺りを見渡した理由を、もうオレは知っていた。ただ、どうしてそれを彼女が気にする必要があるのかは判らないけれど。だって彼女は、中王側の人間なのに。どうして中王の監視を気にする必要があるのか。

「……もしかしてもしかするけど。慌ててきた人って言うのは、君を心配してかな?」

「かもね。まいったわ」

彼女は笑顔のまま溜息をついた。嬉しそうに。

「監査って、何するの?こんなに大変なこと?」

「大したことじゃないわ。予算が適切に動いているかとか、不適切な施設が国に存在していないかとか、書類を4、50枚ほど記入して、チェックするだけよ?ああ、でもオワリは5万人越えてるから半期に一度の監査もあるのね。めんどくさそう」

「……5万人?!」

「少くない?!いくら地殻変動があつたからって、500年も経つてるはずなのに。」

「5万人越えてたら大国なの?オワリってどれくらい人がいるのさ?」

「えっと……たしか8万3千人で、中央を守るカントウに次いで2番目よ?」

「少ないって。だって、名古屋市だけでも220万人越えてたはずなのに」

「それはユウトの時代ってこと?随分、窮屈ね」

「いや、でも……そうでも……無かつたとは言わないけど」

「そう言えば、外をすっかり見たのって、この城の付近と、最初にサワダに会つたN町の中心部だけなんだよな……。名古屋城もすっかり廃墟だし。ミナミさんも言つてたけど、実際はオレの知ってる風景なんか、ほとんど残ってないのかも知れない。」

「人口が増えていかないんだから、そんな数なんてとうてい無理ね」「増えていかない?」

「だって、増える数より減る数の方が多いんだもの。仕方ないわね。いくら墓を作っても追いつかない。いつか墓だらけになるかもね」

墓を掘ってる張本人が、自嘲気味に笑つた。何も言いたくなかつた。

「どうせ、ティアスもサワダも、その墓だらけの世界に自分の墓を掘るとか言い出すんだ。」

「監査つて、何のためにするんだよ?」

「さあ?主のお考えになることだから。中王は、神様と一緒になのよ?彼が黒と言えば、白いものも黒くなるの」



「ふうん」

「あは、ユウトってばすぐ顔に出るのね」

彼女の笑い声に、思わず顔を伏せてしまった。恥ずかしくて。そんなにすぐに顔に出るかな、オレって。

「何のためかしらね。表向きは各国の経済バランスを正確に知るところであったりとか、国の正しい発展のために必要な資料であったりとか、いろいろそれらしい理由はあるけど、そんなことはどうでもいいのよ」

オレの知ってるティアスも、気が強くて、喧嘩腰のような話し方になるときがあった。大概それは、サワダに対するときによく見られたけど。

だけど、今のティアスは、喧嘩腰と言うよりは、ただただ悪意に満ちていた。

「本当の理由は？」

「抑制のため」

「……何を？」

「この世界の成長。言ったでしょ？いつか墓だらけになるかもねって。墓だらけになる前に、この星自体が墓になっちゃうかもね。そうしたら、墓を掘らなくてすむのかもね。私も、あの人も」

新緑の広場を、軍人達がせわしなく行き来する。だけど、隣に座る彼女は、遠い目をして、彼を思っていた。全ての風景が目に入っていないかのような顔で。

「……サワダのこと……」

「え？」

「案外、好きなんだったりして」

あくまで笑顔で、何でもないような顔で聞いたつもりだった。変な汗が背中を伝っていたのが判ったけど、妙に顔と頭が熱くなっていくのが判ったけど、必死で笑顔だけ作っていた。

「それはないよ。もしかして、それを聞きたくて、やたら中佐のことを聞いてたの？」

彼女の笑顔は落ち着いたものだった。その余裕のある姿に、オレは思わず溜息をついてしまった。

「どうしたのよ、ユウト？」

「いや、そっか。だって、二人ともケガしてるのに、こそこそ二人で会ったりしてるから」

「え？まさか。昨夜のことは違うって言ったのに」

むっとした顔でオレを見ていたけれど、彼女は怒っているようには見えなかった。

「いや、あの後、二人でここにいなかった？」

「うっん？見間違いじゃない？」

彼女が言うならそうなのかと、オレは納得したかった。

昨夜、ティースとサワダがここにいたときは、もっと彼らの距離が近かったはずなのに。今の彼女には、その周りに人を寄せ付けな

いような、触れるのを憚られるような、そんな雰囲気をもっていた。

もう少しだけ近付きたかった。

ただただ、当たり障りのない世間話を続けていても、彼女には近付けない。だけど、さつき少しだけ見ることが出来た、彼女の本音に近い部分を、彼女はもうだしてはくれなかった。

「……サワダ中佐」

『お使い』から戻ってきたらしいサワダが、黙って彼女の横に立っていた。根暗のくせに、妙な存在感のある男だ。

彼女にもっと近付きたかったのに。どうしてこのタイミングで帰ってくるかな？この男は。

「お使いって聞いたけど？終わったのか？」

「ああ。まあ」

口の端を少しだけ上げて、微笑んだ。いや、微笑もうとしただけでも知れない。そのぎこちない動作が妙に儚げで、オレは喧嘩腰だった口調を反省した。

「あの、横……」

「うん」

充分すぎるくらい空いていた彼女のもう片方の隣に、サワダは勧められるまま座った。体を動かして場所をずれたはずの彼女は、再び体を動かして彼の方へ身を寄せた。彼もまた、少しだけ彼女の方へ身を寄せる。彼の左手が、彼女の腰に触れる程度に。

いや、これでできてないって言われても、全く信用ならないんですけど？！一体何があったんだ、この二人！

「二人でなに話してたんだ？」

「世間話よ？みんな忙しそうねって。ねえ、ユウト？」

オレもまた、黙って頷く。彼女の悪意は、サワダに知らせるな  
てことか？オレには教えてくれたのに。

オレの顔には多分、出ていたのだろう。この優位に立てた心が。  
サワダが苦笑いをしていた。

「随分、軽装で出かけたのね？どこへお使い？」

「ああ、学校のある方だけど。あんな所に制服で行ったら、町の人  
にビビられますけど？」

「そうね。行ったことはないけど、穏やかなところみたいね」

「そうだな。監査もあそこまで細かくは見ないし。町並みをずっと  
残し続けている……」

サワダの目が、彼女を警戒していた。だけど、彼の口振りに敵意  
は感じられなかった。

だけど、彼が彼女を疑っているのは確かだった。彼女はそれに気  
付いているのか？それに、彼はどの程度、彼女を疑っているのか？

「こんな所にいないで、休んでれば？」

彼は彼女の顔を見ずに、彼女を気遣った。彼女は驚いたような顔  
を一瞬だけ見せたが、すぐに微笑んで見せた。

「大丈夫よ。お気遣い無く。あなたこそ」

「別に。オレは大したこと無いけど。あんたは酷かったろうが。心  
配してるヤツもいるだろう」

「そうね。ここでは1人だけ」

「氣遣つてるかと思つたけど、そうじゃない。探り合つてるんだ。暑くないのに、変な汗が流れてくる。彼らの会話に入っていけない。サワダは、もしかしたら思つた以上にいろんなことを知っているのかもしれない。イズミ同様に。」

「そろそろ、戻らないといけないんじゃない？その格好では出迎えられるでしょう？」

「そうだな」

「私も、少し休んでるわ。あなたのお父上に、中央からの使者を一緒に出迎えるよう言われているから、準備もしないとね」

彼女は立ち上がり、オレとサワダを交互に見つめ、挨拶をして通路口に向かう。サワダはそれを追いかけたかったのかも知れない。軽く腰を浮かせ、彼女の方へ体を動かしたが、オレの存在を確認して再び座った。

「行けば？サワダも準備があるんだろ？」

「いや……まだ、時間、あるから……」

さすがに、嫌味だったかも知れない。何とも言えない、困ったような表情で、オレから目を逸らした。彼は立つに立てなくなつてしまつたわけだ。

「お使いって、もしかして、『先生』？」

「ああ。サラさんが心配だしな。連れてきた」

「ミナミさんって、まだ医務室？」

「いや、自宅に戻ってるよ。先生はシンに連れて行つてもらってる」  
「ここに住んでるんじゃないんだ」

「まさか。オレやシユウジは私室をもらつてるから、ほとんどここ

に住んでるようなもんだけど、一応、家があるし。あまり帰らないだけで。シンとサラさんは元々N町に住んでたんだけど、こっちの宿舎に住んでる」

そうか、サワダやシュウジさんは、こんなんだけど一応、お貴族さま扱いだもんな。

「わざわざサワダが迎えに行くんだな」

「まあ、オレもちょっと用事があったし。ついでだよ。ここにいても、仕事押しつけられるだけだし。しかしそれにしあって……ちょっと慌ただしすぎるかな？」

体ごと辺りを見渡す。その動きにつられて、オレも同じく周りを見渡す。

「予定より1人だけ先に来るつつたつて、年末の監査でもないのに、大げさな」

「ああ、その年末の監査ってヤツが、なんかエライ人が来るってヤツ？」

「そうだな。あの、中央の楽師……」

その単語に思わず反応してしまったが、必死でサワダから目を逸らした。でも、もうサワダは明らかにティアスを疑ってる。オレがここで必死に誤魔化しても無駄かも知れないけど。

「楽師がどうかした？」

「いや、去年の年末の監査のときには来てたよ。他の人に任せて、半日で戻ったけど」

「そうなんだ」

何だ、そんな話か。

「サワダ中佐！こちらにいらっしやいましたか。探しました。サワダ議員も殿下もお探ししていたようですが」

サワダの横に立ち、敬礼をしながら声を掛けてきた男性は、見たことのない顔だったが、階級章は大尉だった。25、6歳って所だ。サワダに対して媚びるような態度の無い人は、ここでは逆に珍しかった。

彼は大尉の言葉を受け、慌ててベルトループにつけていた携帯を確認する。どうやらかなり着信履歴が残っていたらしく、あからさまに「しまった」と言った顔を見せた。

「今日は監査が来るだけでは無いのですか？」

「ええ。そうなんですが。実は昼ごろ、カントウの姫君がいらっしやるという連絡がありました……」

「……タイミング悪いな、あの女は」

「カントウの姫君」という言葉を聞いて、サワダは嫌な顔をした。

「何か？中佐？」

「いえいえ。何も。わざわざありがとうございます。すぐに戻りますので」

笑顔で敬礼をし、大尉を労った。大尉が立ち去るのを見送り、サワダも立ち上がった。

「カントウの姫君って？」

通用口へ向かうサワダを追いかけながら、話しかけた。イズミな

ら嫌がって話してくれないだろうけど、サワダはきちんと応えてくれた。

「ミハマの追っかけだよ。カリンって言うんだけど。気が強くて、男勝りで、やたら頭の切れる女だ。鋭いっつーか」

「呼び捨てなんだ。お姫様だろ？」

「まあ、幼馴染みみたいなもんだからな。オレは苦手なんだけど。お前も気をつけろよ。余計なこと言うな。特にカリンの前では」

「……そうする」

サワダが言うならよっぽどなんだろうな。でも、どんな人だろ。



## 第4話 続・敵と味方がいる幸せ

01

どうやら、監査にやってくるサエキ大尉の影響も大きいけれど、それと同じくらいにカントウの姫君、「カリン」の影響も大きいようだった。神社から様子を見に来たイツキ中尉が、廊下の壁にもたれながら、せわしなく動く人たちについて解説をしてくれた。「手伝うつもりは全くないけれどね」と言いながら。

彼女の話によると、軍部は監査の対応に追われ、元老院含む議員と文官はVIPの対応に追われるモノらしい。しかし、どちらも国を挙げて受け入れないといけないから、そこで、軍部と元老院側の力関係が……と、またしても鬱陶しい政治の話をされてしまうところだったので、オレは途中で話を遮り、そう言うもんだと納得することにした。

話が重くなる度、自分の心も何だか重くなるような、そんな気分だった。

「それよりさ、サワダがお姫様の前では『余計なこと言つな』とか、『気をつける』とか言つてたけど、どんな人なの？」

「そうね。全くその通りよね。あの人もね。気が強いって言つか、強引って言つか」

「ミハマの追っかけだつて言つてた」

「ええ、そうね」

うわ、顔色変わった。意外と判りやすいな、イツキ中尉って。まあ、相手がミハマなら判らないでもないけど。でも、どれくらいか

な。臣下としてとか？仲間としてとか？

「……オレは、どうしてたらないのかな？」

「一緒にご飯でも食べましょうか？そうだ、サラさんちに行きましよう」

「あれ？イツキ中尉は……」

「私は待機してるわ、もちろん、護衛部隊としてね。でもサラさんも、こっちの様子が気になってると思うし。あのお姫様が来たなんて知ったら、心配でこっちに来ちゃうかも」

「そんなに……？」

どんな女が来るんだ。怖すぎるよ。

「……あら、タイミングの悪い女ね。もう来ちゃったみたい」

イツキ中尉も充分怖いって。タイミングの悪いって……。

廊下を移動する文官達の動きが、さらに慌ただしくなっていた。

「いらっしやった」「殿下を」という声が聞こえる。

「どこ行くの？」

「殿下の所よ？待機してることをお伝えしないとね」

颯爽と歩く彼女の後ろに、申し訳なくついていくオレ。かなり情けない姿かも。

窓の外を見ると、日差しが少しだけ落ちていたのが判る。感覚がおかしくなりそうだけれど、もう夕方だ。

「そう言えば、サワダ議員に言われて、ティアスも監査の人に一緒に挨拶するって言ってた。でもあの人は元老院だから、お姫様の方に気を使わないといけないんじゃないの？」

「そうよね。そんなこと言ってたんだ。ティアス？」

歩きながら横目でオレの顔を確認していたので、黙って頷いて見せた。

「あの人、ここでもちよつと特別なのよね。元老院の中でも影響力の大きい人だし、何より王の妹婿だし、それに、軍部にも影響力があるのよ」

「軍部に？」

「私たちは生まれる前から、シウウジさんから聞いた話でしかないけど。元々、あの人王の妹婿としてここにきたときは、軍部の人だったんですって。まだ二十歳になったばかり位の時期に、今の特殊部隊の基礎をつくって、教官としてそこに所属していたらしいのよ」

「そんな話……」

「今は、おくびにも出さないわ。本当に最初の何年かだけだったんですって。死別されてしばらくしたら、テツちゃん連れて中央にいたらしいし。誰も彼に逆らわないし、王のお気に入りだし、本当のことは誰も口にしないのよね」

なるほど。当時のことを明確に記憶している人は、派閥に入ってるか、影響の小さいところに飛ばされてるかって所か。オレの知ってる沢田のお父さんって、そんな風には見えなかったけどな。

ただ、こっちのサワダとサワダ父の関係を見る限りは、もう何があってもおかしくないんだろうなとも思えた。

「それってさ、思うんだけど。シウウジさん、やばくない？」

「やばいわよ？だからなのか、本気なのかよく判らないけど、シウウジさんに関しては、サワダ議員が自ら引き抜きに来てるけど。中央の研究開発部からも来てたかな？」

それは確か、「楽師」から聞いた。ティアスのシュウジさんへの評価が異常に高かったことに、妙な違和感を覚えていた。

「ユノ。殿下の元へ向かってるの？」

後ろめたさから思わず話を中断してしまったが、声をかけてきたのはティアスだった。イツキ中尉がすごいのか、ティアスがすごいのか、年が近いことも手伝ってか、二人は結構仲が良かった。でも、ミハマのことが絡んだら、どうなんだろうな、イツキ中尉って。

「ええ。ケガ、大丈夫？随分辛そうだけど？」

オレと話をしていたときも、少し汗を掻いているなど言うくらいで普通に見えた。だけど、彼女はティアスに「辛そうだ」と言う。もしかしたらあの時サワダにも、そう見えていたのかも知れない。

「……歩く分には」

「テツちゃんが、ティアスは焦ってるって言ってた」

彼女の前では、そんなこと言っていなかったのに。焦ってる？ティアスが？

「早く治そうとして、動き回るから。心配してた。あの人、言わないけどね」

「……お互い様だわ」

「殿下には、そんな風に言わないくせに」

照れたように、彼女はイツキ中尉から目を逸らした。その様が余計にオレの不安を膨らませる。イツキ中尉の余裕も、彼女の動揺も。

「サワダ議員の所に行くんでしょ？」

言葉に詰まっていたティアスを見かねて、イツキ中尉は話を変えた。彼女もそれに甘えるように、照れた表情のまま頷いた。

「ユノは待機？何か、カントウの姫君がいらっしゃるから、その人にも一緒に、って言われてるんだけど」

「……知ってる？カリン姫のこと」

少し間があつた。その間を、イツキ中尉がどう捉えたかは判らない。

「拝見したことは」

「どんなお話したか、よかったら教えて。気をつけて歩いてね。またケガを酷くしないように。行きましょ、アイハラさん」

可愛く手を振って、ティアスから距離をとりながら再び歩き出すイツキ中尉に、またオレは必死でついていく。ちらちらと彼女の様子を伺いながら。

「酷くって？」

オレは知らない。

「あの人、昨日アイハラさん達を助けに行つたでしょ？」

「うん。もしかして、その時？」

「その時は、テツちゃんがフォローに入つたから大丈夫だったみたいだけど、以前はケガを酷くして医者に怒られてたよ？」

「昨日以外でも、ああやって抜け出してたってこと？」

「みたいね。彼女の行動は、サワダ議員の管理下だから、私たちに  
はどうしようもないし、彼女の自由だとは思っけど。殿下が心配さ  
れるのよね」

知らなかった。だって、ニジマがあんなにオレに彼女との連絡  
係をさせようとしてたってことは、よっぽど動けないのかと思っ  
たから。ケガは治っていたように見えたけど、それも違ってたっ  
てことだし。

「ねえ、何だか面倒だと思わない？」

「何が？」

「だって、アイハラさんだって、判ってるんでしょ？彼女のこと。  
私、こういうのって、どうかと思うなあ」

イツキ中尉の真意を、オレは測りかねた。

02

彼女はその後、ティアスのことには触れなかった。もしかしたら、  
ティアスのことを疑ってるとか、疑ってないとか、もうそんな話じ  
やないのかも知れない。

王宮内にあるミハマの（要するに王太子専用の）客間に、中にい  
るミハマの許可を得て、彼女の後について入る。王太子専用室だけ  
でも、寝室を含めておそらく10以上あるはずだ。多すぎるだろう  
と思っただけど、この王宮の広さと、国の人口を考えたら、そんな  
モノなのかもしれない。

……いや、根本的に何か違うな。感覚がおかしくなりそうだ。

「あれ？テツちゃんもシュウジさんもいるかと思ってたのに……」

一緒にいるかと思ったサワダもシュウジさんも部屋にはおらず、ミハマが1人でいた。王子様1人にしておいて、何してるんだか。

ここは彼が持ついくつかの客間の一つだが、オレが知る限り、どの部屋もほぼ同じ構造だった。20畳ほどの広さの洋間の真ん中にはやたら高そうな革張りのソファセット、アンティーク調の足の低いテーブルに、毛足の長い明るいベージュの絨毯が敷き詰められていた。調度品はほとんど無く、唯一部屋の奥に当たる、開放的な窓際にはテーブルと同じテイストのデスクが備え付けられており、そこにも揃いのように革張りのチェアがあった。デスクの上も綺麗なもので、凝った彫刻の施された淡い光を放つランプが一つあるだけだった。彼の持つ他の私室とは違い、一切手をかけられていないと言うか、こだわりとか、生活感を全く感じなかった。

彼は随分待っていたのか、奥のデスクには空になったグラスが2つ並んでいた。

「シュウジはもうすぐ戻ってくるって言う連絡があっただけど、テツは王宮に着いたって言う連絡があつて以来、連絡とれないや。多分、王宮内にいるってことは、別の所で捕まってるんじゃないのかな？」

「サワダ議員が、ティアスを連れて中央の監査の方にご挨拶ですつて」

彼女の口振りには、もちろん悪意が籠もっていた。

「そう。なら、きっとカリンの元にもつれていくだろうね。もう来てるらしいし。もしかしたらテツもテツキさんに捕まったかな」

「カリン姫はおそらくこちらにいらっしやいますから、私、待機してます。シュウジさんももうしばらくしたら戻っていらっしやるのでしょうか？裏に回っていますから」

「いや、良いよ。二人でここにいてくれれば。監査の人はともかく、カリンはオレの周りにいる人のことは、十分承知してるから」

「はい」

ミハマの言葉に、イツキ中尉は満面の笑みを見せた。ミハマがこういうことを言うのはいつものことなのに、彼女は特別なことのように喜んでいた。

「アイハラは……」

「殿下がカリン姫と会食中、一緒にサラさんの様子を見に行こうと思ってる」

「そう。オレもそっちに行きたいな。頼むよ」

「はい」

彼女は彼の中の「カリン姫」と「護衛部隊及び自分」のバランスを見て、喜んでいたんだ。普段なら、そんなこと当たり前のように自分たちに比重を置かれていることを知っているくせに、何でこんなに喜ぶんだろう。もしかしたらカリン姫って、ミハマにとって結構重要な人物なのかもしれない。だからこそ、彼女はこんなに喜ぶのかな。

「ミハマ、良いですか？謁見の間に行きますよ」

制服の襟元が乱れた状態で、よれよれの髪型のままのシュウジさんが、大慌てで部屋に入ってきた。乱れてるのはいつものことだけど、慌ててるのはなかなか見ないな。



「なんだよ。カリン？何で王の前で？」

「別にカリン姫はあれですけど、サワダ議員がティアスとテツを連れて、王の前でお話しされてるんで。これ以上、妙な噂が広がらないうちに、行きますよ」

「連絡とれないと思ったら。やらせとけばいいよ、もう。めんどくさいし」

「まあ、あなたならそう言うと思ったんですけど、そう言うわけにもいかないので。行きますよ。ユノ、後を頼みます。シンには連絡してあるので」

彼女は黙って頷き、引つ張られていくミハマを見送った。

「サラさんちに行くのは、なしね。仕事が出来たみたい」

彼女はデスクにあった2つのグラスを持って、奥にある扉から給湯室に入った。これも他の客室と同じ作りだった。

「オレ、何か手伝おうか？」

「大丈夫よ？ありがとう。でも、良かつたら部屋で待機してて」

「邪魔しないって。黙ってるから」

「……でも、相手はあのカリン姫だから」

だから、それは一体どんな女だ！

彼女がグラスを拭いて、食器棚に仕舞ったのを見届けて、彼女の後について給湯室を出る。

「中央の楽師殿」

何だ、なんだなんだ。サワダもイツキ中尉も、何のつもりだ？！その名前を出したらオレが動揺するとも！？

「……が、どうかした？」

「彼女にも、あなたは疑われたんでしょ？カリン姫の眼光は、きっと彼女より鋭いわよ？」

人の悪い笑みを浮かべてから、彼女は客間の扉に手をかけた。てつきり、様子を伺われているのかと思った。もう、ホントにどう動いて良いか判んないって。

「……あ」

扉を開けて、いやなものでも見たように彼女は表情を歪ませた。扉の外に立っていたのは、この城内では見たことのない女性だった。服装も、その存在感も。パンツスーツで出歩く女性って、この城内にはいないしな。

「イツキ中尉、どこかへお出かけ？ミハマは？」

「先ほど、姫君のお話を……入れ替わりだったようですね。謁見の間に向かっていますわ」

これが噂のカリン姫？！美人じゃん！好みじゃないけど、すらつと背の高い、モデル体型に、アジアンビューティって言葉の似合う端整な顔立ち。可愛いイツキ中尉も良いけど、クールなカリン姫も、まま良いよ！でも、モデル系って話なら、クールビューティ系のミナミさんか？

「そちらは？……この部屋にいるには随分、階級が……」

「殿下の元で見習いとして身の回りのことをしております、アイハラユウトです。客人扱いでして……」

イツキ中尉の目配せを受け、敬礼して簡単に名乗る。しかし、はつきりものをいう人だな、この人。美人だけど、性格きつそうな顔してるし、サワダが言った「強引」って言葉も、あながちウソじゃなかったりして。

「へえ。そんな話は初耳だな」

「……最近ですの。2ヶ月くらいですから。先日の中での報告会の際も殿下に同行して中央まで。カリン姫はいらっしゃらなかったのですか？」

「父が向かっていたのだが、私は二日目からしかいけなくて。オワリに魔物が出て、急いで帰ったという話しか聞けなかったよ」

入れ違いになったってわけだ。図々しくも、呼ばれてもいないのに、しかも国王を置き去りにしてミハマを追いかけてくるくらいだ。かなり会いたかったんだろうな。それが、イツキ中尉には不愉快なわけだ。

ティ阿斯にはここまでの敵意は見せないくせに……おかしい話だ。ミハマは彼女を好きなんだから、彼女のことを気にした方がいいと思うけど。もしかして、イツキ中尉もサワダとティ阿斯が怪しいこと、知ってるってことかな。だから、彼女を気にしてないってことか？

「そう言えば、アイハラ殿は、南の方からいらっしゃったのですか？」

「え……えーと」

いや、この辺の出身なんですけど……。なんで？思わずでもってしまった。その間に、イツキ中尉が割って入ってくれた。

「いえ、その……各地を転々としてまして。ねえ？」

黙って頷く。出身を疑われるって、どんな状況だよ？

「まあ、ミハマのことだから、どんな子が側にいても不思議ではないけれど……その子は、ちょっと違うかな？彼が懐に入れるとは考えにくい」

「いくらカリン姫でも、それは過ぎませんか？」

「失礼。入れ違ったのなら戻りますよ。そんな番犬のように吠えなくても」

イツキ中尉も、立ち去る彼女のあとは追わなかった。これ以上関わりたくなかった、と言うのがホントの所だろう。

「何で、南？」

「アイハラさんが、この国の人じゃないでしょう？ってことよ。なんて言ったかしら。この間シュウジさんがあの人のあの妙な力のこと、何とか言ってたのよね。ホント、めんどくさい女。アイハラさん、私は謁見の間の裏に回ってますから、ちゃんと自室で待機しててくださいね？」

オレは黙って頷いたが、言うとおりにするつもりは全くなかった。

02

イツキ中尉を見送った後、一旦部屋に戻ろうと思ってエレベーターで5階へ下りた。そこはびっくりするほど、一気に人がいなくなっていた。あんなにはたばたしていたのに、廊下は静かなもんだ。確かに、このフロアは客人用に用意されているらしいので、通行するだけなのだろうが。

部屋で、以前借りた軍服に着替え、エレベーターに向かう。

最上階に行くには、エレベーターに暗証番号を入れないといけないけれど、それも実は知っている。将官クラスの軍人とたまたま乗り合わせたときに、こっそり盗み見といた。このバッジの効力のすごさも思い知った。

知ってることをあいつらに黙ってて正解だったのかも。もしかしたらイツキ中尉も、あんなにあっさりオレを置いていかなかったかもしれないし。

壁を作られているのも知ってる。彼らの中に入っていけない、入らせてもらえないのも知ってる。だけど何も知らないまま、このままでいたいとも思わない。

ここでこのまま、戻ることの出来ないまま、ただ無為に時間を過ごしていくのは嫌だった。

特に、こここそしてるあの二人を、微妙な距離感を持っているティアスを、見ているのは辛い。

最上階はフロア全てを使ったような広い廊下が広がり（しかもレツドカーペット）、その先には唯一謁見の間がある。エレベーターの出口に守護の兵が立っていたが、オレのバッジを見たら簡単に通してくれた。そもそも、許可がなければ、ある程度許されているものでなければ、この階までは入れないのだから、ってことだろう。

しかし、ここまで来たのは良いけれど、どうしたものか。

謁見の間には扉一枚。その前には同じく門番のように兵が立っている。廊下には誰もいない。どこかから中が覗けないものかと思つてたけど、難しそうだな。

でも、イツキ中尉もこの部屋の裏に回るって言ってたし、どこかあるんじゃないかと思つただけ……。――

とりあえず長い廊下を歩いて、少しずつ扉に近づいていくことに

した。扉の前に立っていた人に咎められるかと思ったけれど、ちょうど窓際から軍人が現れ、敬礼をして交代していった。

交代は良いけど……どこから現れたんだ？壁しかないのに。

どうやら隠し扉があるらしく、交代した軍人が壁の一部を扉のようにして開け、中に入っていた。オレもその後をおって、窓際の壁に向かう。もちろん、扉の前に立つ軍人にはきちんと敬礼をして何もなければのように壁紙を貼られているのに、よく見るとつつすらと溝があった。頻繁に使われているからなのか、最近作られたからかは知らないけれど、壁紙は真新しかった。ほとんど違和感はなかったけれど、よく見ないと、知らないかと判らなかつた。

先に入った軍人に倣って、溝の部分に触れると、奥の方に押すことが出来た。どうやらこの部分がノブになっているらしい。開けにくくて一回失敗してしまつたけど、何とか2回目には開けることが出来、先に続く梯子段を登り、前に進む。梯子段とはいえ、作りはしっかりしていた上に絨毯が敷いてあり、足音は響くことなく静かだった。

暗くて狭いけど、どこに行くんだろう。隣は謁見の間のはずだよなあ。声も聞こえないし。

しばらく登っていたら、暗くてよく判らなかつたけれど踊り場が現れた。ここにもご丁寧に絨毯が敷いてあつた。左手の、謁見の間があるはずの壁側から、微かに光が漏れていた。近付いてみると、そこからあちら側が覗けるスリットが空いていた。

もしかしてこっち側って、軍が王様を守るために用意した隠し部屋ってことか？（部屋って言うには狭すぎるけど）軍服着てきて良かった……。バツジつけて、軍服着てなかつたら、多分、入るときに止められてたかも。

スリットから向こう側を覗くと、まだ赤い絨毯が続いていた。扉も見えないけれど、奥と、入ってきた側にそれぞれ一つずつ。どうやら、謁見の間はさらに先らしい。暗かつたので気付かなかつたが、

ここにも一人、軍人が立っており、見張っていた。敬礼をしてそくさと先に向かうことにした。

梯子段を登りきると、急に眩しくなり思わず目を閉じた。梯子段と同様、絨毯の敷き詰めてあるフロアは、やはり狭かった。だけど、全面ガラスになっている壁を一枚挟んで、その先には謁見の間が広がっていた。ちょうどロフトから見下ろすような形だった。

奥に玉座が見え、そこにミハマのお父さんであるオワリ王が座っていた。その前にミハマとサワダ父が並んで立ち、サワダ父の横にティラスとサワダがいた。ミハマの横にはシュウジさんが立っていた。

室にはカリン姫も見える。距離は離れ、謁見の間の中心にいたけれど、彼女は真っ直ぐにミハマを見ていた。

謁見の間と言うから、もっと狭いかと思っただけど、バスケットが3つくらい入りそうな程度には広かった。今いる監視部屋と同じ高さには、オペラを見るためのホールのような、階段状の座席や、個室も見えだし、そこから下に降りられる、レッドカーペットを敷き詰めた広い階段もあった。

入口も、監視部屋側にあったものとは別に、豪華に飾り付けられたものが玉座の右手側にあった。客人用のエントランスからつながっているのは、こちらの扉のようだった。

それにしても……このガラス、向こうからも丸見えなんじゃないのか？ここにも見張りの人が立ってるけど、大丈夫？

「こら。何してんだお前は。いつの間に忍び込んだ？」

「うわ！でた！やっぱり出た！」

オレの首根っこを引掴んでいたのは、案の定イズミだった。

一応周りを見渡したはずなのに、一体どこに潜んでいたんだ、コイツは。

「姿を見なかったから、少しだけ安心してたのに……」

「ずっとお前らの側にいたけどね。ミハマの客室にいたときとか」

もしかして、あの時グラスが二つあったのって……！？怖い、怖すぎる。忍者かコイツは！でも、イツキ中尉やミハマの態度から察するに、いつものことなんだろうな……。「いつものこと」で、ホントにすんでしまいそうなコイツが怖い。

「まあいいか。あんまり騒ぐなよ？今日はカリン姫がいらっしやる」

イズミが下を指さす。よく見たら壁際には親衛隊のキヅ大佐とカグラ、王の親衛隊も2名、それから元老院派のソノダ中佐、さらに見たことのない軍服を着た人が二人立っていた。多分、カリン姫について来たカントウの軍人なんだろう。実戦には向かなさそうな、真っ白な軍服だった。お出かけ用か？

「どうやってここに来たか、聞かないんだ」

「めんどくせえし。聞いても仕方ないし」

「いつも五月蠅いくせに」

「オレの業務と、あいつらに害がなければ、どっちでも良いんだよ、本当は。だって、ここに来たのは、お前の意志なのに。オレには関係ないし」

下を見たまま、オレの首から手を離れた。気のせいか、やっぱりイズミの態度は随分柔らかくなっているような気がした。

まあ、以前もそう思い違ってしまったって、エライ目に遭ってるんだけど。

「イツキ中尉には、自室で待ってろって言われたけど」



「それは、ユノちゃんの意見だ。あの子、優しいからさ」

それって、オレがここに来てると、オレに何かあるみたいと言いはるんですけど。怖いな、ホントに。

「……このガラス、大丈夫なのか？」

「ああ。向こうからはただの壁にしか見えないさ。こっち側は明らかに作りがみすばらしいのに、見せられるわけないし？」

いや、けっこうちゃんとしてますけどね。どういう構造なのか知らないけど、マジックミラーのようなものだろうか。何か、怪物以外で、やっと未来っぽいものに遭遇したな。

「これ、中央とオワリしか使ってない、特殊技術。オレが確認した限りでは」

「……確認って?! オワリって特別待遇ってこと？」

「違う違う。中央もオワリも、別々に開発してる。もちろん、報告は出来ないし。ただ、オレがいろんな国の裏側を見た限り、これに類似した技術は見あたらないね」

「隠密か!?! お前は!」

「今さら何を」

そこは突っ込み返してくれよ……。お前の技術の方が恐ろしいよ、オレは。

「ただ、ちょっと静かにしてるよ? カリン姫は手強いから」

「何だよ、向こうの声も聞こえないのに、こつちの声が……」

「向こうの声は、あつちにヘッドホンがあるから、そこから聞ける。こつちの声は確かに聞こえない程度の厚みはあるけど、相手はあのお姫様だしね」

「どんな超人なんだよ。聞こえるのか？あの人には」

「聞こえてるかもね。足音とか、歩き方とかで、どんな人が大体判断しちゃうような人だし。アイハラなんか、軍人じゃないことどころか、やたら寒がりってことまでばれる気がする」

それで南の方とか言ってたのか？つーか、寒がりじゃないツての。この世界が寒すぎるの、オレがいた時代に比べて。

でも、イズミの言うとおりだ。しっかりばれてるよ。一体何者なんだよ、あの人。お姫様なのか？

イズミはオレを置いて、ヘッドフォンが設置してある個室に向かったので、それについていった。不思議と、彼は文句も言わず、オレを自由にさせてくれた。

何か、イズミとの力加減って良く判らないと言うか、難しいんだけど……判らないなりに、何となくだけど、機嫌のいいときは判るようになってきた。

今日のイズミは、決して機嫌は良くないだろう。なんと言ってもミナミさんがいない。あの人が側にいるときといないときでは、コイツの機嫌は驚くほど違う。

だけどそんな状況でも、オレがする行動一つで、機嫌が良くなることもある。

不思議だけど、オレが「こうしたい」って言って動くと、イズミは驚くほどあっさりを受け入れてくれる。でも、同じようにオレが意志を見せて動いていても、イズミのカンに触れることもある。そこにはなにか、彼なりの明確な基準があるように最近思えてきた。

個室の中からも、謁見の間を見下ろすことが出来た。まるでミキサー室のようなその部屋には、王の親衛隊らしき軍人が一人、ヘッドフォンを耳に当て座っていた。

「緊急事態があったら、あの人が警報を鳴らす」と、珍しくイズミが自分から教えてくれた。

イズミに倣って、何に使うか判らない、たくさんのスイッチがついた機材の上に放置してあった5個のヘッドフォンから適当に一つ選び、耳に当てると、カリン姫の声が聞こえてきた。見下ろしている人から、顔が見えないのに声が聞こえるのは、何とも不思議な感覚だった。

「イズミ、あれは誰？いま入ってきた人。元老院の人みたいだけど」

サワダ父と同じ制服を着た、初老の人物が監視部屋側の入口から入ってきた。サワダ父には親しげに声をかけ、王やカリン姫には跪いてみせるが、ミハマには目もくれない。

逆に、カリン姫は相手にもしていないように見えたけど……。

「元老院のナカタ議員。名前くらいは聞いたことあるだろ？まあ、オレ達のような下っ端じゃ、お会いすることもないしな」

ちらっと、同じ部屋にいる親衛隊員の目を気にしながら、イズミは嫌味っぽくそう言った。

03

イツキ中尉を見送った後、一旦部屋に戻ろうと思ってエレベーターで5階へ下りた。そこはびっくりするほど、一気に人がいなくなっていた。あんなにばたばたしていたのに、廊下は静かなもんだった。確かに、このフロアは客人用に用意されているらしいので、通行するだけなのだろうが。

部屋で、以前借りた軍服に着替え、エレベーターに向かう。  
最上階に行くには、エレベーターに暗証番号を入れないといけな

いけれど、それも実は知っている。将官クラスの軍人とたまたま乗り合わせたときに、こっそり盗み見といた。このバッジの効力のすごさと思い知った。

知ってることをあいつらに黙ってて正解だったのかも。もしかしたらイツキ中尉も、あんなにあっさりオレを置いていかなかったかもしれないし。

壁を作られているのも知ってる。彼らの中に入っていけない、入らせてもらえないのも知ってる。だけど何も知らないまま、このままでもいいとも思わない。

ここでこのまま、戻ることの出来ないまま、ただ無為に時間を過ごしていくのは嫌だった。

特に、こそこそしてるあの二人を、微妙な距離感を持っているティアスを、見ているのは辛い。

最上階はフロア全てを使ったような広い廊下が広がり（しかもレツドカーペット）、その先には唯一謁見の間がある。エレベーターの出口に守護の兵が立っていたが、オレのバッジを見たら簡単に通してくれた。そもそも、許可がなければ、ある程度許されているものでなければ、この階までは入れないのだから、ってことだろう。しかし、ここまで来たのは良いけれど、どうしたものか。

謁見の間には扉一枚。その前には同じく門番のように兵が立っている。廊下には誰もいない。どこから中が覗けないものかと思っただけ、難しそうだな。

でも、イツキ中尉もこの部屋の裏に回るって言ってたし、どこかあるんじゃないかと思ったんだけど……。

とりあえず長い廊下を歩いて、少しずつ扉に近づいていくことにした。扉の前に立っていた人に咎められるかと思ったけれど、ちょうど窓際から軍人が現れ、敬礼をして交代していった。

交代は良いけど……どこから現れたんだ？壁しかないのに。

どうやら隠し扉があるらしく、交代した軍人が壁の一部を扉のようにして開け、中に入っていた。オレもその後をおって、窓際の壁に向かう。もちろん、扉の前に立つ軍人にはきちんと敬礼をして、何もなければのように壁紙を貼られているのに、よく見るとつつすらと溝があった。頻繁に使われているからなのか、最近作られたからかは知らないけれど、壁紙は真新しかった。ほとんど違和感はないかったけれど、よく見ないと、知らないとは判らなかった。

先に入った軍人に倣って、溝の部分に触れると、奥の方に押すことが出来た。どうやらこの部分がノブになっているらしい。開けにくくて一回失敗してしまったけど、何とか2回目には開けることが出来、先に続く梯子段を登り、前に進む。梯子段とはいえ、作りはしっかりしていた上に絨毯が敷いてあり、足音は響くことなく静かだった。

暗くて狭いけど、どこに行くんだろう。隣は謁見の間のはずだなあ。声も聞こえないし。

しばらく登っていたら、暗くてよく判らなかったけれど踊り場が現れた。ここにもご丁寧に絨毯が敷いてあった。左手の、謁見の間があるはずの壁側から、微かに光が漏れていた。近付いてみると、そこからあちら側が覗けるスリットが空いていた。

もしかしてこっち側って、軍が王様を守るために用意した隠し部屋ってことか？（部屋って言うには狭すぎるけど）軍服着てきて良かった……。バジつけて、軍服着てなかったら、多分、入るときに止められてたかも。

スリットから向こう側を覗くと、まだ赤い絨毯が続いていた。扉も見えるけれど、奥と、入ってきた側にそれぞれ一つずつ。どうやら、謁見の間はさらに先らしい。暗かったので気付かなかったが、ここにも一人、軍人が立っており、見張っていた。敬礼をしてそそくさと先に向かうことにした。

梯子段を登りきると、急に眩しくなり思わず目を閉じた。梯子段と同様、絨毯の敷き詰めてあるフロアは、やはり狭かった。だけど、全面ガラスになって壁を一枚挟んで、その先には謁見の間が広がっていた。ちょうどロフトから見下ろすような形だった。

奥に玉座が見え、そこにミハマのお父さんであるオワリ王が座っていた。その前にミハマとサワダ父が並んで立ち、サワダ父の横にティラスとサワダがいた。ミハマの横にはシュウジさんが立っていた。

室にはカリン姫も見える。距離は離れ、謁見の間の中心にいたけれど、彼女は真っ直ぐにミハマを見ていた。

謁見の間と言うから、もっと狭いかと思ったけど、バスケットが3つくらい入りそうな程度には広かった。今いる監視部屋と同じ高さには、オペラを見るためのホールのような、階段状の座席や、個室も見えだし、そこから下に降りられる、レッドカーペットを敷き詰めた広い階段もあった。

入口も、監視部屋側にあったものとは別に、豪華に飾り付けられたものが玉座の右手側にあった。客人用のエントランスからつながっているのは、こちらの扉のようだった。

それにしても……このガラス、向こうからも丸見えなんじゃないのか？ここにも見張りの人が立ってるけど、大丈夫？

「こら。何してんだお前は。いつの間に忍び込んだ？」

「うわ！でた！やっぱり出た！」

オレの首根っこを引掴んでいたのは、案の定イズミだった。

一応周りを見渡したはずなのに、一体どこに潜んでいたんだ、コイツは。

「姿を見なかったから、少しだけ安心してたのに……」

「ずっとお前らの側にいたけどね。ミハマの客室にいたときとか」

もしかして、あの時グラスが二つあったのって……！？怖い、怖すぎる。忍者かコイツは！でも、イツキ中尉やミハマの態度から察するに、いつものことなんだろうな……。「いつものこと」で、ホントにすんでしまいそうなコイツが怖い。

「まあいいか。あんまり騒ぐなよ？今日はカリン姫がいらっしやる」

イズミが下を指さす。よく見たら壁際には親衛隊のキヅ大佐とカグラ、王の親衛隊も2名、それから元老院派のソノダ中佐、さらに見たことのない軍服を着た人が二人立っていた。多分、カリン姫について来たカントウの軍人なんだろう。実戦には向かなさそうな、真っ白な軍服だった。お出かけ用か？

「どうやってここに来たか、聞かないんだ」

「めんどくせえし。聞いても仕方ないし」

「いつも五月蠅いくせに」

「オレの業務と、あいつらに害がなければ、どっちでも良いんだよ、本当は。だって、ここに来たのは、お前の意志なのに。オレには関係ないし」

下を見たまま、オレの首から手を離れた。気のせいか、やっぱりイズミの態度は随分柔らかくなっているような気がした。

まあ、以前もそう思い違ってしまったて、エライ目に遭ってるんだけど。

「イツキ中尉には、自室で待ってるって言われたけど」

「それは、ユノちゃんの見解だ。あの子、優しいからさ」

それって、オレがここに来てると、オレに何かあるみたいない言い

方なんですけど。怖いな、ホントに。

「……このガラス、大丈夫なのか？」

「ああ。向こうからはただの壁にしか見えないさ。こっち側は明らかに作りがみすばらしいのに、見せられるわけないし？」

いや、けっこうちゃんとしてますけどね。どういう構造なのか知らないけど、マジックミラーのようなものだろうか。何か、怪物以外で、やっとな未来っぽいものに遭遇したな。

「これ、中央とオワリしか使ってない、特殊技術。オレが確認した限りでは」

「……確認って？！オワリって特別待遇ってこと？」

「違う違う。中央もオワリも、別々に開発してる。もちろん、報告は出来ないし。ただ、オレがいろんな国の裏側を見た限り、これに類似した技術は見あたらないね」

「隠密か！？お前は！」

「今さら何を」

そこは突っ込み返してくれよ……。お前の技術の方が恐ろしいよ、オレは。

「ただ、ちよつと静かにしてるよ？カリン姫は手強いから」

「何だよ、向こうの声も聞こえないのに、こっちの声が……」

「向こうの声は、あつちにヘッドホンがあるから、そこから聞ける。こっちの声は確かに聞こえない程度の厚みはあるけど、相手はあのお姫様だしね」

「どんな超人なんだよ。聞こえるのか？あの人には」

「聞こえてるかもね。足音とか、歩き方とかで、どんな人が大体判断しちゃうような人だし。アイハラなんか、軍人じゃないことどこ



るか、やたら寒がりってことまでばれる気がする」

それで南の方か言ってたのか？つか、寒がりじゃないツての。この世界が寒すぎるの、オレがいた時代に比べて。

でも、イズミの言うとおりだ。しっかりばれてるよ。一体何者なんだよ、あの人。お姫様なのか？

イズミはオレを置いて、ヘッドフォンが設置してある個室に向かったので、それについていった。不思議と、彼は文句も言わず、オレを自由にさせてくれた。

何か、イズミとの力加減って良く判らないと言つか、難しいんだけど……判らないなりに、何となくだけど、機嫌のいいときは判るようになってきた。

今日のイズミは、決して機嫌は良くないだろう。なんと言ってもミナミさんがいない。あの人が側にいるときといたないときでは、コイツの機嫌は驚くほど違う。

だけどそんな状況でも、オレがする行動一つで、機嫌が良くなることもある。

不思議だけど、オレが「こうしたい」って言って動くと、イズミは驚くほどあっさりを受け入れてくれる。でも、同じようにオレが意志を見せて動いていても、イズミのカンに触ることもある。そこにはなにか、彼なりの明確な基準があるように最近は思えてきた。

個室の中からも、謁見の間を見下ろすことが出来た。まるでミキサー室のようなその部屋には、王の親衛隊らしき軍人が一人、ヘッドフォンを耳に当て座っていた。

「緊急事態があったら、あの人が警報を鳴らす」と、珍しくイズミが自分から教えてくれた。

イズミに倣って、何に使うか判らない、たくさんスイッチがついた機材の上に放置してあった5個のヘッドフォンから適当に一つ選び、耳に当てると、カリン姫の声が聞こえてきた。見下ろしてい

る人から、顔が見えないのに声が聞こえるのは、何とも不思議な感覚だった。

「イズミ、あれは誰？いま入ってきた人。元老院の人みたいだけど」

サワダ父と同じ制服を着た、初老の人物が監視部屋側の入口から入ってきた。サワダ父には親しげに声をかけ、王やカリン姫には跪いてみせるが、ミハマには目もくれない。

逆に、カリン姫は相手にもしていないように見えたけど……。

「元老院のナカタ議員。名前くらいは聞いたことあるだろ？まあ、オレ達のような下っ端じゃ、お会いすることもないしな」

ちらつと、同じ部屋にいる親衛隊員の目を気にしながら、イズミは嫌味っぽくそう言った。

04

明らかにイズミの機嫌が変わったのは判った。あの初老の男が、「ミハマに敵対している派閥」の重要人物であろうことは明確だった。あんなにあからさまで良いのかって言うくらい。

そのわりにはサワダ父はいつも通りって言うか、様子が変わらないうちと言うか……。ナカタ議員の態度から察するに、サワダ父とは友好関係にあるはずだ。

「ナカタ議員って、エライ人？元老院の中で？」  
「うーか、そもそも元老院って？そんなにエライの？おかしくない？」

室内にいる親衛隊員の様子を伺いながら、イズミに耳打ちをした。

「いや、元老院でスゴイだろうよ」

「まずそこがよく判らん。王子様のがエライし。元老院があるなら代議院とかもあるんじゃないの？」

「何じゃそりや？ そう言う話はシユウジさんとしろよな。元老院がエライのは決まってるだろうが。名目上この国では『王の助言機関』であり、事実上、『統治機関』なんだからさ。独立してるしね」

何か、子供に諭すような口調のくせに、嫌味たっぷりにそんなこと言われてもなあ。それにしたって、ミハマの方がエライはずなんだが。まあ、サワダ親子問題はあつたにしても。

「ちなみに、そこで一番力持つてる人」

……他にもつとエライ人はいそうなんだけどな。大体、サワダ父と友好的な関係なのが妙に引かかる。

おかしな話じゃないか。立場的には微妙な仲のはずだ。サワダ父は王の義弟に当たるわけだし、王の信頼も厚いつて言うし、息子も国を背負って立つような戦士なわけだし。この王宮内での政治的な話で言えば、サワダ父がナカタ議員にとっては一番敵として認識されそうなもんだ。年だつて若いし、叩いたらいろいろ埃の出てきそうな人だし。

どっちも別に、国王になれるわけじゃない。継承権はないのに。なのに、少なくとも階下から聞こえるナカタ議員の声からは、サワダ議員への嫌味とかそねみのようなものは聞き取れなかった。

ティアスのことなんか真っ先に突っ込みそうなのに、彼女の存在などいないかのように話をしていた。

上から見ると、誰が誰のことを見ていて、誰を視界に入れてないのかが、ものすごくよく判る。吐き気がしそうだった。

「いつもこんなコトしてんだ？」

軽く嫌味の混じった声で、イズミに突っ込んでみたけど、下の会話に集中してるのか、ちよつと気の抜けた声で返事が返ってきた。

「お仕事ですから」

「いつもそう言うけど、どんな仕事だよ？」

「うちの王子様を守り、彼の望む方へ進むための土台作り」

「これが？」

「何かあつたら困るだろうが？」

そうだけどさ……。何かストーカーみたいだし、いろんなこと知りすぎて怖い。それに、ホントにそれ関係あるのかって言うところには必死だし。

サワダとティアスのこともどこまでホントは知ってるんだろう。

その情報の出し方も隠し方も、全て「ミハマのため」なんだろうか。

「ま、こんだけ役者が揃つても、王もサワダ議員もいらつしやるし、面白いことは何もないけどね」

笑いながらそう言ったイズミを、ちらつと同じ室にいた親衛隊の人が睨んだように見えた。多分、イズミは判つてて言ってるだろうけど。自分が嫌味を言うのは良いのか！？

「なんでサワダ議員？」

「あの方には王もナカタ議員も、シュウジさんですら一目置いてるからさ。ミハマがこんな場で余計なことを喋ると思えないし、テツもティアちゃんも借りてきた猫みたいで可愛いもんだし？」

確かにそう言われてから謁見の間の様子を伺ってみると、そういう風に見えなくもないかも。カリン姫にいたってはアウエーなわけだし。

サワダやティアスよりも、ミハマの方がよっぽど借りてきた猫みたいだよ。普段は黙っていたとしてもものすごい存在感があるのに、それすら消し去ろうとしてるように見えた。

確かにこんな場に「王子不在」なんてことは、政治的に不利になることばかりだろうけど、ミハマがただ存在してるだけって判つてるなら、何でシュウジさんはわざわざこんな場に引っぱり出すんだよ。端から見てるからこそ、ミハマがいたたまれなくなってくるよ。

「何かあったら困る、何つつといて、何か起きて欲しそうに聞こえたのは気のせいかな？」

「気のせいだろ？」

顔が、悪戯を考えてる最中の小学生だろうがよ。説得力ゼロだ。

「いや、何も無いだなんて絶対思ってない！」

「カリン姫がいらっしゃるからね」

何を彼女に期待してんだ？別に、この国の政治に口が出せるわけでもないのに。いくら大国のお姫様だからって、所詮は別の国の話だ。中王が口を出すのとは、また違うし……。

サワダ議員が王に断りを入れた上で、ティアスをカリン姫に紹介した。その様子を、後ろからサワダがじっと伺っているように見えた。

オレの隣では、同じような表情でイズミがその様子を伺っていた。

「随分遠いところから来ているんですね？」

北方から来ているということと、天から来た魔物に対する力を持つているというサワダ議員の説明を受けてか、自身で判断したのかは判らないが、カリン姫はティアスにそう言った。彼女は姫に笑顔で応える。

「そうですね……ここからですと……」

「随分、ご苦労もされたようだ」

「そんなことは」

まあ、ものすつごく苦労はしてるんだろうけど。否定するしかないよな、ここは。

ティアスの笑顔は完璧だった。知ってるオレですら騙されそうだった。だけど。

「どこかでお会いたことがあるような気がします……」

そう言うことか！

中央に出入りしてるなら（しかもオワリから行くより数段近いところの人だし）、「中央の楽師」とも面識があるはずだ。

もしかして、イズミはカリン姫にティアスのことを判断させるつもりで？それが面白いつて？

サワダもそれを期待していたのか知らないけれど、少しだけ表情が緩んだ。すぐに元に戻ったけれど。

「申し訳ありません。人違いではないでしょうか？お会いしてしましたら、あなたのような方を忘れるはすありませんし」

その様子を知ってか知らずか、それでもティアスは完璧だった。カリン姫はまだ何か突っ込みたそうだったが、監視部屋側から入ってきた伝令の兵の存在に、身を引いた。

ヘッドフォンから、階下の声とは別の所から緊急連絡として、『中央の監査の方がいらした』と言う声が聞こえた。どうやら、下に現れた兵もそれを伝えに来たようだ。

「急ですね。監査の方は別日だとお伺いしていましたが」

「ええ。今朝連絡があつて、今日に変更になったと。よろしければテラスに行きませんか？私に用があつて、と聞いておりますけれど」

様子を伺ってから初めて、ミハマの言葉を聞いた。でも、まるで彼の言葉ではなく、用意された台本を読んでいるように聞こえた。

「よろこんで」

そう笑顔で応えたカリン姫が可愛く見えてしまった。ちよつとすごいな。

「……サワダ中佐も一緒に。良いですよ、サワダ議員。良かったら、ティアス殿も是非。監査の方にはサワダ議員からご紹介していただければ結構ですけど」

笑顔でサワダ議員のそう言ったミハマの様子を見ながら、オレの隣でイズミが声を殺して泣きながら笑っていた。

05

当然のことだが、ティアスはちらつとサワダ議員の顔色を伺った。何故かサワダも一緒に。

「行つておいで。王子をお守りするのがお前の役目だろう」

表情を崩すことなく、穏やかな声でサワダ議員は息子にそう言った。息子の方と言えば、目を伏せ、まるで項垂れるように会釈をし、ミハマのそばに歩み寄った。

「……私は……」

「好きにすればいい。年の近いものと一緒の方が、君も気楽だろう？ 挨拶はあとでればいい。テツもな」

「……そうですね」

ティアスはミハマとサワダ議員の様子を、視線だけで交互に伺いながらも、静かに頷いた。サワダも、父の言葉を受けて頷いたが、彼の視線はティアスを見ていた。

「テラスって……？」

どこのことをいつてるのか判らなかったので、イズミに聞こうと思ったなら、既に立ち上がっていた。

「って、待てよ！もう！」

といったところで、連れてってくれるわけもないし。どうせイズミの行くところはミハマの行くところなんだから、ついていくしかない。

ミハマ達がシュウジさんを置いて表口の方から連れ立って出ていったことを確認してから、イズミは個室を出た。オレも小走りですれについていく。イズミはオレが入ってきた方とは逆の、監視部屋の奥に向かっていた。

オレが入ってきた入口と同じような梯子段があり、そこを降りていく。位置的には階下の表玄関の横辺りになる。



「イズミ！」

梯子段を降りきったところで叫んだら、睨まれた。壁を指さすので従って覗くと、微かに光が漏れていた場所から向こう側を確認できた。

「……ごめん」

カリン姫がこちら側をじっと見ていた。壁しか見えないはずなのに、まるでオレ達が見えているかのように。

「ついてくるなら、黙ってついてこいって」

イズミらしからぬ台詞を吐いて、僅かな光が差すだけの、床も見えないような暗く細い裏道を、迷いもせずに歩いていく。壁一枚挟んだ向こう側を歩く、ミハマ達と同じ速度でゆつくりと。

壁にある覗き穴には先ほどの監視部屋と同じようなガラスが仕込んであった。もう、カリン姫は、こちら側にいるオレ達を見てはいなかった。隣を歩くミハマだけを、乙女の顔で見つめながら、笑顔で話をしていた。その二人の後ろをサワダとティアスがついていく。あの夜の彼らから考えると、不自然なくらい、距離をあげながら。

「……なんだよ？」

突然立ち止まったイズミを責めたら、再び睨まれてしまった。彼は黙って、目の前の壁を指さす。同じように空いた微かな隙間から向こう側を覗くと、そこにはこの王宮の一面全てを渡った、ベランダが広がっていた。しかも一面だけではなく、角を渡って向こう側にも続いているようなので、かなりの広さだろう。

ただ、外側に面した部分は、天井まで全て、まるで鉄格子のように囲まれていた。なんだか鳥かごのようだった。安全のためなのだろうけど。

でも、このテラスは初めてみたな……。こういう、外部からの客を迎えるために用意されてるってことなのか？明らかに逆側にある、王族の居住区や、軍部側とは違っていた。オレやティアスのいる客間のある側でも、ここまで厳重ではない。ただ、この檻のようなテラスを見てしまうと、客間側にあるベランダのフェンスも、天井まで囲っていないにしろ、檻のように見えてきた。

オレ達のいる客間は、ちょうどあの角を渡った向こう側に面している。このホテルそのままの、四角い王宮は、面している側で全く表情が違うのだろう。

そう言えば、初めてシュウジさんの私室に入ったときもベランダがあったことを思い出した。似合わない真っ白いテーブルと椅子が置いてあった。だけど、フェンスは高くなかった。

このテラスにあった調度品は、さすがに来客用なのか、シュウジさんの部屋にあったものより遥かに凝った作りのものだった。でも、やっぱり色は白かった。

ミハマはオレ達が覗いている場所から一番近いテーブルを選び、カリン姫に座るように促した。彼女の横顔が、オレ達に見える席にその両隣にミハマとサワダが座り、カリン姫の向いにはティアスが座った。サワダの背中が、オレ達の真正面にある。

もしかしたら、座り方も、ここに來ることさえも、「いつも通り」ってヤツなのかも。

だって、ここから様子を伺ってくださいと言わんばかりの並び方だ。こんなに近くで、イズミはいつも覗いている……。

背筋が寒くなってきた……。

「え？」

隣にいたイズミは、ミハマ達を見ているのかと思ったら、オレを見ていた。怖すぎる……。

「声、そこにあるイヤホンで聴けるから。黙ってるよ?」

監視部屋にあった個室には5つもヘッドフォンがあったのに、ここにはどこからつながってるのか判らない、小さなイヤホンが一つぶら下がっているだけだった。しかも、イズミが指ささなければ判らないくらい壁に溶け込んでいたというか、暗くて見えないと言うか。

「イズミは……」

「少し聞こえてるし、唇を読むから」

「……ああ、そう」

ますます隠密だよ、それじゃ。怖すぎるよ。どんなスパイだお前は。何かもう、これ以上イズミのこと知りたくないかも。声なんかほとんど聞こえないのに。

イヤホンを渡してくれたのも、オレに静かにしてろと強制するための餌なんだろう。この状況ではそれに従うしかない。彼が文句も言わず、オレをこんな風に自由にしてくれていることですら奇跡的だ。

イヤホンを耳に付けると、ミハマ達の声が聞こえてきた。さっきの部屋に比べると設備が悪いのか鮮明には聞こえなかった。

ミハマとカリン姫は仲がよいように見えた。サワダの話によると彼らは(サワダも含めて)幼馴染みらしいから、当たり前と言えば当たり前だろう。先ほどの謁見の間での様子とは違ってタメ口だし、呼び捨てだし。

こっちの二人がいつも通りなのだとしたら、あの謁見の間での二

人が少しだけ哀れだった。

ミハマは、ティラスとも随分近い距離にいるように見えた。彼女に好意を持っていることは知っていたけれど、オレの前で見せる二人の姿とは違うように見えた。考え過ぎかもしれないけど。

彼はきつと、オレが彼女を好きだと思ってる。明確にそう思ってる。でも、少なくとも気にかけてる、程度には思ってるだろう。

だから……もしかしたら気を使ってるなんて思ってたんだけど。

「ねえミハマ、何で連れ出したの？」

「え？だって、随分疲れてたみたいだから」

ミハマの彼女への気遣いは、いろんな意味にとれた。

彼女はもともと体調も万全ではないし、何よりあんな緊張感あふれるところに連れ込まれて責められるし。責めた人は目の前にいるわけだけど。まあ、あのエライ人たちがたくさんいる場所よりはマシかもしれない。ミハマは、何だか全部判っているみたいだな。

「……うん、まあ。ありがとう」

カリン姫の横顔と同様、ティラスの横顔もよく見えた。儚げに微笑む彼女は、日の光に晒されているのも相まって、本当に綺麗だった。その様子を見て、ミハマも微笑む。端から見ると、二人はまるで美しい恋愛映画の１シーンか何かのようで、嫉妬するよりも見入ってしまった。サワダと彼女が仲良さそうにしているところを見たときは、あんなに苦しかったのに。

「サワダ議員が後見になっておられると聞きましたけど？ティラス殿。名字は……」

二人の間に割り込むように入ってきたカリン姫の目は、完全に敵

を見るものだった。

そう言えば、ティラスって名字で呼ばれてるのを聞いたことがないな。オレの知ってるティラスには、日本での名字を聞いたけど。元々、ベルギーに住む前は横浜に住んでたわけだし。

「魔と戦うものならば、名を知らさぬものがあることはご存じではありませんか？ イイヌマ様。あなたも、戦われるのでしょうか？」

カリン姫はそんなこと一言も言っていないのに、ティラスはそう言った。まるで、彼女がティラスを見透かしたのに対抗するように。

「カリンで結構。それは父の……カントウの家の名ですから」

微妙な緊張感だなあ。さっきの会話もそうだけど、お互いに警戒してるって言うか。警戒してるのが表立っているというか。

「天からくる魔と戦える力を持っているからこそ、サワダ議員は後見として立ってくださいっているのです」

「では、元々はどこであの方とお知り合いに？」

カリン姫がこっちを見た。と思ったら、オレ達に背を向けているサワダの様子を伺っていた。

06

サワダの表情は見えない。しかし、声を聞く限り、彼は突き放しているように思えた。カリン姫を、そしてティラスを。

「さあ。オレに父のことを聞かれても？」

「ああ、そう。相変わらずだな」

本当に『相変わらず』なのだろう。カリン姫のサワダのあしらい方は、慣れたものだった。

「知人が、サワダ議員と知り合いだったので、そこで知り合ったんです。ね？」

カリン姫の思いに気付いているのかいないのか、ティアスはいえ、ミハマに同意を求めた。確かに、彼女とサワダ議員の繋がりはそのようにここでは言われてるし、二人ともそう言っている。だけど、カリン姫が気にしてるのは、何もティアス自身のことだけじゃないはずだ。

彼女は、ミハマに会いにこの国に来ているのだから。

案の定、目配せをする二人に、カリン姫はあからさまに不愉快な顔をして見せた。

「鈍いなあ、ティアちゃん。天然かな？」

隣で同じように様子を伺っていたイズミの呟きに、オレは黙って頷いた。

「わりと、女子に嫌われるタイプかもね、ティアスって」

「ああ、かもね。女友達少なそうだし。良い子なんだけどね。サトウアイリとは違う意味で、女子の反感買いそうだな」

確かに……オレの知ってる佐藤さんも、綺麗だし、男にはいい顔するけど、女から見たらどうかなあって人だったしな。女友達と一緒ににいるの、見たことないし。大概、違う男を連れてた。

ティアスは、そう言う女ではなかったけど。

「テツは何で、ああいうタイプばかり……」

「佐藤さんは綺麗だし、オレも好みの顔だったけど？」

「中身の軸も似てるよ。テツはドMだからな。あんな女が良いんだ」

酷いよな、自分で佐藤さんの名前を出したくせに、不機嫌になった。

「……アイハラって、テツと好みかぶってるよな」

「かぶってない！」

オレの知ってる泉と同じこと言った！最低だ！！なんでサワダと好みがかぶってないといけないんだよ。ティアスも佐藤さんも、普通に考えて可愛い顔の部類だろうが！？

あの二人の中身の軸が似てるって？そうは思えないけど……。

「ティアスも佐藤さんも、サワダの好みなんだな」

「ま、見るからにね。もうちょっとましな女を選べばいいのに」

否定して欲しかったかも。

何か、喋ってるときにカリン姫にこっちを向かされると、聞こえてるんじゃないかって心配になるよな……。話を聞いている限りでは、ミハマの気を引くのに必死みたいだから大丈夫そうだけど。

「いつ頃から一緒に……」

直接的な台詞を吐いてしまいそうになっていたカリン姫が、ちらっとサワダの方を見て、小さく舌打ちをしていた。多分、彼は嫌味な顔をしていたに違いない。

「いつ頃からこちらに滞在を？」

「ちょうど先回の中王の招集の後からです。中央にいたこともあり  
ましたし」

ティアスが先手を打った形だった。何か言われる前に、先に言っ  
てしまおうというところか。ミハマやサワダ達にもそのことは言っ  
てあるだろうし。

サワダ議員が、中王とその臣下であるサカキ將軍と懇意にしてい  
ることは、おそらくミハマ達が知るように、カントウの姫である彼  
女も知っているだろうから。

「カリン。そんな風に質問責めにしなくても……」

「質問責めに行っているわけじゃないよ。ただ、君だって、サワダ議  
員の手の……」

カリン姫はサワダ父の存在を責めながら、再び、サワダの様子を  
伺った。ミハマの視線が、彼女を責めていたからかもしれない。

「……ティアスが父を後見に持ったのは、知人を通してだというの  
は本当だと思う」

そう言ったのはミハマではなく、サワダだった。当然だが、ミハ  
マ以外の誰もが驚いていた。ミハマだけが、笑顔を崩さないまま、  
嬉しそうに彼を見ていた。

「別に、庇ったわけじゃない」

バツが悪そうに言うサワダに、ティアスがにじり寄る。



「でも……」

図らずも彼を見つめるティアスの瞳を、初めて真正面から見ることが出来た。

彼女は、オレが知る彼女と同じ瞳で、彼を見つめていた。

「嬉しいよ」

礼を言うわけではなく、彼女は自身の思いを彼に告げ、他の誰の目を見ることなく、正面をむき直した。その彼女の様子を、一瞬だったけれどミハマが伺った。その程度ですますことが出来るミハマは、一体何を考えているのか。

あれは、ない。本気でへこむ。オレなんか、こちらの様子を伺えるわけもないと判っているのに、サワダを睨んでしまう。

「何がおかしいんだよ？」

隣で同じように様子を伺っていたイズミが、声を殺して笑っていた。その毒のある笑みが、カンに触った。

「別に。ティアちゃん、完全にカリン姫に『敵』として認識されちゃったな、と思って」

「そうか？ だって、カリン姫って、ミハマ狙いだし。ティアスは明らかにサワダのこと……」

「それを気にしてんのはアイハラだろ？ ティアちゃんが誰に色目を使っただろうか、あの方には関係ない。彼女にとっては、ミハマの意志の方が大事だろ？」

「いや、オレは気にしてないし。大体、ミハマもそんな、気にしてるようになんか……」

「充分だよ」

あれだけのことで？

でも、イズミの言う通りかもしれない。疑っていただけのはずの  
カリン姫の敵意が、ティアスに向けられ始めていた。

「カリン姫は、よく見てるよ。いろんなことをね。ミハマに関わる  
ことなら、特に」

「なら、今のこの状況は、お前の思惑通りってヤツ？」  
「そういうこと」

悪びれず、彼は笑う。何だかバカにされた気分だった。

少しだけ、彼がオレをこんなに自由にしてくれてるのか、その理  
由が判った気がする。

彼のたくらみが、オレなんかにはれたところで、大したことがな  
いって思われてるってことなんだ。

だけど、それだけじゃないって思いたい。

07

もう、見ると胃が痛くなってくる。どう考えても、ティアスつ  
てサワダに気があるし、サワダも彼女の前では照れたようにして気  
持ち悪いし、ミハマはティアスを気に入ったって宣言してるし、何  
よりそんなミハマしか見てないカリン姫がそう判断してるし。めん  
どくさいなあ、もう。首突っ込みたくないんだけどな、こういうの。  
判ってるんだけど、……だけど、オレは既にそう言うわけにも行  
かない状態なんだよなあ……。

こっちのティアスは、明らかにオレの知ってる彼女とは違うつて、  
判ってるのに。オレは彼女の怖い部分も知ってるのに。この世界に  
生きるのにふさわしい女だって判ってるのに。オレは早く戻らない

と行けないのに。

戻りたいはずなのに。

「そんなに力入れてんなよ」

イズミが苦笑いを見せた。毒を含んだ表情のまま。彼にそんなことを言わせてしまうほど、オレはまずい顔をしてたってことか？

「別に？」

「オレは、ミハマの手伝いしかしないけどね」

「別に手伝ってくれとも思わないし」

「邪魔するなら、排除するってことさ。それ以外は、ミハマの言うとおりにするけど」

……ミハマが欲しがってるモノを横取りしようとするヤツは、排除するってこと？ だけど、ミハマがオレを拾ったから、ミハマがサワダを大事にしてるから、ミハマの言うとおりにそれなりの扱いをするってこと？

『誤解の無いように言っとくけど、オレ、テツのことは敵だと思ってるから』

あれだけ気を使ってるサワダのことを、コイツは「敵だ」と言った。なら、それ以上に酷い扱いを受けてるオレは？

「……アイハラ、ここを動くなよ。騒ぎがある程度収まったら、元来た道に戻って部屋に戻れ」

「え？ 何だよ、急に……」

イズミは、いなくなっていた。こんな狭い通路なのに、いつの間

にいなくなつたのか判らないくらい突然。

それに今確かに「騒ぎが」って言った。どこで騒ぎなんか……。

「殿下！」

テラスに駆け込んできた伝令の声に、オレは食い入るように外の様子を伺った。

「……こっちに来る。殿下！」

普段持ち歩いている大剣の代わりに、腰に下げていた小剣を抜き、いち早くミハマの横に立ったのは、もちろんサワダだった。でも、来るって一体何が？！

「空から、魔物が！」

伝令がそう言ったとほぼ同時に、一つ目の黒いプテラノドンのような魔物が、羽を広げテラスへと向かってきた。

「……何で?!」

ティアスが何に対して疑問を抱いたのかは判らなかった。けれど彼女は魔物が仰ぎ起こす風を受けながら、立ち上がり、空を、魔物を、睨み付けていた。

「姫様！ご無事ですか！」

「無事だ。それより槍を」

黒プテラノドンがもう一体空から現れたのとほぼ同時に、カントウの従者が1mくらいありそうな槍を2本持って、テラスに現れた。

どうやら片方はカリン姫のものらしく、彼女に一つ手渡すと、二人揃って魔物に槍を構えた。

ティアスは……未だテーブルの横で立ちつくし、空と魔物を睨んでいた。

「ティアス！」

半ばサワダに引っ張られるようにして廊下に連れ込まれていたミハマが、動かない彼女を案じ、叫んだ。その声にティアスは身動き一つしなかったのに、カリン姫が彼女を睨み付けていた。

「……何やってんだ、あの女は」

舌打ちするサワダに、ミハマがすぐるように訴える。

「オレも……剣を」

「ダメだ。……ダメだ」

何故だか、ミハマを説得しようとするサワダは、彼の目を見れずに、ただただ否定をしていた。

「近すぎる。それより、オレの剣を……」

「テツちゃん、剣を持ってきた！」

初めて会ったときに彼が持っていた大剣を、イズミが手渡す。いつの間にかいなくなったと思ったら、サワダの剣を取りに行っていたんだ。

今度は二人してミハマを引っ込めようと、両脇を二人で抱えて廊下に投げ込む。

「オレ、行けるって。テツは引っ込んでろって、ティアス連れて。シン！オレの言いたいこと判ってるだろ？！」

港に魔物が来たときの、あの冷静なミハマは見る影もなかった。何が違う？あの時と？

「……カリン姫、下がっていた方がいいですよ？」

空を睨み続けていたティアスは、魔物に注目したまま、彼女に忠告した。それが、カリン姫の機嫌を損ねたのは、火を見るより明らかだった。

「ティアス殿。あなたこそケガをなさってるのでは？」

ケガ？そうだ。あの時と違うのは、ケガだ。ティアスもサワダもケガをしてる。だからミハマはあんなに心配して。それをイズミもサワダも、彼に戦わせないようにしているだけなんだ。

「シン、お前援護しろ。オレがあの子を引っ張ってくる。ついでにカリンも。『広がる前に』かたを付ける！」

広がるって？被害がってこと？それより、オレはどうしたら良いんだ？イズミの言うとおりここにいて良いのか？

「いや、姫はほつといて良いんじゃないか……？邪魔したら怒りそうだし」

外に出ようと暴れるミハマを抱えて押さえながら、イズミは嫌そうな顔でカリン姫のいる方を見ていた。彼女の護衛が頑張っているものだとばかり思っていたが、彼はむしろ姫の背後から援護をして

いて、姫が槍を片手に、空飛ぶ魔物に善戦しているように見えた。立ちつくすティアスの横を、掠めるように飛び回りながら。カリン姫は異常なほど彼女を気にしているのに、ティアスは相変わらず、彼女の存在など無視していた。

「それより、テツちゃんこそ！」

イズミはサワダの肩を掴み、ミハマの後ろへ突き飛ばしたあと、再びミハマも突き飛ばし、ガラスの扉を閉めた。

「シン！バカ！」

「良いから、オレが行くからさ。テツちゃんが援護にまわりなよ？」

そう言ったイズミの笑顔が、妙に怖かった。何か、オレに見せたあの企んだ笑顔と一緒のような……。

「シン？」

多分、それにミハマも気付いたんだと思う。怪訝そうな顔で彼を見ていた。

08

イズミがテラスに出て魔物を睨み付ける。そのまま行動に移すのかと思ったら、彼もまた様子を伺うように、距離をとりながら歩くばかりだった。ティアスがちらつと彼の様子を伺ったが、構わず、魔物を見ていた。

それに不快感を表したのはもちろん、カリン姫だった。その不快感を煽るように、彼女の部下が進言する。

「姫様。お下がりください。ここはこのイヅチがおさめますので……」

「ふざけたことを！あいつらは当てにならん！お前だけで何とかするとても？！」

「しかし、姫をお守りするのが……」

「そんなことを言っている状況ではない！どうしてこの国の軍が来ないと思っている？！お前はよく判っているだろう」

「しかし！」

カリン姫の言うとおりだ。どうして他に誰も来ないんだ？ここには仮にも王子がいる。来賓であるカリン姫もいる。なのに。

「シン。あなたは、広がる前には叩かないの？」

イズミに問いながら、ティアスが動いた。ゆっくりと魔物から目を逸らさぬよう、空を見ながらオレが潜む壁際に近付いてきた。オレがいることを懸念してかどうか知らないが、イズミが少しだけ嫌な顔をした。

「つか、この状況で、カリン姫の前でそんな言い方……仲が良いのか悪いのか判らないけど、距離は近いんだよなあ。イズミのヤツ、ずるいよな。ちゃっかりしてるというか。」

「ティアちゃんこそ。さっさとこのヤツ叩かないと、被害が広がるし？」

「特殊部隊がいるでしょ？」

「役に立たないよ。だから早く始末したいんだよね」

被害が広がるって……。ここ以外にも出てるってことか？オレ、ここにも良いのか？大丈夫か？



「口ばかりね」

オレの視界を塞ぐように、ティアスはオレの目の前の壁にもたれた。

「いつまでいるつもり？」

彼女は軽く壁を蹴って、囁いた。もしかして、オレに向かって？  
だけど、彼女の視線は空を支配する魔物に注がれたまま。首を傾けていた。

「……う……動くなって、言われて」

なんて答えて良いか判らず、思わずイズミのせいにした。真実ではあるけれど。聞こえているかどうかとも判らないけれど。

「そう」

ティアスがイズミの方を見たらしく、彼がちらっとこちら側を見た。

「このお！」

カリン姫の叫び声に、オレは一瞬目を奪われた。その様子をイズミやティアスが見ていたかは判らなかったけれど。壁越しの、ティアスの背中越しに姫を確認する。

彼女の掴んでいた長槍が、鈍く光を放ったまま、黒プテラノドンのたった一つの目玉に向かって飛んでいき、見事に命中した。

お姫様だなんて言うから心配してたけど、カリン姫もかなりの手

練れた。

「……広がる」

ティアスの言葉を受け、イズミが、そして廊下に追い出されていたサワダが動き出す。

ただし、サワダはミハマに止められていたけれど。

カリン姫の槍をきっかけに、刺さった目玉から黒い霧が吹き出す。その霧は瞬く間に黒い雲になって空を覆い尽くす。

広がるって、こういうことか。以前、オレとミナミさんを襲った、空から来た魔物は、既に「広がった」後だったんだ。

だけど、カリン姫達は「広がる前にかたを付ける」って言ってた。てことは、この状態って、ホントはやばいんじゃないのか？何でティアスもイズミも、動かなかった？ティアスだって、イズミにそうしないのか聞いてたし。

「シン、動かないの？」

「残念ながら。王子様に危害が及ばない限りは。ティアちゃんこそ」

彼女はゆっくり壁から離れ、黒い雲に向かって歩く。だけどイズミは動かない。

「もう、広がっちゃったよ？」

「……」

「戦う義理はない、だなんて言えないよね。あんなご大層なこと言ってるんだから」

「どういう意味？そんなことを言うつもりは……」

「さつき、カリン姫にもそう紹介されていたじゃない？サワダ議員にさ。だからあの人は後見についてるって、『国が北に近いから、脅威にさらされていた』なんてね」

彼女がここにいるとしている、おそらく建前の理由を彼は今、出してきた。

「昨夜……抜け出たくらいなものね」

「戦うよ?」

オレを助けてくれたときに持っていたジャックナイフを手に持っていた。おそらくどこか、服の中にも隠していたのだろう。

「そんな武器じゃなくて」

彼女の横に、人の悪い笑みを浮かべながら立つ。よく見たら、イズミは腰に下げられるほど小さなボウガン（改造?）以外、武器らしいものを携帯してない。以前、港で戦ったとき、イズミは何を持ってた? 隠し持てるような武器だったか? サワダに武器を持ってきたくせに、自分は戦う気はないのか? 無いくせに、サワダを後ろに追いやって?

「どっちが良いかな。君の手駒を使うか、君自身の武器を見せてくれるか」

轟音と共に、テラスを囲んでいた檻が吹っ飛んだ。檻を構成していた鉄柵が、テラスに降り注ぎ、そこに立つ人々の脇を掠める。そして、オレが隠れるこの壁にも突き刺さった。当たらなかったから良かったものの、あまりに突然の出来事で、動くことすら出来なかった。腰が抜けた……。ここにいるのはやっぱり危険な気がする。イズミのヤツ……。

そう言えば、あの魔物はどうやって入ってきたんだ? 雲になった後ならいざ知らず、あのプテラノドン様の形態の時に檻を壊さずに

入ってくるなんて真似、出来ないはずだ。

「カリンが！それに、ティアスも。テツ！オレが……」

鉄柵がカリン姫と彼女の臣下にも降り注いでいた。臣下の足を掠めたらしく、カリン姫が彼を担ぎ、移動していた。

「良いからお前は引ッ込んでろ！オレが行くから……ユノ、コイツ押さえてろ！」

いつの間にか謁見の間から廊下まで来ていたイツキ中尉に、サワダはそう頼むと、剣を構え、飛び出す。

「シンってば……。殿下、ご存じでした？」

ティアスを（そしておそらくはサワダをも）釣るための行為であることを、イツキさんは白々しくミハマに問うた。彼を押さえながら。

「いや。でも、何か考えがあるんだろ？……あ、いや違うな」

「違う？」

彼女の疑問に、彼は笑顔で答えた。

「面倒くさくなっただんじゃない？ユノと一緒に」

「一緒にしないでください。人には時期を見ろって言うくせに、自分が真ッ先に飛び出るような人たちと」

隠れていて良かったと、このとき心底思った。今、オレは本気でへこんだ顔をしてる。この人達、確信してるんじゃないのか？ティ

アスの正体を。必死に隠してたオレが、これじゃバカみたいじゃないか。

オレの知らないところで、一体何が起きてたんだよ。

大体、何でイズミはあんな行動に出た？サワダの前では、彼が彼女に手を出すなんて『あり得ない』と言うくせに、充分すぎるくらい疑ってたわけだし。ミハマに気を使ってるように見えたくせに、ミハマの前でティアスに決断を迫って見せたり。そしてサワダにも武器を持ってきたくせに、あえて引込ませて自分は何もしなかったり。

何となく、イズミの目的も、極端故の行動であることも判るけど。判るけど、いつの間にこんなコトに？オレはなんでこんな、蚊帳の外で見てるだけだ？関係ないことに振り回されないといけないんだ？

「まあ、大丈夫だとは思うけど……大丈夫かな？無茶しそうだけど」  
「殿下が大切だとおっしゃるなら、大丈夫だって、殿下がおっしゃったんですよ？」

唇をとがらせ、意地悪く言うイツキ中尉に、彼は再び笑顔を見せた。

「だから、おとなしく見ててください」

ミハマが窘められたよ……。ある意味、護衛部隊最強はこの人かもしれない。言われたミハマは苦笑いしながら正座をしていた。

「……テツちゃん。出て来ちゃったね」

イズミは振り返ることなく、彼の後方から歩んでくるサワダに声をかけた。サワダは不愉快きわまりない顔をしていたけど。

暗雲が人の形を成して、カリン姫、ティアスとイズミ、テラスに

現れたサワダを囲む。カリン姫に向かっていった、コールタールの塊のような人型に向かって、サワダが手に持っていた小さなナイフを投げた。ナイフの当たった箇所からゆっくりと溶け始め、動けなくなってしまった。

「何してる。お前がさっさと潰さないからだろうが。もう広がった。2体とも広がったら面倒だろうが」

もしかして、イズミ達は「広がる」のを待ってたってことか？サワダも含め。カリン姫達とは戦い方が違うってことか？今のサワダのナイフと言い、コイツらにはなにか方法があるのかも。

「カリン姫に対抗策は？」

ティアスの言葉は、サワダに向けられたものらしい。イズミは嫌味な笑顔のまま黙っていたし、答えたのは彼の後ろから歩み寄ってくるサワダだった。

「オレが知る限り『広がった後』ではないはずだ。シンは？どう思う？」

「オレの知る限りでも、残念ながら。さっきも『広がる前』に何とか片づけようとしてたしね。人間のことは判っても、魔物のことはよく判らないみたいだしね」

その言葉が聞こえてないか思わず不安になって、カリン姫が逃げた方を確認したが、案の定、聞こえていたみたいだ。不愉快になって当たり前だけど、どうしようもできないといった感じだった。その思いが、オレには痛いほどよく判る。腰抜かしながら考えることじゃないけど。

「オレは、ティアちゃんが動くのを見たいんだよ。だって、テツちゃんしか見てないんだろ？彼女が戦うところ。テツちゃんは、何か最近はぐらかしたような言い方をするし」

本気で、イズミって言う男がわかんねえ。確かにあいつはサワダのことを「敵」だと言ったけど。だけど、なんでこんな、子供が駄々こねてるような印象すら受けるのか。

「カリン！大丈夫？」

カリン姫は、何とかミハマ達がいる場所までイツチさんを連れてきていた。ミハマの心配に一瞬、彼女は喜びの笑みを見せた。けれど、唇をぎゅっと結び、空を、そしてイズミ達を睨んだ。

「……私は平気だ。それより、イツチを頼む。私は戻る！」

「カリン！」

ミハマの制止も聞かず、彼女は再びテラスに戻るために立ち上がった。

「戻ってきちゃうね、カリン姫。サワダ議員を後見につけてる君がこの場にいながら、彼女に何かあったら、立つ瀬がないよね」

「それは……あなた達も一緒だと思うけど」

「オレはそう言うの、どうでも良いや。言っただろう？うちの王子様に危害が加わらなければ、どうでも良いんだ。今は、はっきりさせることの方が大事だし。ねえ、テツちゃん？」

サワダはどういうつもりだったのか判らないけれど、ティアスを見ることも、イズミを見ることもなく、目も伏せていた。

「別に、戦うよ。そのためにいるし。そうしてきたし」  
「だから、そんな武器じゃなくてさ。それとも、隠れてる君の手駒に出てきてもらう？」

わざとらしく、ティアスを指さし、その手を屋上に向かってゆっくりと持ち上げた。

09

イズミがわざとらしく指したその先に誰がいるかは、オレには大体予想がついた。多分、イズミもサワダもその存在を知っていて、ああいう態度なのだろう。ティアスはその指の先を見なかった。

「そんな小さなナイフなんかで戦ってるから、ケガしちゃうんでしょ？君の部下が心配してるよ？」

どっちだ？ニイジマか？セリ少佐か？どっちが姿を見られてるんだ？いや、もしかしたら、ホントは誰もその場にはいないけど、港で見かけたセリ少佐の姿から察して、カマかけてんのか？彼が「楽師寄り」の人物だって、この連中ならよく知ってる。特に、楽師と交流のあるサワダやミハマなら。それをイズミが聞いてっただって考えられる。

何でオレ、こんな時に見てるだけしかできないんだ。ティアスが困ってるのに。

こうしてる間にも、昨日の魔物がティアス達のまわりに迫ってるのに。

「カリン！戻ってる！」

駆け寄ってきたカリン姫を、サワダが制した。再び、彼女を黒い



人型の魔物が襲おうとしていたが、やはりサワダの投げたナイフによって溶けていった。それが、彼女には気に入らないようだった。

「五月蠅い！私も戦う！」

「相手見てから言えよ。引っ込んでろ！分析出来てんのか？！」

サワダ……それ、どう考えても逆効果。何でわざわざカリン姫の気を逆撫でるような言い方しかできないかな。帰らせるなら、もつと他に言い方があるだろうが。邪魔なら「邪魔」としか言えないのか……。気を使ってくれてるのは判るんだけど、口が悪すぎるよ。仲が悪いのもあるかもしれないけど。

「……カリン姫、本当に下がっていた方が……。ヤツら、あなたに狙いを定めたから」

「え？」

ティアスの言葉に、その場にいた全員が疑問を投げた。まるで魔物の考えが判ったかのような彼女の発言にはオレも疑問を持ったけど。

そして、その言葉を証明するかのように一体、また一体と、増えていく人型の魔物が、次々とカリン姫のまわりに集まり始める。

もしかしてコイツら、対抗力のないものを判別して襲ってるってことか？だから昨日も、オレは狙われたってこと？

「……なんで？！」

姫は槍を振り回し、魔物を蹴散らしていくが、べしやつと音を立てて床に散らばった魔物は、そこからさらに増えるばかりだった。サワダが近付きながらナイフで一体ずつ倒していくが、埒があかない。彼は手に持っていた大剣を構え、振り回し、敵を蹴散らしてい

く。

けれど、空を覆う暗雲は、徐々に濃さを増していく。

「本当に戦う気がないのね」

「だって、オレの役目はミハマを守ることだし。その役目の一貫として……」

腰に下げていた、片手で持てるくらい小さなボウガンを掴み、彼女に向けた。その先端からは刃が現れた。その刃を、ティアスの喉元に近付ける。それでも彼女は、イズミを見ずに、空を見ていた。イズミのヤツ、何つーことを……。ティアスに当たったらどうする？ちくしょう、どうしたら良いんだ。ここから戻ってたら間に合わないし……。

さつき、暗雲が飛ばした鉄柵は、驚くほど綺麗に目の前の透明な壁を貫いていた。けれど、所詮監視用のガラスが壁のように見えているだけのものだ、そこからひびが入っていた。これを割った方が早いかも……。オレは鉄柵を掴み、体重をかけて穴を広げようと動いた。

「外敵になりそうなものには、警戒しないと」

「シン！」

叫んだのはサワダだった。ミハマも飛び出してくるかと思ったけど、出てこなかった。何でだ？ティアスのこと、心配じゃないのか？

「……シン、こんなの……」

ティアスがイズミに何か言いかけていた。だけど、その間に割って入ったのは、どこから現れたニイジマだった。さすがに制服を着てはいなかったけど。背中に一本大鎌を担ぎ、自身も一本手に持

つて、イズミの手からボウガンをはじき飛ばした。

いや、偉いけど、なに考えてんだ？！

「……茶番だわ」

「オレが相手になろうじゃないの？」

ティアスの前に立ち、イズミに向かって鎌を向け、すごんで見せていた。ティアスを守るモノが現れたことに、オレは胸をなで下ろしていたけれど、肝心な彼女は頭を抱えて溜息をついていた。

「バカ」

呟くティアスの態度に、イズミもまた、鎌を向けられてるくせに苦笑いをしていた。

「……ニイジマ中尉！？」

いつの間にかカリン姫の周りにいた魔物を蹴散らしたらしく、彼女を廊下の方へ逃がしたサワダが彼らに近寄ってきていた。

「あんたが出てきてどうすんのよ！意味のない！！」

助けに来たはずのニイジマを、ティアスは後ろからケンカキック。意味が判らない。てか、乱暴だよ……ティアス……。

オレの落胆と共に、体重をかけていた鉄柵が不意に軽くなったかと思うと、壁が壊れた。だけど、誰も壁から出てきたオレのことを気にしてはいなかった。

「だって……この状況は出てこないとまずいだろ？いくらなんでもこの人、本気だったし！魔物だって迫ってきてるし！っーか、こん

な状況で何やってんだよ！もつと自分の身の安全を考えろ！」

「大丈夫よ、これくらい！それに、シンは本気だったけど、手を出すわけないのよ。ホントに手を出すなら、ミハマが出て、止めに来るわよ」

「そんなこと言われたって、判るかよ、もう……」

ティアスって、もしかしてあんな目に遭ってたのに、イズミが自分を刺すわけないって思ってたのか？それも、イズミではなく、ミハマが出てこなかったからって言うだけの理由で？しかも、こんな魔物に囲まれた状況で？

「……そっか。そうだよな……」

「何？テツちゃん、心配した？」

大きく息を吐き、イズミの横に立ったサワダに、イズミはいつもの嫌味な笑顔で彼をつついた。その二人を、黒い魔物が少し離れて様子を伺うようにして囲んでいた。カリン姫に対する態度とは随分違う。

やっぱり、コイツらは人を見て判断してる。ティアスが空を睨んでいても、あまり襲われなかったことも、そう言う意味なのか？そう言えば、コイツらは何でテラスより中には入ってこないんだ？こっちにはそれこそ戦闘力のないオレもいるし、未知数のミハマやイツキさんがいるのに。もしかして何かしてあるのかな、この王宮に。

「何を！？誰を？！」

顔を真っ赤にして噛みつくサワダを、イズミは笑い飛ばす。

「別に？それより、正体もはつきりしたんで……」

いつの間にか、月のない夜と間違うくらい、空は真っ黒だった。未だ夕方だし、今は白夜の季節だからそんなことあるわけないのに。

「被害の広がらないうちに、叩かないとね？」

ボウガンを構えながら、ちらつとニイジマの方を伺った。彼が自分のミスを悔いているのを見るために。

「さつさと戻りなさい。カントウの姫君もいるのよ!？」

「……でも、あんたはケガしてるし……オレが怒られる」

いや、今も充分怒られてるし。情けないぞニイジマ！

へこんでいるニイジマの背中から、鎌を受け取ろうとしたティアスを、止めるものがいた。

「……ちよつと！サワダ中佐!？」

サワダは剣をその場に置いて、彼女を抱きかかえ、鎌をニイジマに突き返した。もちろん、彼女は暴れていたけどお構いなしだ。

「シン、あと頼むぞ。2匹くらい、何とかなるよな」

「……ありや。テツちゃん、もしかしてめっちゃ怒ってる？」

怒ってると思うな。あの様子だと、サワダはイズミがティアスを刺すもんだと思ってたっぽいし。大体、既に顔が不機嫌だし。

「怒ってる。それにこっちは怪我人だし。そこの忠犬と一緒に何かしろよ?」

「えー。この人は帰っちゃうでしょ。飼い主に怒られてるし。元氣

そうじゃない？その子、置いてってよ」

イズミはそう言ってティアスを指さすが、サワダに一瞥され、苦笑いを浮かべた。

「……サワダ中佐、その……」

ティアスを抱えて歩き出したサワダに、言葉を詰まらせるニイジマ。

「コイツには戦わせないから」

その言葉をどう受け取ったのか、ニイジマは消えていた。

10

「ちよつと……離して……」

か弱い声で逆らうティアスを抱え、サワダが連れてきたのは、オレの空けた壁の穴だった。穴を空けたは良いものの、結局危険すぎてテラスにも出られず、ミハマ達がいる廊下側にも行けず、どうしようもなく立ちすくんでいたところだった。

「アイハラ、コイツをここから出すなよ？」

そう言つて、彼は彼女を静かに床におろし、オレ達を囲む透明な壁を指さした。

「お前も、動くなよ？オレはシンのフォローに行くから。出てこら

れたら守れる保証はないし。さつきは全員でにらみを利かせてたから、カリンのまわりもあの程度ですんだけど」

何か、かつこよくて妙にむかつくんですけど。ティアスも立ち上がり、何だか女の子の顔してサワダのこと見てる。オレの後ろに座り込んでたくせに。

「でも、ここも危ないんじゃない？……？」

「大丈夫だ。この建物の中には入って来れない程度のヤツだから。大丈夫だったろ？」

確かに鉄柵は予想外だったけど、魔物自体はオレに気づきもしなかった。もしかして、イズミもオレが下手に外に出ないように「ここから動くな」なんて言ってくれたのか？

「サワダ中佐……」

ティアスの制止も聞かず、サワダは即座にイズミの側に走っていった。もしかして、こっちの方が近かったからなのか？彼女をここに連れてきたのって。

「あれ、テツちゃん。オレに任せてくれるんじゃないの？」

「忠犬が帰ったからな。仕方なく手伝ってやるよ。ただし、オレは怪我人だかな。フォローしかしねえ」

偉そうなサワダの物言いに、イズミは何故か嬉しそうに笑う。

二人しかいないテラスに、あの人型を成していたコールター様の物体が、雨のように降り注いだ。刃のように固い黒い物体はイズミ達の体を掠めるようにして彼らの皮膚を削る。床にぶつかる液体のように飛び散って、再び集まり人型を成し、警戒しながら二人

に近付いてきた。

「……私も、出なくちゃ」

「ティアス！武器もないのに。そんな小さなナイフで？数多いだろ、昨日より」

ニイジマが持ってきたあの大鎌が「死神」とも称される「中王の楽師」の本来の武器なのだろう。イズミはあの武器を見たがっていたのだ。彼女の正体を確信出来るものを。

だから、昨日は余計に戦いにくくて、またケガをさせてしまったのかもしれない。どんな状態か、オレには判らないけれど。イツキ中尉や、ミハマ達の話聞く限り。  
オレだけが、何も判らない。

「でも、サワダ中佐もケガしてるし。正体ばれたんなら……」  
「ばれたって、サワダはここから出すなって言ってたから、戦うな  
ってことだろ？」

そう言ったら、やっとティアスは溜息をつきながら、壁にもたれ、思いとどまってくれた。ずるずると音を立て、そのまま滑り落ちるように、壁際に座り込んだ。ホントは、疲れてたはずなんだ。

「……姫」

「うつわ！何、突然？！」

音も立てず、気配も感じさせず、ティアスの前に跪いていたのは、全身黒づくめのセリ少佐だった。驚き、倒れ込んだオレなどいないかのように、彼は真っ直ぐに彼女だけを見ていた。

「戻りなさい」



「姫、さっきのトージの行動……オレは……」

「判ってるから。でも、ああでもない、あいつは引つ込まないでしょ？責められるのは私だけで良い」

そう吐き捨てると、大きく溜息をついて、小さく縮こまるように自分の膝に顔を埋めた。

「姫は、イズミ中佐が本気ではなかったとおっしゃっていましたが、あなたこそ、本気でそうだと？」

「ええ。あの状況で、私を斬るわけがないのよ。ミハマが見てるんだから」

それを理由にしてるって言うのが、判らないよ。確かに、あいつはちよつと異常なくらい、ミハマと、護衛部隊と、それ以外、つて言う線の引き方をしているところはあるけれど。だけど、その極端さは納得は出来ない。

「だったら、そうだと言ってくだされば」

この人も！？セリ少佐も、ちよつとおかしくない？ティアスがそう言ったら、そうだってこと？納得できるのか？

「伝える時間なんて、無かったでしょう、今まで……」

彼女もまた、彼の台詞を当たり前のように受け取るが、少し困った顔もしていた。

ニイジマがオレに、彼女とのつなぎを頼みに来たくらいだ。一時、何のために？とニイジマを疑っていたけれど、なんだかんだ言っただけはコンセンサスをとれていなかったわけだ。そう思うと、彼女がセリ少佐の言葉に頭を抱える理由も判るかも。優秀な人かも

しれないけど、ちょっとずれてんのかな。

「しかし姫、あの方とはきちんと話されているのですか？時期が早すぎる」

彼は外をちらつと確認した。つられてオレも外を見ると、空は暗いままだったが、未だ雲になっていない方のプテラノドンがいなくなっていた。

「ユウト」

突然、彼女がオレに手を伸ばしてきた。壁を向きつつ、座り込んだままのオレの腕に、そつと触れた。

「ユウトは、私のこと、判ってくれるよね？だって、優しくしてくれたから」

やばい。彼女との距離はこんなに離れてるのに、微かに触れただけの部分が酷く熱い。その熱が、オレから思考能力を奪っていく。オレは、何も判らない、何も知らないはずなのに、何を判ってあげられる？これから判ってあげられる？

「……オレ、何か出来るかな？」

「どうして？ユウトは優しいじゃない。一緒にいると安心するわ」

彼女のその妖艶な微笑みに、思わず手を伸ばしてしまいそうになったけれど、セリ少佐に睨まれてしまったので引つ込めた。

「ユウトは、私の味方でいてくれるよね」  
「もちろん」

「良かった、そう言ってくれると思った。嬉しいよ」

笑顔から一転、彼女はセリ少佐に上司の顔を見せる。

「時期の話は、後で私からあの人にするから。あの人が、決して味方ではないってことくらい、判っていたことなのに」

「先手を打たれた形ですかね」

「悔しいけど、そう言うことになるわ。でも、あの程度の魔物ならケガをしてもサワダ中佐の敵じゃない」

外を見るティアスと、外を、セリ少佐は交互に見た。その視線に気付いたティアスが、再び彼に困ったような、照れたような顔を見せた。

「イズミ中佐も中央では表には出てこないけど、相当な使い手だから。彼も、この国の守護の一翼を担っているわけだし」

言い訳のような台詞に、彼女の手を取り、問いつめてやりたくな

## 第5話 【続・穴二つ】

01

セリ少佐は、ティアスの言葉をどう受け取ったのか、再び外を見つめていた。

「なんで、彼ほどの人が表に出てこないんでしょうね？この間、港に出てきたヤツの時も彼の動きはめざましかった。欲を出してもいい気がしますけど」

「……サワダ中佐のように、ってこと？」

どうやら彼が高く評価しているのは、サワダではなくイズミのようだ。そう言えば、港であの二人が人間離れした戦いを見せていたときも、セリ少佐は見ていたんだっとな。

「そうですね。逆に、サワダ中佐は目立つのを嫌がるタイプに見えましたけど。立场上仕方なく、と言った風に見えます」

「でしょうね」

「逆に、イズミ中佐は上層部からの自身の扱いに対して、不満を持っているように見えましたけれど」

「それは間違っていないかもね。だけど、表に出てくる必要がないってことを、彼は何より理解してる。だから、今の状態に彼は自ら収まっている」

彼と彼女の言葉を受けたからかもしれない。それに、サワダがケガをしているからかもしれない。だけど、港での戦いの時より、イズミの強さを感じることが出来た。

カリン姫が捌ききれなかっただけの数より多い、液体のような、人型のような、不定形故のスピードの速さの魔物達を、改造した小

型のボウガンで次々に片づけていく。

「武器の改造も、彼が行っているのですか？」

「ほとんどね。ただ、スズオカ准将の力も大きいみたいよ？」

「ああ。あの……。でもあれ、見つかったらまずいですよね？」

よく見ると、イズミの持つボウガンは、ただ「ボウガン」の形をしている拳銃のようでもあった。この世界で歴史の研究が禁止されてるのは知ってたけど、もしかして武器も制限されてるのか？

『本当の理由は？』

『抑制のため』

なんでセリ少佐は「まずい」って言ったのか。この人達は、監査に来る立場のはずなのに。

中王の目的を、吐き捨てる彼女は。

『ユウトは、私の味方でいてくれるよね』

彼女は一体、何を考えてる？オレはどうしたら？

『ごめんね。多分、振り回されていると思うけど』

それに、ミハマ……は……？

今、オレ、結構とんでもない会話を聞いていて、とんでもない立場に立たされてる気がする。

オレも振り回されてるけど、でも、ミハマも振り回されてないか？オレはこんなに話を聞いてるけど、あいつは知らないんじゃないのか？

それに、ミハマが信用してるイズミやサワダだって……。仮に、

あいつらが本当にそう言うように、ミハマのために全て行っていたとしても、それが全て彼のためになるとは限らないんじゃないか？

「……ユウト、心配しないで。大丈夫よ？」

「え？」

「あなたを世話してくれてる、ミハマに恩を感じているんでしょう？だから、彼が心配なんじゃない？」

また彼女は座り込んだまま、オレの腕に触れた。

「……うん。でも」

「大丈夫よ、悪いようにはしないわ」

なんか、引かかる言い方だけど。大丈夫なのかな。でも、彼女の味方でいるって、オレは言った。

「白か黒かなんて、はっきり割り切れるものじゃないでしょ？」

「うん」

「だから、みんなたった一つ、拠り所を求めているの。それが、例えば神様だったり、お金だったり、他の人だったり、自分だったりね」

「……拠り所？」

「そう。例えば、サワダ中佐やシンの拠り所は、ミハマよね。私にもそう言う存在はあるし、そこにいるコウタにも、拠り所はある」「ティアスじゃなくて？」

その問いに、彼女は黙っているだけだった。

「でも、姫も今は、オレの拠り所ですけどね」「そう？」

彼の台詞が気遣いなのか本音なのか、オレには判らなかつたけれど。ティアスは少しだけ嬉しそうにしていた。

「コウタ、良いから」

「え？でも？」

僅かに体を動かしたセリ少佐を、ティアスが制した。彼の疑問の言葉とほぼ同時に、中にサワダが入ってきた。オレ達と距離を保ち、入口近くに立ったまま、こちらを見ていた。

「……セリ少佐」

「この方を責めるおつもりですか？」

この人、直球だな……。突然そんなこと言われたら、戸惑うか、反射的に怒るか。サワダはどっちだ？

「……責めるしかないだろう。ただ、判断はオレがするわけじゃない」

サワダはサワダで、直球で攻撃してきたセリ少佐を無視して、ティアスを見ていた。

「コウタ。この人、判つてたのよ？」

「え？」

思わず、声を漏らしてしまった。だけど、誰もオレの方を向くことはなかった。だって、ティアスは今、サワダが彼女のことを知ってるって、そう言ったんだぞ？それって気付いてたってことなのか？それとも……

「だけど、確実な証拠があるわけではなかった。そうでしょう?」

サワダは、彼女の言葉に頷きもせず、ただ彼女を見つめていた。

「……シンのことは……」

「シンはシンで、あなたが疑う以上のことを言わなかったから、痺れを切らした。そうじゃないの?」

「それは……拡大解釈以外の何者でもない。オレは、そんなつもりじゃないし、そんな綺麗なことを言っつもりもない」

彼女から目を逸らし、吐き捨てるように言った彼を、彼女は真っ直ぐに見つめる。

なんだよ、これ。ティアスのこの態度。なんなんだよ。

「もうすぐ、ミハマ達が来る。どうせお前はカリンにも疑われてた。ただ、何者かはつきりしただけだ」

「……はつきり?」

彼女の苦笑いに、サワダは溜息をつく。彼が、空いた壁の入口から、こちらへ近付いてくることはなかったけど。

「はつきりしてる。お前が、あの中央の楽師だってことは」

「名前も、顔もない女の、何がはつきりしたというの?」

「ここに、お前という存在がいれば充分だ。名前なんかあろうと無かるうと。顔すら必要ないかもな、ミハマにとってみたら」

いや、顔は……見えてるし。なんかもう、サワダはミハマのことばかり言っでて気持ちが悪いな。依存しすぎだっつーの。

「ミハマも、最初から気付いてた?あなたが気付いていたところから」



「いや……しばらくしてからだと思う。多分」

「なんで、私だって思ったの、あなただけは最初から。私は楽師としては、あなたの前では戦ったことはなかったのに」

彼女がここに来たとき。魔物に襲われ、サワダが彼女を助けたとき。彼は彼女のことを「戦える」からこそ「疑わしい」と言っていた。けれど、それが直接楽師へつながっていたわけではないってことか？

「……何となく。だけど、カリンはお前の動きで疑っていた。『誰かに似てる』って。ミハマも……」

「他の人のことは聞いてないよ」

サワダはただ、黙ってこちらを見ていた。

02

「君の言葉を聞きたい」

座り込んだまま、彼女は真っ直ぐ彼を見つめた。その緊張感が、オレを潰す。

やっぱり、何もなかったって言われても、彼のことをどうとも思っていないと言われても、それは信じられなかった。オレに触れたはずの彼女は、どうしてこんなに真っ直ぐ彼を見つめるのか。

「姫。オレはこれで。あなたも人が悪い……」  
「そうね」

今度は、ティアスも彼が立ち去るのを止めなかった。彼が音もなく消えたと同時に、ミハマとイズミが、サワダの後ろから現れた。それにしたって、「人が悪い」って。セリ少佐には似合わない言葉だな。

「テツちゃん、こんな所に突っ立っていると邪魔なんですけど。途中でいなくなるし」

憎まれ口を叩くイズミに、隣にいたミハマも苦笑いをしていた。その様子をティアスは見ているかとも思ったが、大きく溜息をついて、膝に顔を埋めていた。

真っ直ぐサワダに何かを求めるように、強い目をしていた彼女とは、まるで別人のようだった

「五月蠅い。元々オレはフォローだけだって言っただろうが。処理はしてきたのか？」

ティアスに駆け寄ろうとするミハマの後ろから、イズミに促される形で二人もゆっくりこちらへ寄ってきた。ミハマは彼女の側に動き、案ずる声を掛けた。

「親衛隊が来たし、カントウの護衛の人達も来たから。今ごろ、警備隊も来たけど、中庭に行ってもらった」

「中庭って？」

思わず突っ込んだオレの言葉に、珍しくイズミが応えてくれた。

「あの魔物は、三位一体で行動するんだよ。こっちに二体来てて、中庭に一体いた。だからこそ、そんなに脅威もなかったわけだけど」

「妙だな。バラで行動するなんて。こないだも一体しかなかったし」

疑問を述べたサワダが一瞬、彼女を見たような気がした。気のせいなら良いけど。

おかしいだろう。なんで魔物の行動のことで、彼女を見る必要がある？

「ティ阿斯。悪いけど、オレ達は見てたんだ」

彼女に確認させるように、ミハマはそう言った。真っ直ぐ見つめて。彼女もまた、彼を真っ直ぐ見つめ返していた。

「……ごめん。言えなかった」

「言えなかった？」

まるで子供のような彼女の言葉を彼も繰り返す。彼女の謝罪の言葉に、彼は一体何を思ったのか。

ミハマに任せているのか、突っ込むかと思ったイズミもサワダも、後ろから見守るだけだった。

「君たちが、少しずつ感づいてきてたこと、判ってた」

ティ阿斯もまた、オレと同じ不安に似たものを持っていたのだと。だけど彼女は、オレにも、もちろん彼らにも、彼女の部下にも言えなかったんだ。

ミハマはただ黙って彼女を見つめていた。だけどその目には、不思議と威圧感のようなものはなかった。

「そのために、影で動いていることも知ってた」

彼女の視線の先には、イズミとサワダ。影で動いていたのはもちろんイズミだろう。でも、もしかしたら、サワダかもしれない。影で動いていたからこそ、二人がこっそり会っているように見えたのかもしれない。

いや、それがオレの妄想でしかないことを、オレはよく判ってるはずだ。イズミがいる。

『テツが、ホントの所どう考えているか判んないし。彼女も』  
『何？テツちゃん、心配した？』

イズミの台詞が、オレの不安を、心配を、現実化していく。目の前の彼女の行動と台詞の意味が、もうそこしか指し示さなくなってきた。

なんでオレは判ってるくせに、それを必死に否定しようとしてるんだ？

『ユウトは、私の味方でいてくれるよね』

オレだけは彼女の味方でいる。彼女が言うことを信じたい。

きっかけはオレのいた時代の彼女かもしれないけど。だけど、オレと秘密を共有している、オレに味方でいて欲しいと言ってくれた、目の前にいる彼女を……。

多分、どうしようもないくらい好きになってるんだ、オレは。

「ティアス。良かったら事情を話してくれる？もしかしたら、オレ達は力になれるかもしれないよ？」

「……力になる？私の？」

「力になる」と言ったミハマの真意は判らない。だけど、思いは

判る。オレと同じなんだ。彼もきつと。

ミハマはフラットで、生々しさもなく、妙に綺麗だから判らなかったけれど。だけど、彼の一言一言に籠められた思いが、今ならよく理解できる。

「バカなこと言わないで。敵か味方かも判らないのに？むしろ……」

彼女は中王の手のものだ。中王の支配下であるオワリ国の王子からすれば、敵でないかもしれないけれど、味方でもないだろう。それは、何より彼女が一番よく判っているはずだ。

「オレの敵かどうかは、オレが決める。味方は、判らないままでも良いんだよ」

彼女は顔を上げ、しばらくきよとした顔でミハマを見ていたが、突然、笑い始めた。

それにつられたわけではないのだろうが、何故かイズミとサワダも笑っていた。

「なんでみんなして笑うかな」

「別に……ミハマらしいなって思っただけよ。怒らないで」

むっとした顔のミハマをフォローしたのは、ティアスだった。まるで、彼のことをよく知っているイズミが言うような台詞だったことに、オレは驚いていた。

ついさっき、テラスで並ぶ二人を見たときに感じた綺麗なものを、再び見せつけられているようだった。

彼が彼女を思いやり、彼女が彼を理解している。まるで理想的なカップルのようだった。綺麗な映画のようだと思っていたけれど、今は綺麗すぎて不愉快になった。

「でも、甘えられないよ」

「甘えろって言ってるわけじゃないよ。君に力を貸すことで、オレ達にもメリットがあるなら、それは対等な関係だと思っけど」

そうだね。とティアスはまた笑う。今度は悲しげに。

「君の後ろに立つ人たちは、その台詞を受け入れられるの？」

「愚問だな、ティアちゃん。こんなの予想の範囲内でしょ。うちの王子様の台詞としちゃ」

座り込む二人の側に寄り、同じ目線になるよう屈んで笑って見せたのはイズミだった。サワダは彼らから距離をとったまま動かなかったけど、大きく溜息をつきながら頷いていた。イズミが笑っていることは何とも思わないのに、サワダが微笑んでいたことは妙に腹が立った。胸を撫で下ろしているような、その態度が。

「いいんじゃない？ ユノちゃんも、めんどくさがってたし。だからこそ、テツちゃんが一旦出した『疑問』を、押し込めたことを不審がってたけど……」

押し込めた？

思わず聞き返すところだったけど、判りやすくティアスとサワダが動揺した表情を見せたので、成り行きを見守ることにした。

「……オレは別にそんな」

「そう言っの、後でやってよ」

ミハマは特に強く言っただけではなかったのだが、視線は真っ直ぐ二人を射抜いてた。意志のある強い瞳に、サワダもイズミも小さ

くなってしまった。最初のころは、この怪獣のような連中が、言い方は悪いけど、ミハマのような綺麗なだけの男に従っているのか判らなかつたけれど、今は少しだけ判る。

彼は再び、ティアスを正面から見つめる。こころなしか、彼女が一瞬震えたように思えた。

「ティアス、オレはお互い様だと思ってるよ。君はオレ達に隠し事をしてた、暗躍もしてたかもしれない、敵として動いていたかもしれない。だけど君の立場の微妙さは判ってるつもりだし、手をさしのべてくれたことも知ってる。オレは、誰がどう思おうと中王の楽師に感謝してる。この間のパスの件もそうだ。それに、中央に行つたときの君の話、ピアノと歌。それから、テツのことも」

「オレは……」

とサワダは言い掛けたくせに、ミハマに一瞥されただけで黙ってしまった。

「別に、サワダ中佐のことは……」

楽師がサワダに優しくかったことは、オレだって知ってる。なのにどうして、あえて否定する言葉を出す？

「感謝してるよ」

ミハマの言葉に、彼女は目を逸らしてしまった。

その後、不思議なことに、ミハマは彼女に猶予を与えた。明日の昼、話をしたいと告げた後、サワダとイズミを伴ってカリン姫の元へ向かった。オレにもお咎め無し（イズミが何か言ったかもしれないけど）。

彼は一体、彼女をどうしたいんだろう。

オレと二人、取り残された彼女の元へ、今度はニイジマがセリ少佐を連れて現れた。階級的にはニイジマの方が下のはずなんだけど、どうしてそう言う構図になるのか。

ちょうどサワダとイズミが立っていた場所に二人は立っていた。座り込んだままのオレ達と少し距離をとっている形で。

「もしかして、話し合いの時間をくれたってことか？あの王子様は」

どこかで、一部始終を見ていたのだろう。ニイジマが、オレとティアスを交互に眺めながら、ぼやいた。

「でしょうね……ホント」

ティアスの苦笑いには悪意が感じられなかった。

「変わってるって？そんな一言ですまされるのか、これ。なに考えてんだ？」

「なに怒ってんの？」

「どうして良いか判らんから！」

「でしょうね。私も判んないわ」

二人して溜息をついた。

「どうすんだ？カナさんも来てるし。さっき、応接の方を見に行ったら、待たされてイライラしてた」



「心配してくれてるのはありがたいけど、わざわざ一人で前乗りしてくることはないでしょう……。いつものことだけど、どんな手を使ったんだか」

ニイジマの後ろで、セリ少佐はニコニコしているだけだった。なに考えてるんだろう。

それに、オレはどうしたらいい？

「あの王子が味方かどうかって言うのは、どう思っただよ」

「2割……」

「少な！」

「違うわよ。敵である確率よ。あの子は信用しても良いと思う。サワダ中佐も……」

そこまで言っつて、バツが悪そうな顔して俯いた。そう言う顔されると、オレは口出しできないんですけど。

まあ、オレは嫌われたくないから出来ないけど、ニイジマは口を出せるみたいだった。

「その、サワダ中佐だけど。お前ら何、出来てんの？」

「もつと他の聞き方はないわけ？」

「ないな。つーか、他の聞き方ってなんだ。めんどくさい」

彼女はニイジマを睨み付けたまま、黙ってしまった。

「姫。どうなんですか？」

「どう、って何よ。コウタまで……。大丈夫よ、何も無い」

なんでセリ少佐に対して、そんな風に弁解する?!ニイジマと違うだろ、その態度は。二人は同じようにティアスの部下じゃないの

か？！

こんな所に伏兵が……。サワダやミハマにはかり気を取られていたけど、この人もか？しかも、ティアスに近い分タチが悪い。

「ユウトまで。しつこいわよ」

オレの視線を不愉快に思ったのか、怒られてしまった。

「はつきりしろよ、めんどくさいな。それでどう行動するかが変わってくるだろうが？あんたがどうしたいかも」

怒られることにも、むっとされることにも慣れているのか、ニイジマは彼女の態度を気にする風でもなく、続けた。

「関係ないでしょうが、そんなことは」

「じゃあ、とりあえず、あの王子様とその護衛部隊はどうする気だ？敵か？味方か？どういいうつもりでオレ達は動くんだ？」

「そんなのは、転んでみなければ判らないよ。私の味方は、あんた達しかないんだから」

彼女の世界の狭さに、狭くせざるえない彼女に、言いようのない焦燥感を覚えた。もしかしたら、ニイジマも同じ気持ちだったかもしれない。

「……2割……減らす？増やす？」

少しだけ柔らかい態度で、彼女に決断を迫る。

「その価値はある？」

柔らかくはなつたけれど、その内容は、酷いものだった。

「減らしましょう。その価値は未知数だけれど。この国があいつにとつて、何か大きな価値を持つてるのは確かだもの。取引材料になるかもしれない」

「だろうな。ここ最近の執着は、ちよつと異常だもんな。意味が判らん」

ティアス達が警戒してる相手って……

「……あいつって？もしかして……」

オレの質問には答えず、彼女は黙って、壁の隙間から東の空を見つめた。

「だけど、気をつけて。あの子達も決して、一枚岩ではないから。ミハマだけで良い」

「みたいだな。さっきの様子からすると。気をつけとくわ。理解した？コウタ？」

何を？と言った顔でニイジマに微笑み返すセリ少佐。この人、ホントに優秀なのか、ますます疑問は大きくなる……。

「明日は、そのつもりで話を進めるから。そろそろ戻るわ。カナにも姿を見せておかないと、心配してるでしょうし」

立ち上がり、オレにも立つよう促す彼女の表情には、いつもの自信が戻っていた。気が強く、真っ直ぐな彼女が。

いや……、「いつも」の？

オレは久しく、彼女のこんな顔を見たことがあつたか？最近の彼

女は、こんな風だったか？

でもあの覆面の中は、いつもこういう顔をしていたのだろう。それは容易に予想できた。

それが怖くもあり、嬉しくもあった。彼女の強さと弱さが、良くも悪くもオレを動かしたことを実感する。

04

「ティアス……。君は一体、何者なの？なんで、中央に……」

オレの持った当然の疑問を、彼女は笑顔で流した。答えてくれる気はないらしい。

だって、何となくの想像しかできないだろう？ニイジマやセリ少佐が彼女のことを姫と呼ぶことも、中央正規軍に属しながら、あの態度なのも。オレは何も知らないから、それ以上想像することすら出来ない。

だからなのか？今となつては、サワダが彼女の正体を知っていたのは明白だ。知っていて、彼は、彼の仲間であるはずの護衛部隊の前で、それを言うことを途中からやめたと、彼らはそう言っていた。その理由はどうしてなんだ？サワダと、ティアスの間に何かあったと考えるイズミの方が、自然じゃないか。

おそらくイズミは、オレ以上に何かを見ているはずだ。

「ユウトはもう、部屋に戻った方がいいわ？疲れたでしょ？」

「姫は、どうなさいます？」

「サワダ議員が迎えに来るわ。……きつとね」

その言葉を受け、ニイジマとセリ少佐はどこへともなく消えた。

それと入れ替えで、彼女の言葉通り、サワダ議員が現れた。テラスから歩いて。

「こんな所で何をしている？ 挨拶をしに戻ってきてくれないか。息子も待っているのね」

「……白々しいわ」  
「え」

思わず出てしまった言葉を飲み込むしかなかった。彼女は隠し持っていたあのジャックナイフを、サワダ議員に向けていたのだから。

「彼は、元々知っていた？ 君のこと」

ナイフを眼前に突きつけられているにも関わらず、彼は顔色一つ変えずにオレのことを彼女に聞いた。見ているオレの方がどきどきしてるんじゃないだろうか。動くことが出来なかった。

「顔を……知られていたから」  
「へえ……」

ちらっと、サワダ議員がオレを見た。見たって言うより、値踏みされているというか。飲まれそうな雰囲気醸し出す彼が怖かった。

「別に、この子が何かを知っているというわけではないけどね。残念ながら。さっさと行きましょう」

ナイフをおさめ、彼女はテラスに出て、サワダ議員に謁見室の方へ戻るよう促すが、彼の視線はオレに注がれたままだった。

「ユウト。戻りなさい」

ニイジマ達にはしても、オレに対してはしなかった強めの態度で、彼女はオレに動くよう命令した。オレはサワダ議員に飲まれそうなまま、動けなくなっていた体を無理矢理動かし、彼女の後へついていく。

「戻る必要はないだろう。君とももう少し話がしてみたいものだ。一緒に来たまえ」

「必要ないわ」

「それは君にとってだろう。私にとって、王の御前は、重要な場所だ。君にとってオトナシの前がそうであるようにね」

彼女が彼を睨み続けているにも関わらず、彼はそれを無視してテラスの入口から廊下へ戻った。渋々ついていく彼女の後ろに、オレもついていった。なんかよく判らないけど、目を付けられてしまったようだし……。

「……なあ、ティアス。オトナシって？誰？」

「中王よ」

呼び捨てかよ……。だからサカキって言うあの酔っぱらいみたいなおっさんとも仲良かったのかな。

でもおかしい話だ。同じように仲の良いというか、知り合いっぱいのあの酔っぱらいは、中王正規軍で元帥なんて地位についているのに、サワダの父親は地方で元老院議員だなんて。いくら王の妹と結婚したからって中央に入ればいい話だ。

実は、仲が悪いとか？でも、それならサカキ元帥とも仲が悪いかな？

「……ユウト、ごめんね。巻き込んでしまつて。疲れてるでしょ？」

「え？いや……オレは別に。大丈夫だけど」

さつきは壁の向こうから見ていた、初めて歩く長い廊下を並んで歩きながら、彼女はオレを気遣ってくれた。その優しさに、やっぱりオレは期待をしてしまう。誰にでも、そうだと判っていても。

「……アイハラ？どうして？」

謁見の間の前にある小部屋には、サワダが待っていた。汚れていた上着だけ着替えたらしく、妙に綺麗だった。

「オレが連れてきたんだ。王子はどうした？」

「中にいます。……オレは……」

「お前は、そうしていればいい。オレにも、あの王子にもついていれば」

サワダが沈んだ顔を見せる。もうすっかり見慣れてしまったけれど。

オレの知ってる沢田は、もっと偉そうだったし、もっと不躰だった。繊細な部分もあったけれど。バカみたいなことしか喋ってなかった気がするし、ティアスのことを除けば、オレはあいつのことが嫌いじゃなかった。

だけど、今オレの目の前にいるサワダは、嫌いじゃないけど、むしろ好きかもしれないけど、ちょっと重くてめんどくさい。しかもそれを口にする 것도 合わないといった感じがした。重すぎて。

「……王子にも、あなたにも？」

「どうして、何かおかしいか？」

ティアスの疑問に、サワダ議員は疑問で返した。

「おかしいかって言われても……。おかしいことだらけじゃない。意味が判らない。そんなこと言われたら、困るのは……」

彼女の示すとおり、サワダだ。自分の息子を困らせて、何が楽しいんだか。ちよつとかわいそうな気がする。

だけど彼女の言葉に、サワダもその父親も答えなかった。

謁見の間には、王が玉座に座り、その横にミハマが立ち、一段下がってシュウジさんが控え、それと対称の位置に元老院のナカタ議員が立っていた。彼らの前には中央正規軍のサエキ大尉が一人で立っていた。

オレ、とんでもない位置に立ってないか？さっきまで、あの壁の向こうでイズミと一緒にこちらを覗いていたのに。きつと今も、あいつはこつちを見てるのに。

「ミハマ。彼はお前の客人ではなかったか？」

オレのことを一言、そう息子に聞いた王の言葉に、ミハマは表情一つ変えず、沈黙を通した。

その後、どんなすごいことが起こるかと思ったら、本当にただ王の前で、サエキ大尉と挨拶を交わしただけだった。拍子抜けするほどあつという間だった。

だけど、オレのことをミハマに聞いたあの王の台詞。多分あれが、全てなんだろう。誰が誰の味方で、誰が誰の影響を受けるのか。オレがここに立っているってことは、もしかしたらミハマに対して、オレが思っている以上に悪い影響を及ぼすことになってしまいうんじやないのか？今は、何も判らないけれど。

きつとここを出たら、もうすぐにも終わってしまいそうだけれど、イズミにまたオレは怒られるのだろう。いや、怒られるどころ



か、無視されるかもしれない。少しでも態度が柔らかくなつたと思つてたのに、怖すぎる。オレはあいつが怖い。

あつという間に終わった挨拶の後、サワダ父がオレ達に外に出るように促す。それと同じく、別の入口からミハマとシユウジさんも出ていった。サワダ父も一緒に立ち去ろうとしているのに、ナカタ議員が王に話している言葉の中に、サワダ父の名が何度も出てきていたのが聞こえた。良く聞き取れなかったが、サワダ父のことを誉めているのは判った。

ものすごく遠回しではあつたけれど、ミハマが気が利かないから、サワダ父が気を使つたとか何とか。おっさん、いい年してんだから、陰口叩いてんじゃないやねえよって、叫んでやりたかった。ミハマはそんなんじゃない……と思うのに。

一緒に出てきたティラスにも、そしてサワダにも、聞こえているはずだった。オレに聞こえてるんだから。だけど、彼らは何も言わなかった。

特にサワダは、彼の前では借りてきた猫のようだった。いや、普段もなんかそんな感じの時はあるんだけど、気持ちが悪い。

「……私はこれで。ユウトも一緒に戻りましょう？ 疲れたでしょ？」

オレに声をかけてくれた彼女の気遣いに、どうしようもなく心が動く。やっぱりティラスは優しいし、オレのことを考えてくれてる。だけどティラス自身も一刻も早く、この場を離れたかったのかもしれない。謁見の間の前の小部屋を出てすぐに、呟くようにそう告げると、サワダ父に挨拶もせず立ち去ろうとした。

「いや、アイハラくんと言つたっけ？ 君は残つて。城を案内しよう。どうせ客室付近と王子の領域くらいしか知らないだろう？ スズオカくんの考えそうなことだ」

「父上。アイハラは……」

「こんなバツジ一つじゃ、動きにくいんじゃないかね？」

何か後ろ暗いことでもあるのか、止めに入ってくれたはずのサワダまで黙ってしまった。結局、このバツジって、なんなのかはよく知らないんだよな。結構自由に動けるけど。サワダ父の言ってることも、ちよつと気になるかも。

「サワダ議員。殿下が、彼を呼んでおりますので。今日はご遠慮いただけますか？」

出た！！恐怖の大王！

多分、またあの壁の向こうから覗いていたんだろう。しれつとした顔で窓際にある壁の方からやってきたイズミが、オレとサワダ議員の間に立ちふさがる。怖すぎる！！

サワダ父は、苦笑いを見せると、無言で引き下がり、廊下を歩いて立ち去った。

なんでだ？ミハマが呼んでるからってこと？無理強いしても仕方がないってこと？つか、なんでオレが彼と話をする機会を、イズミまで止めに來た？

サワダだけなら……オレに気を使ってくれたと思えたけれど。

オレの胸で鈍く光るバツジも、言葉も行動も判らないイズミのことも、結局何も教えてくれないシュウジさんのことも、オレはあの人の一言で、全てを疑ってしまいそうだった。

05

夜になったというのに、相変わらず空は、ただただ薄暗かった。

飲み込まれそうで気持ちが悪かった。気持ち悪いと判っているのに、一人で部屋にすることが耐えられなくなって、ベランダに出た。

ベランダから外に出たら、今日みたいな目に遭う可能性はある。そう言ったのはサワダだった。イズミはそれを見ながら、また彼を笑った。仏頂面のくせに親切なサワダと、笑顔のくせに人を突き放すイズミ。随分慣れてきたけど、いや、慣れてきたからこそ、彼らの秘めているものを感じ取れるようになってきた。

最初のころより、彼らを信用してるし、疑ってモいる。

このバッジが何を意味するのか、オレは何も知らない。あいつらは悪いヤツらじゃないのも知ってるけど、オレが彼らにとって荷物にはなっても、利益をもたらす存在じゃないのも判ってる。だからこそその距離感だと言うことも。だけど、あんな言われかたをしたら、気になるだろう。

オレに知られたくないこともたくさんあるだろう。オレだってあいつらの中に入っていけるとも思えないし、行こうとも思わない。だけど、分厚い壁を感じてるのも確かだし、それが怖いのも確かだ。ティースは、どうだろう。彼女だけは、オレを受け入れてくれる気がしたけれど。だけど、触れることも適わないのに？

中庭の様子なんてほとんど分からないことは承知で、下を覗き込んだ。高くて足がすくみそうになっていたのは、最初だけだった。こんなコトはどうでも良いことなんだ、今のオレには。

一瞬、あの中庭の広場に人影が見えた気がした。不愉快で、吐き気がして、悔しくて震えているのに、オレは部屋を飛び出してエレベーターに乗っていた。この目で見ないと、現場を押さえないといけない気がしていた。

2階の窓から、二人いることを確認して中庭に向かった。出られるかどうかは判らなかった。だけど、通用口に立つ警備員にバッジ

を見せたら、案外あっさり通してくれた。

絶対、あれはサワダとティアスだった。だけど、違っていたら？ オレはそれを望んでいるんじゃないのか？ だから、確証が欲しいのか？

「夜中は魔物が出るぞ？」

広場へ向かうオレを止めたのは、ニイジマだった。風が強く吹いて、木々を揺らす。その揺れで、彼の姿を一瞬見失ったと思ったら、オレの横に立っていた。

「……お前こそ。ここをどこだと思ってるんだよ。お前は客人じゃないだろ？」

早く行かないと、いなくなっちゃうかもしれないだろうが。

「いや。明日辺りにでも、カナさんの部下としてこようかと思ってたんだが。オレ、こういう隠密的なこと苦手なんだよな、本来」

「出てきたしな」

「言つなよ、もう。さんざん怒られたし。そもそも、こういう仕事はコウタ向きなんだよ」

「つか、部下としてって、そんな簡単なもんか？ 予定になかったのに。何とか言う別の人に来るんだろ？」

「西二ホン管理部のカツラ少尉相当官だよ。ほとんど研修生扱いだし、カナさんなら何とかするだろ」

なんとかってなあ。そう言う問題か？

「てか、なんでこんな所にいるんだよ。部下として来るのは明日以降だろ？ 急にいろいろ変わりすぎたら、またここの城の人たちが振

り回されるし?」

「姫の護衛だよ。夜中に出歩くからさ。こないだもいたよ?」

そうなんだ。立派に隠密してる気がするけど。

「……ティアスは?」

「何、姫に用だった? あっちの広場にいるぞ。一緒に行く?」

邪魔しに来たのかと思ったら、そう言うわけでもないのかな。

「いや。用があるわけじゃないけど……。あの子、一人?」

「一人だけ」

見間違えか……もしかして一緒にいたのはニジマッてオチとか? いや、それはないか。今日はそうかもしれないけど、昨夜は明らかにサワダだった。

「イズミ中佐とかに、見つかるだろ? こんな風に出歩いてたら」

「いや、もう開き直るしかないだろうよ。今まであの人がいたから見つからないようにって思うとホントに動きづらかったけど、もうばれてんなら、逆に気が楽だ。さっきなんか屋上で挨拶までしたっつーの」

「なんか、イズミの顔が思い浮かぶ……あいつホント、そう言うときは超笑顔で人の悪いこと言いそう」

「だよなあ。食えないよな。ただ……」

ちらつと、空を見上げた。その先には木が揺れているだけだったのだが。

「ただ?」

「『敵か味方が判らないから、仕方ないですよね』なんつってただけだな。まあ、その通りだと思うよ。今の状態では、オレもそうすることしかできないし」

「ティアスは、味方にしたがってたんだから、そう言えば良かったのに」

「いや、どうだろうな。必要ないし、必要なら姫が言うし。イズミ中佐自体は気にしてそうだけど、あそこの王子はそんなこと気にしてなさそうだったからな。『敵か味方が判らない』っつーのは、王子の受け売りだって言ってたからな」

他に誰もいない中庭を、ニイジマと二人で進む。

ニイジマがイズミに抱いた感想と、オレが彼に抱いた感想は、似て非なるものだった。オレは、あのイズミの考え方が不思議で、酷くミハマに依存しているようにしか見えなかった。だけど、ニイジマはそんなことは当たり前のこととして受け取っているように見えた。立場の違いなんだろうか。

広場のベンチに、ティアスは一人で座っていた。隣に誰か座っていたようなスペースを空けて。

「ユウト、どうしたのこんな夜中に？」

「あ、うん……。隣、座って良い？」

彼女は一瞬戸惑った表情を見せたが、すぐに笑顔を見せてくれ、頷いた。だけど、彼女に触れられる距離までは近付かせてもらえなかった。ニイジマもいるし仕方ないかと思っただけ。

「あの後、サワダ議員に何か言われた？」

「え？あの後って？会ってないよ。すぐに部屋に戻ったし」

誰とも会いたくなかったって言うか。何も考えたくなくて、その

まま寝ちゃったんだよな。なんかここにいと、時間の感覚が狂うし。

「そうなんだ。目を付けられてたみたいだから、何か言われてないかと思って、ちょっと心配してたのよ。シンが間に入っていたみたいけど」

良かった。やっぱりティアスは、オレのことを心配してくれていたんだ。立ち去ったと思ったけど、どこかでニイジマかセリ少佐が見てくれたんだ。

「気をつけてね。あの人のこと、全面的に信用するのは、なしだから」

「……ナイフ、向けてたから？あれって、オレが思うに、ティアスとあの入って……」

裏で手を組んでたって考える方が妥当だろう。それはおそらく、あの魔物の襲撃に関することか、ティアスの正体に関すること。

彼女はそのオレの心を読みとったかのように、大きく溜息をついた後、少しだけオレに近付いて囁いた。

「今日の襲撃は、仕組まれたものよ。あの人と、私の手でね」

「なんで？」

「それが、オトナシの意志だからよ。判る？猫がネズミを齧るように、様子を伺っている」

最後にとって食ってしまおうと言ったことか。

「なんでそんなことに、彼も君も、加担をする羽目に？」

「私は、ヤツの言うことを聞かざるをえない状況なのよ。私は捕ら

われてる」

「無理矢理協力させられてるってこと？中王に？何でそんなこと」

「……国を、墓にすると脅されてる。それと引き替えに私はあそこにいる」

「それで、姫って……。だけど、それって」

少しおかしくないか？脅されてるって言うても、他にも方法があったんじゃないのか？それに、彼女の周りにいるのは、皆中央でそれなりの地位についてる軍人ばかりだ。

「正確には、もう半分握られてるんだけどね」

「握られてる？よく判らないよ。この国を墓にしようとするってことと、ティアスの国は違うってこと？」

「そうね。少し違うかもね。中央と、この国と、私の国との関係のせいかね。私の国は、二ホンにはないの。人がもういなくなつたと言われている大陸にあるのよ。北の話は聞いたでしょう？中央が北を封鎖してるのは、ここから人が外に出ていけないようにするためだけど、あの先には国も人も存在している」

彼女の悲しい瞳が、強い意志に光る。淡々と、抑揚もなく話をしてくれているけれど、彼女の背負っているものが重いのは充分すぎるくらい伝わった。

「なんでオレにその話をしてくれたの？」

「どうしてかな？」

「……オレが、サワダ議員に目を付けられたからだろ？」

彼女は黙って微笑んだ。うそがつけない彼女に、オレは胸をなで下ろした。



彼女の国はあの大陸にあるという。一時期、それを疑ったこともあった。

『空から来る魔物を統率する力を持った一族が住んできると言われますね。その昔、中王正規軍によって追放され、奥地に追いやられたそうですよ。ですから、危険なため、現在はこの北の門という場所から先は許可がなければいけません』

あの、シウジさんの言葉が、知識が本当なら。彼女はあの魔物達を統率する一族だと言うことになる。魔物の襲撃に関わっていると言ったのは、彼女自身だ。

でも、それにはサワダ父も関わってるし、中王の手引きもあった（と思う）。彼女が襲撃の実行犯ではないと信じたい。

『こっちの砂漠は？』

『かつては生き残りがいて、ニホンとも国交がありました。しかし、その国の跡地は中王に支配され、閉鎖されています』

……たぶん、こっちだ。こっちの国ならつじつまが合うぞ！テイアスが襲撃の実行犯の可能性も低くて、中王に協力をせざるを得ない、悲劇の姫君的シナリオの！！

だって、あんなに優しくて良い子なのに。あんな悲しそうな顔をさせてるのは、絶対そう言う理由があるはずだ。

オレのその思いに答えるように、彼女はオレを気遣い、「疲れてるみたいだから早く寝たら？」と声をかけてくれる。確かにオレは

すごく疲れていたし、辛かった。それを彼女が見ていてくれたと思  
ったら、それが嬉しくて仕方なかった。だからオレは、彼女の言う  
とおり、部屋に戻ることにした。

疑問が残っていないわけじゃない。どうして彼女はわざわざここ  
にいるのか。ニイジマと話をするためだとしても、不自然だろ？オ  
レは確かに二人いるのを見てる。

どうしても腑に落ちなくて、オレは彼女たちに中庭を廻ってから  
戻ると告げ、その場を離れた。

遠ざかっていく彼女たちを、振り向いて確認したが、ニイジマは  
座ることなく、彼女のそばに立ったままだった。それが、彼のあり  
方だと思ったら、ますますオレの不信感は募っていった。

広場を抜け、表玄関につながる、木々の生い茂る遊歩道を歩いて  
いく。きちんと整備されていて、美しい庭だとは思う。

二手に分かれた一方の道の先には、温室らしきものもあった。オ  
レのいた時代のティアスが、植物園の話をしてくれたことを思い出  
していた。沢田は一緒だったらしいけど、二人じゃないって言うて  
いた。でも、そんなことは、どうでも良いことなんじゃないかと、  
その時もそう思っていたし、今もそう思う。

この時代のあの二人が一緒にいる、あの姿の衝撃に比べたら。

温室の入り口付近に、人影が見えた気がした。オレ、うろろうし  
ていたら、もしかして怒られるかな。守衛には止められなかったけ  
ど、見ないフリして通り過ぎよと……。もう一方の道を進み、玄  
関の方へ向かう。あっちから宮殿に戻ることで出来るのかな？で  
も、なんかティアスのいた方に戻りにくいしな。

「くおら！何してやがる、こんな時間に」  
「うわ！でた！」

温室の前の人影が消えたと思ったら、イズミがオレの横に立っていた。コイツ、ホントに怖い……。

「てか、イズミこそ何してんだよ！」

そう聞いてから、コイツがいるときは、ろくなコトはないってことを思いだして嫌な気分になった。

「仕事だよ。さっさと戻るぞ。うろつろしてるんじゃないよ」

イズミがオレの背中を突き飛ばす。そのくせ、彼の視線はオレではなく、温室の方に注がれていた。

「サワ……」

「静かにしろ」

思わず声を出したオレの口を、イズミが無理矢理塞ぐ。オレも彼も同じモノを見ていた。

温室から出てきたのはサワダと、サトウアイリ。木々にかすみそうな距離から見ているにも関わらず、存在感のある彼女と、消えてしまいそうなサワダが、妙に印象的だった。

「……あれも、内緒？」

「うーん……」

仲睦まじいとは言いがたい二人の様子を伺いながら、イズミは悪巧みをしているときの顔を見せた。

「本人以外はみんな知ってるからね」

「本人。あの本人？」

サワダが消えてしまっんじゃないかと、本気で心配してしまうくらい、彼の存在感はなくなっていた。サトウさんとの力関係によるものだろうか？

でも、オレの知ってる沢田は、佐藤さんに頭が上がらなかったし、その理由もわかりやすいものだった。先生だったし、惚れてたし。それ自体は本人含めて周知の事実だった。ティアスでさえもそう言っていたから。

「良いから、行くぞ。うっかり見つかったらバツが悪いだろう？」

イズミに押され、その場から逃げるように立ち去る。

でも、本人以外みんな知ってるって言うのは、どういうことだ？あの二人がこそそ会ってるってコトを？それにしては、護衛部隊のサトウアイリに対するあの嫌悪感と言ったら無いだろう。いや、それ以前に矛盾だらけだし。

ティアスも、これを知ってるのか？だってこんな時間に（明るいけど）わざわざ中庭で危険を冒して会う必要のある関係なんて言ったら……。

「そう言えば、中庭って、魔物が来るってこと？今日だって、来たんだろ？」

「え？ああ。今日くらいのレベルのヤツだったら入ってこれるかな。でも、この辺りには来れないよ。結界の張られている範囲が決まってるんだ」

その言葉を指し示すかのように、イズミは玄関の方へ向かうのに、あえて遠回りの道を選んだ。

「じゃ、危ないんじゃないよ！こんな所で密会とかしてるけど。なんで全体に張らない？！」

「地形とか、形とかで決まってるんだよ。あと、あえて隙を作ってる部分もあるし。テツは知ってるから、そんなところにはわざわざ行かないって。それにしてもお前さ……」

「なんだよ？」

なんか文句があるってか、これ以上！？

「方言、酷いよね。だからとりあえず、中王関係ではないと判断されたんだけどさ」

「酷いって！？」

いや、なんかプラスの方向に働いたみたいだけど、ただどなんが失礼！

「そうでもないって！イズミも酷い！多分。しかも今、関係ないし！？」

「いや、じゃんだらりん、うつさいからさ」

「つーか、方言残ってるの？」

「残ってるだろうよ。中王が現れてしばらくの間、各地は隔絶された状況だったらしいから。まあ、何百年も前のことだし、オレにはよく判らないけど。妙な反作用みたいなもんだと理解してるけど」

「反作用……？中王が、昔のものを排除しようとすることに対すること？」

あからさまに「喋りすぎた」と言った顔をした。だけど、オレに對してではなかったらしい。彼は辺りを見渡し、オレに顔を近付け囁く。

「だっておかしいだろ？何でこの国は、わざわざ昔のものを残そうとするのか。だって、中身はきちんと進化してるのに、外側だけ。文化としておかしいだろ？あの地殻変動以前とは、環境そのものが変わってるのに」

「……どっちが、反作用だよ。中王が古いものを排除しようとすること？それとも……」

判らなくなってきた。この時代、この世界で何があるのか。あの地殻変動以来、何があったんだ。

オレは、あの地殻変動以前の人間だ。地殻変動も知らない。

どんなに地殻変動で、未来が判っているとしても、それでも、少しの時間でも、オレは元の時代の方がいい。

だけど、彼女の存在が、オレの心をここに残す。

「どっちだろうね。オレには、あんな風に人の上に立って、人民の頭を踏んづけようとしてる奴の気持ちなんかわかんねえさ」

「つか、中王って幾つなんだよ。おかしいだろ？」

「今の中王は多分、サワダテツキと変わらんはずだけど？まあ、あの人は侵略者だからな。本来の中王とは違うって言われてるけど……オレには一緒にしか思えねえな」

もしかしてオレ、結構重い話をイズミから聞いてる？

「なんだよ。にやにやするなよ、気持ち悪い」

「いや、イズミのくせに、親切だな、と思っ」

「……話しすぎだな。何か哀れだったからな」

哀れって……。オレのどこが？！哀れって言っなら、今さらだろうが！オレがここに拾われたときに、もっと大事にしるよ、もう！

「そついやさ、お前、最初からニイジマ中尉を知ってたよな」

「え？まあ、知ってたっつーか……」

「そつくりさん。お前曰くの『お友達』の中にいたってことだろ？写真持ってたし」

「でも、違う人なんだろう？」

「もちろん。だけど、そつちのそつくりさんなら判るんだけどさ、ニイジマ中尉も方言きつついよな」

そつといえば。何かやっぱりオレの知ってる新島と混同してしまうから、気にならなかったけど、確かにこつちのニイジマがそうだとしたら、おかしいかも。気にしたことがなかっただけかもしれないけど。

「カントウの人じゃないってこと？」

いや、そもそも、ティアスの側の人でもないってことだ。ティアスはだって、あの大陸から来たって言うてたんだから。

「まあ、出身はそうかもね。しかも結構長いことオワリにいたんじやねえのかな。そうになると、ティアちゃんの出身も怪しくなってくるな。明日になれば判ることだけだ」

ティアスはどこまで、コイツらを信用してるんだろう。敵である可能性を8割だと言った、コイツらを。

オレは、彼らよりは信用されてる。それで良い。

結局、眠れないままミハマの元へ行き、いつものように護衛部隊のみんなと一緒に朝食をとるための部屋に入った。ただミナミさんは未だ調子が悪いらしく、いなかった。彼女を見舞っていたであろうイズミの到着を待って、朝食が始まった。

さすがに2晩続けて徹夜はきついはずなのに、不思議と眠気はなかった。

だけど頭はぼんやりとしてもやががかかっていた。ミハマを囲む姿が最後の晚餐だとしたら、一体誰が裏切り者なのか等とバカなことを考えてしまう程度には。徹夜明けってやつは、ろくなことを考えない。

「どうです？こつちでの生活にも、だいぶ慣れてきたんじゃないですか？」

『いっそ、この時代を満喫してみたらどうですか？』

シウウジさんがいつものように新聞を読みながらも、珍しくオレに氣を使ってくれたのに。どうして、裏があると考えてしまうのか。そしてその台詞は、最初からずっと一貫していたことにも、何で今さら気付いてしまうのか。

彼はずっとオレに対して、「帰ることへの希望」より、「この時代への希望」へ目を向けさせようとしていたじゃないか？

オレの朦朧とした頭が、そう思わせているのか？

「……オレのこと、何か判ったんですか？何でこんなことになったのか、とか……」

「現在調査中です。私もあまりおおっぴらに動けないんで、勘弁してくださいよ」



何か誤魔化された気がするな……。

「シュウジのヤツ、ああ見えてちゃんと動いてるからさ。あんまり突っ込んでやるなよ」

『「滅びることが判ってる時代」に戻ってどうする?』

シュウジさんのフォローをするサワダの言葉にすら、別の意図を感じてしまう。実は何もしてないんじゃないかとか、何もしてないのをサワダも知っていて、あんなフォローなのか、とか……。

大体、ティアスとのことをあんなに隠してるんだから。それは、彼女もそうかもしれないけど、意図が判らないし。

「シュウジさん、そんな安請け合いしてたわけ? もう少し、自分の力量を計った方が……」

「安請け合いしたわけではありませんよ。流れでそうなったんです。失礼なこと言うんじゃないやありません。そんなこと、判らないでしょうが?」

『なんでも。平和のためさ。何事も、タイミングが肝心なわけよ』

コイツだ。この男が究極にわざとらしい。ヘラヘラして、だけど全てを影で覗いてる。

でも、怖いけど、嫌いになれやしない。どうしてだ? この男がずるいから?

隣に座る、笑顔のイツキさんだけが、憩いのオアシスだよ……。敵に回したら本気で怖そうだけど。つか。敵に回してるのかどうかもよく判らないし。

ミナミさんも敵か味方かつたら、中立ではいてくれるけど、オレの優先順位はかなり低そうだしな。ミハマがいてサワダがいて

…っとなるだろうし。

「あ、そうだ。アイハラ」

「……なに？」

ミハマは……どうなんだろう。彼は綺麗だ。だけど、ここでは誰よりも強い。その強さなんてオレには判らないけれど。だけど、彼がこの中で、唯一オレをフラットに見てくれているような気はしている。

『2割……敵である確率よ。あの子は信用しても良いと思う』

ティアスの評価も高かったし。

「今日、3時からティアスと話をしようと思うけど。君も来る？」

『オレは君の味方でいるつもりだけど、オレの味方が君の味方とは限らないし、オレ達の敵が、君の敵とは限らない。それは、オワリの国にしようと、中央にしようよね。だって、オレだって、そうなんだから』

「え？ いいの？」

彼の意図は判らないけれど。だけどオレは、彼の発した「味方でいる」という言葉を嘘だとは思えない。

「ミハマ」

当然だが、抗議するような口調で主を責めたのはサワダだった。シュウジさんは苦笑い。何故かイズミは何も言わなかった。こうい

うことは、真っ先にミハマに文句を言いそうだったのに。

「どうして？オレは良いと思うけど。彼女に対して感情的にはともかく、中立の立場の人間がいた方がいいと思うし。むしろ、ニイジマ中尉とかで周りを固められても困るけど。今、監査に来てるサエキ大尉も実質上、彼女の部下だろ？オワリにこれだけ彼女の手のものが集まっているこの状況で、余計に警戒心を強めるように追い込んでどうするんだよ」

「……そりゃ、お前が考えた『良い方』の理由だろ？」  
「何がそんなに心配かな？」

ミハマの笑顔の圧力に、サワダごときが敵うわけもなく、彼は黙ってしまった。

でも、確かにミハマの言うとおりだ。ミハマは彼女の味方になると言ったんだ。その言葉を信じるなら、彼女に頑なな態度に出られても、戦う姿勢を見せられても、良い方向に話はいかない。彼女とミハマの距離が縮まる結果になったとしても、そっちの方がいい気もする。

「お前は、あの女のためにどこまでする気だ？」

「……どこまでって？」

「話を聞いて、味方になりたいつつって、どうやって味方でいるつもりかって聞いているんだ」

そこまでサワダが話したタイミングで、イズミが席を立った。しかし、その様子を気にする者は誰もいなかった。彼は窓を開け、ベランダへ出ると、小さな拳銃を取り出した。その先は考えたくもなかったし、見たくもなかった。

「面倒なことに首を突っ込む羽目にならないか？あんな、中王の子

飼いの女なんか」

イズミがその台詞を言ったのなら、オレは納得できたかもしれない。だけど、その台詞を吐いたのはサワダだった。

「うーん。テツが言う面倒なことって言うのが、どの程度のことなのか、オレにはよく判らないけど」

「判らないフリしてるだけだろうが。……判りたくないと言うか」

「だって、テツもそう思っただけなのに、何を持って面倒だと言ってるのか判らないや」

「オレに面倒じゃなくても、お前には面倒なこともあるだろうが」

「それはテツの考えであって、オレはそうとは思わないけど。話してみないと判らないし、どんな状況になるかも判らないし。アイハラがいることが嫌ってわけじゃないなら、別に良いんでない？どう転ぶかなんて、誰にも判らないよ」

そう言われて、サワダは黙るしかなかった。彼らは二人とも、何か含んだ物言いをする。けれどもそれが、お互いを思っただけのことだと、端から見てもはつきりと判るからこそ、彼らの言い争いは険悪にならないのだろう。少しだけ、羨ましい関係だった。

この城の中で言われているような、派閥争いなんて、彼らには関係ないのかもしれない。だけど、関係ないからこそ、辛いのもしれない。この城にいて、彼らと話をして、やっとそれが分かってきた。

「……で、アイハラはどうする？彼女がこっちに来てから、仲良くしてるみたいだし」

何か、釘を差された気分だけど、ここは聞こえなかった振りをしておこう。さりげなさ過ぎて怖いってば。もしかしくなくても、ミハ

マッて結構、嫉妬深いんじゃない？……。

「いてもいいなら」

「よかった」

「話はまとまった？」

爽やかな笑顔を見せながら戻ってきたイズミが聞いたのは、サワダだった。元通り彼の横に座り、食事を再開する。何をしてきたのかあんまり考えたくないけど、よく平然と飯が食えるもんだ。

「まとめられた」

「ま、そうだろうね。テツちゃんがミハマに勝とうなんて、そんな図々しい」

「お前なら勝てるっても？」

「そこはそれ、交渉術でしょ？テツちゃん、真っ正面からぶつかるから。口は時として、剣よりも強いよ？」

目の前で噂話みたいなこと喋ってんなよ。ミハマが気にするとか、考えないのか？

「じゃあ、3時に呼びに行くから」

気にしていないみたいだった。判っててあの態度か、コイツらは。イツキさんもシュウジさんも平然としてるし。

でも、3時か……。今が8時半だから、未だ結構時間がある。

『お前、誰の味方なの？』

オレはティアスの味方でいたい。今なら、あのニイジマの言葉にも即座に答えられる。

彼女だけが、本当の意味でオレの味方だ。

08

朝食のあと、ティアスの部屋に向かった。少し心配していたけど、彼女はオレを快く中に入れてくれた。

黒いレースをあしらったコンパクトなワンピースに、ベロアのジャケット。それに太めのヒールのブーツを身につけていた。普段も柔らかい印象の服は着ない娘だけど、ケガをしていたせいも、もう少しラフな服装だった気がする。オレが心配しすぎてから、そう見えるだけかもしれないけど。

「どうしたの、急に？」

オレに、部屋の片隅にあるソファセットの横にある椅子を勧め、彼女自身はオレに断りを入れてからソファに座った。未だ、体が辛いのだろう。

「いや、今日、どうするのと思って。ミハマ達に、どんな話するんだろうと思って。オレにも何か出来ることがあるなら、オレは協力するよ」

「そう」

笑顔で頷いた彼女は、その表情を崩すことなく、続けた。

「でも、いいわ。あなたにも迷惑がかかる。自分だって大変なんでしょう？ シュウジさんに聞いたわ」

「何を？」

「あなたの話。私に教えてくれたでしょう？それで、私のことを知ったシユウジさんが、昨夜……というか早朝、私の所に来たの。その時、あなたのことも聞かれたわ。彼から何か話を聞いてるかって」  
「……オレが楽師のことを知ってるって……」

「そう言う風には聞かれなかったけれど。ここに來てから仲が良いみたいだけれど？って。その時、彼の仮説を聞いた。あなたが元の時代に戻れるように、調べてくれているみたいね」

シユウジさん、ホントに動いてくれていたんだな。疑ったようなこと言っちゃって悪かったな……。

「それはまた別だよ。オレは……多分大丈夫だから」  
「ホントに？心配だな」

やっぱりティマスは優しい。

「大丈夫だって。今日、オレも話を聞いていて良いつて、ミハマに言われてる。だから」

「……ミハマが、私に味方を付けようとしてくれるのも判る。だけど、それはあなたが感情的に私の味方をしてくれていても、立場は中立だから。あなたが私のために動いてしまったら、あなたまで彼らの敵になりかねない」

そう言つて彼女は立ち上がり、オレを部屋から出るよう促した。彼女も一緒に部屋を出たかと思うと、廊下をオレと反対方向へ歩いていった。元老院のある方へ。

元老院といえば、サワダの父親であるサワダテツキがいる。ミハマがあからさまに敵視をする、政治的にも感情的にも彼の敵。だけど、彼女にとってはここに在るための大事な後見人であり、中王

を介してつながっている男。

『伝えて。「しばらく動けないから、2週間後に彼の合図で動く」と。「それまでに連絡を取れる体制を整備して」』

彼女にそうとはつきり確認したわけではないけど。だけとおそらく、あの時ニイジマ達に伝えようとしていた、あの伝言が示す「彼」って言うのは、サワダ議員のことだろう。

『あの方とはきちんと話されているのですか？時期が早すぎる』

だけど、彼と彼女たちは、連携がとれていない。だからこそティアスのあの態度だったわけだ。

彼を探れば、何か判るかもしれないって思うけど……正直怖い。オレは彼に目を付けられてるわけだし、そこを利用すればって思うけど。思うけど、オレには無理だ。あいつらですら、あんな態度なのに。出来れば、関わりたくない。だけど、彼女のためには何かしたいのに。

「アイハラくん……だったね？どうしたの？こんな所で」

出た！この人も神出鬼没！！オレの名前すらうる覚えのくせに、親しげに彼は話しかけてきた。オレと微妙な距離を保ったまま、廊下を挟んで壁際から。

「……いえ……」

こんな所と言えば、こんな所だ。ティアスの部屋の前だなんて。彼も、彼女に用でもあったのだろうか。それとも……。



「ちょうどよかった。君と話をしたいと思ってた」

やっぱり。そんなに彼はオレに近付いているわけでもないのに、なのに逃げられない。蛇に睨まれた蛙って、多分こんな気持ちなんだろう。イズミ対サワダのケンカよりも、この人一人分の威圧感の方があがる気がする。種類は全然違うけど。すごく怖いわけでもないけど。

いや、いいタイミングじゃないか。オレしかできないぞ？この人に突っ込むのは。

「あの、オレ……ちょっと……」

「君、あの子のことを最初から知ってたみたいだけど？」

オレ、断ろうとしてたのに！有無を言わず話を始めるか？！しかも直球！いきなり！

「どうして？」

「えっと……知り合いに似てて……その……」

なんて説明したら良いんだよ。楽師のことを知ってるって、この人にもばれたらまずいだろうし。ホントのこと言って、信じると思えないし。

「彼女は顔を隠していたのに？似てるも何もないだろう？王子が拾ったって言うのも、おかしい話だし」

「いえ、あの、オレをここに連れてきたのは、サワダ……あの、息子さんでっ！」

変な汗が止まらない。

落ち着け、落ち着け！別にそんな怖くないはずだろうが。口調

も穏やかだし。彼はしゃべり方も冷静だし。怖い顔してないし。見かけだって、細っこいし、小綺麗な顔だし。別にオレには後ろ暗いことなんてないし。むしろこの人の方がそう言うのはいろいろ持っ  
ていそうじゃないか。何でオレがこんなに怖がらないといけないんだよ。

でも、彼の穏やかな表情からは判らない、何かがオレにプレッシャーをかける。

「どうしたんですか？」

オレと彼の間に入ってくれたのは、反対方向へと歩いていったはずのティアスだった。

「元老院の方に伺ったら、こちらだと」

「君に用があつてね。たまたまアイハラくんがいたから、少し話をしていただけだよ」

彼女はオレに苦笑いをして見せ、盾にでもなるようにオレの前に立った。オレのこと、心配してくれてたんだ。

「何のお話？」

「聞こえていたろう？ 気になったただだよ。それとも、言えないよ  
うなこと？ 後見である私に」

脅迫めいた彼の台詞に、彼女は溜息をつく。

「この子は、500年前の世界からタイムリープして、ここに来たんですって。その世界に私や私の部下や、オワリ王子の護衛部隊の名前も同じそっくりさんがいたんですって」

突然の彼女の台詞に、さすがのサワダ父も呆氣にとられたような顔でオレ達を見ていた。

「それで？」

「私や彼らのそっくりさんの写真を、この子は持っていたの。驚くほど似てるんですって。それで、私が顔を隠していても判ったって言うの。だけどそんな話、あなたは本氣に出来る？」

そう言われるとそれはそれでショックですけど。けど、ティアスがオレをサワダ父の目から遠ざけるために、そう言っているのは判る。だって、彼女はオレの話を（正確にはシュウジさんの力で）信じてくれたから。だから今の彼女とオレの関係も、秘密を共有していた期間もあつたわけだから。

「するよ。ただ、君の言葉では信用できないかもしれないけど」

彼は、ティアスを見ることなく、笑顔でオレに近付いてきた。

「本当？」

念を押す彼の笑顔に、オレは黙って頷くことしかできなかった。

「驚いた。オトナシと同じコトを言ってるんだ、君」

「……どういうこと？オトナシが？ユウトと同じコトって？」

「おっと。余計なことを言ったかな？ああ、でも、オトナシと会わせてみるのも面白いかもね。君たちの話が一致したら、お互いの話に信憑性が出てくるわけだから。聞いてみたい。オレ達は、タイムトラベラーを目の前にしてるわけだ。SFだな」

邪気だらけの笑顔で言われても、不愉快なだけですけどね。余計

なこと言ったかな、なんて嘯くくせに、どうでも良いって顔してる。いや、事態を引っかけ回して楽しんでるようにも見えるかな。

ティアスの2度目の溜息が、事態を悪化させてしまったことを物語っていた。

09

中王である「オトナシ」と、オレが同じコトを言っていると、サワダ議員は言った。しかもこの人、それを楽しんでる。

いやいや、そんなことより、この人が言ってることが本当なら、仮に、中王がオレと同じく「五百年前の世界」の話をするというのなら。

この世界を支配している男は、この時代の人間じゃないってことだ。何があってこんなことに……。

「おもしろいな。あいつ、人が変わったただけかと思ってたけど。一人ではなく、二人なら。その話を信じてみても良いかもね」

また一步、彼はオレに近付く。多分、野生動物に目を付けられたら、こんな気分なんだろう。この人にそれを感じるなんて、おかしい話だけど。元傭兵だって言うサカキ元帥とかなら、判らないでもないけど。

オレに手が届きそうなところまで近付いたとき、ティアスが再びオレ達の間割って入った。

「変わった？」

「そう、変わったんだ。あの中王の座で、退屈そうにしていただけあの男がね」

「いつ？判らなかつた……」

「君では判らないよ。君は、所詮あいつに拾われただけの女だ。鳥かごに閉じこめてる小鳥が泣き叫んでるくらいにしか思つてない。最初に気付いたのは、カズキだったかな。オレの所に相談に来た」

また、知らない名前が出てきたぞ？それより、この隙にオレは逃げた方がいいんだろうか。ティアスの部屋の前とはいえ、ここはオワリの王宮だ。この人達、何つー怖い会話をしてるんだよ。それに、中王のスパイとかだつて、そんなこと知ってるのか？聞いてたらどうするんだよ？

オレの不安を察知してくれたのか、ティアスがちらつとオレに目配せする。それをオレに立ち去れ、と言っていると判断して、そつと後ずさりする。

いや、無理。それ以上の存在が、影から見てる。オレにだけ判るように、壁の隙間から、よく知ってる視線がオレを突き刺してきた。ここにいろつてこと？オレなんかいなかったって、イズミがこっそり覗いてるなら、良いじゃんかよ。何でオレにここにいることを強制するんだよ。

「オレ達とすら、関わりを持つとうとしなくなってきた。その代わり、酷く自分勝手になった。そして、人に妙な期待をするようになった」  
「期待？」

「例えば、あひるが成長して、白鳥にでもなってしまうような。そんな期待をね」

ティアスが唇を噛みしめ、次の台詞を必死に考えているのがよく判った。彼女のプライドの高さは、彼の台詞を許さなかっただろうことも。

「……だから、あなたはオワリにいるのね。中央にいればいいようなものを。その方が、あなたの息子さんも、いまよりずっと幸せなんじゃない？」

何を思っ、ティマスはサワダのことを口にしたのか、彼女の背中からは判らなかつた。

「どうだろうね。あの子は、いまの状態を望んでいるし、それによつて付随してくる不幸に甘んじている。君が気にすることではない」  
「以前は、中央によく出入りしてたんでしょ？サカキ元帥に聞いたわ。それがここ何年かはちつとも出入りしなくなつたつて。私があそこに捕らわれてからは、サカキ元帥達とだけ会つて、オトナシの元へは顔も出さなくなつた。随分久しぶりだつて聞いたけど」  
「だから？」

「自分勝手になつたオトナシに、見切りをつけたんじゃないかつて」  
「そんなことはないさ。ただ、それよりも大事なものが、オレにはずっと昔からあるだけだ。期待されなくなつた分、彼との関係は随分楽になつたよ」

サワダ議員の言つてることが、オレには全くもつて判らん。彼は一体何を目的に、彼女を、そしてオワリを振り回すのか。彼女の言うとおり、中央にいた方が自然だ。何しろ、彼の昔の仲間とやらが、いまの中央の支配者達なのに。何が楽しくて、こんな支配国の政治戦争を、自ら行つてゐるのか。

「……何で、この国にいるの？あなたがこの国にいて、良いとは思えないわ」

「ずいぶん言い方だね。どこにいようと、オレの自由だ」  
「あなたにはね。子供は、生まれる場所も、親も選べない」

生まれる場所を選べなかったのは、サワダだけじゃないはずだ。ミハマも、イズミも、みんなそうだ。誰も選んでこの国にいないはずだ。

「辛辣だね。そんなに酷い親であるとは思ってないけど。君の親はそうだったのかい？」

「知らない」

「そんなこと言われたら、親が泣くよ？」

「泣こうにも、戦争で死んでしまったから」

彼女の声に、全く揺らぎがなかったのが不思議だった。そして、自分の昔の仲間がその戦争を引き起こしたんだと判ってるくせに、顔色一つ変えないサワダ議員も。

オレは、彼女のことを知っているようで、何も知らないのかもしれない。彼女の重い過去のことを、この世界に起きたことを、オレは何も知らない。知りたくもない。

怖いよ。

「そんなところで何をしてる？」

オレの後ろに誰かを見つけたらしく、声をかけた。もしかしてイズミが見つかった？間抜けすぎるぞ？！つか、それってますます修羅場じゃないか！？

「……テツ」

その名前に、ティアスも振り向いた。すぐに目の前のサワダの方へむき直したけど。

イズミが見つかるよりはましな気がするけど、修羅場が待っていることには変わらない。つか、何つータイミングで出てくるん

だよ、サワダのヤツ。オレは姿を見たくもなかった。こちらを振り向いた時の彼女の泣きそうな顔を思い浮かべたまま、必死で彼女の後頭部を見つめていた。

いままで聞こえなかった彼の足音が聞こえ始め、少しずつ近付いてきたのが判る。一体、彼はいつ頃からここにいたのか。

「いえ、たまたま通りかかったただけですから」

振り向きもしなかったオレの背中を、彼は軽く叩き、ティアスの横に立った。悔しいけど、少しだけ楽になってしまった。

「また、今度つて所だな。ぜひ頼むよ、アイハラくん」

「……や」

「一緒に、中王の元へ」

蚊の泣くようなオレの声ですら、容赦なく叩きつぶすといった感じの強い口調と視線を残し、彼は立ち去った。息子から逃げたようにも見えたけれど。

「……いつから？なんで？いたにしても、影で見ればいいのに」

彼を責めるように、彼女は彼を睨み付け、立て続けに質問をする。彼は一瞬、オレの様子を伺ったようにも見えた。

躊躇しながら、彼は彼女に手を伸ばす。右手で彼女の肩に触れ、撫でるように首筋にも触れ、頬に手を当てた。

「そんな泣きそうな顔で強がられても、説得力ねえし」

文句の一つも言ってやりたかったけど。サワダの台詞の方がよっぽど強がってるように聞こえて、笑顔がやっぱり偽すぎて、何も言



えなかった。

「オレのこととか、関係ないのに。生まれる場所を選べなかったのは、お前も一緒なのに」

「でも、私は後悔してない」

「歯を食いしばりすぎると、血が滲むだけだ」

「それはテツちゃんのことだと思うけどねー」

突然隣に現れ、サワダの頭を軽く小突くイズミに、彼も彼女も声が出ないくらい驚いていた。

あれ？てつきりサワダもティアスも、イズミの存在に気付いているもんだと思ってたけど。知らなかったってこと？珍しくない？

「い、いつからいた？！お前！？ティアス、お前は気付いてなかったのかよ、コイツに！」

「だって……」

何、その反応。何でそんな恥ずかしそうにしてるかな。真っ赤になりながらおたおたする二人は、微笑ましいつつーより不愉快！あからさまに怪しいし！なにこの二人の関係！

そして、何故か二人揃ってオレを見る。

「何だよ。……ティアスもサワダも、オレ、何か悪いコトしたか？どっちかつつーと、お前らの方が……」

「そのためにアイハラを！？」

あれ、オレのせいみたいな言われ方。

「テツちゃん、詳しく話そうか。オレ、ティアちゃんとテツちゃんにいろいろ聞きたいことあるんだよね。午後の話し合いまで時間も

あるし」

「ミハマにそう言われてるんだから、それまで待てばいいだろうが、ちゃんということ聞いとけ」

「いや、状況把握しとかないとさ。ね？」

逃げようとしたティアスの肩を掴む。魔物より怖い。

「関係ないだろうが。それに、コイツの状況は父の話でだいぶ判つただろうが？」

「だね。状況は……だけど」

彼女の肩を掴む手を、彼は離さなかった。

10

彼女の肩を掴むイズミの手を、サワダが掴む。その行為が意味することを、彼は理解しているのかしていないのか知らないけれど。

「別に、何もなし。関係もないし。何が聞きたいか知らないけど」「テツちゃん。しらばっくれてる状況じゃないと思うけど」

サワダが彼から手を離すと同時に、ティアスも彼から距離をとった。

「違うよ、シン。何を疑ってるか知らないけど。どういっつもりか知らないけど」

「そう言うときって、なにを疑ってるか、十分理解してるってこと

でしょ？」

「だから、それは違うよ。私とサワダ中佐は、何もないよ？むしろ、私のことを彼は疑っている」

彼女の目と雰囲気、あのイズミですら飲まれていた。

「ミハマや、あなた達を心配して、私に近付いてきただけよ？あなたと同じように」

「だろうね」

「判ってるなら」

飲まれたことが不愉快だったのか、他に何か意図でもあるのか、イズミは彼女ではなくサワダを見ていた。

「最初はね。ミイラ取りがミイラって言葉、知ってる？」

「ふざけんな。そんな話なら、後でしろよ」

怒ってみせるサワダだったが、オレには逃げてるようにしか見えなかった。

「いいの。ミハマが私のことをどう思っ、話をする時間をくれたのかは判らないけれど、私自身がシンにとって怪しい存在であることは変わらないし。だけど、それでも、シンが疑うようなことに、サワダ中佐は関係ない。彼は私を疑ってる」

「そのわりに……」

「全部きちんと話すから、安心して。ねえ、ミハマ？今からでもいいよ」

ミハマが後ろにシュウジさんを従え、こちらに歩み寄ってきた。彼もまた、彼女にあらかじめ何かを話そうとしていたのだろうか？

この場所にこんなに人が集まるのは不自然だし。

「いや、いいよ。君も準備があるだろ？」

「あなたも、私に何か話があったんじゃないの？」

「いや、そこでテツキさんに会って……」

笑顔で彼女の隣に立つミハマの後ろで、シュウジさんがメチャクチャ嫌そうな顔をしていた。要するに、あの人に会って、彼はこっちへ様子を見に来たってことか。

「牽制されたから」

「ああ、そうですね。あんた達の世界では、あれを牽制って言うんですね。良いですけどね」

シュウジさんの溜息が、哀れで涙を誘う。また大人げのない会話してたんだろうな、あの二人……。

「牽制、ねえ。変なの。ミハマの前だと、あの人まるで子供みたい。サワダ中佐の前ではちゃんと父親の顔してるのに」

「……ティアちゃん、それもちょっと違う気が。サワダテツキがテツちゃんの前で父親ヅラをしたことはあっても、父親の顔してるのは見たことがないよ」

「そんなこと無いよ？さつきだって、そうだったよ。見てたくせに」  
「あれが？」

イズミがオレに同意を求める行為に、ティアスが嫌そうな顔をして見せたが、オレも彼女とは別の意味で嫌な顔しかできなかった。あの人に関しては、概ねイズミと同意見だったから。あの人も、ミハマも、意味が判らない。

「何か込み入ってるみたいだけど、君は少しでも休んで、早く傷を治してよ。テツもね。あんまりうるうるしたり、ストレス溜めたりは良くないと思うけど」

「別に溜めてないし」

「眉間の皺が跡になりそうなくらい、考え込んだ顔してるのに？相変わらず、自分のことは見えてないよね。冷静さに欠ける守護者はいないよ？」

突き放したようなミハマの台詞に、サワダは噛みつきそうな顔を見せたが、すぐに引つ込めた。

「オレにも素直に『休め』って言えばいいだろうが。妙な気を回すな、バカ」

長い間、サワダを心配して言って来た台詞を、ミハマなりの伝え方で彼に伝えていただけなんだ。だから、ミハマはサワダにだけ、少し違う気の使い方をする。敢えて彼を見ないように、彼のことを心配していないかのように。

「だって、テツはそう言ってもちつとも言うこと聞かないから。それより、シンに頼んで無理矢理にでも外出禁止とかにした方がいいのかな。休めつつってのに、ピアノ室で練習してるって聞いたよ？大体、昨日だってケガを理由に引つ込んでることだって出来たのに」

「ちなみに、昨日の夜、訓練場に顔出してたよ？人がいない時間を見計らって」

その後、温室に行つてサトウアイリと密会もしてるけどね。イズミは他にも色々見てるくせに、さすがにそれは言わないんだな、ミハマの手前。

「……何で知ってる、お前。ストーキングか？」

「だって、お仕事ですから、隠密として」

「ちよっとはおとなしくしてることが出来ないのかな。イムラ先生にもこの間怒られてたし。昼食まで横になってれば？」

サワダの腕を掴み、引っ張るミハマ。シュウジさんもこっそりそれに加勢して、二人がかりで引っ張る。

「いや、もう、傷は埋まって……」

「はいはい。状況はイムラ先生から聞いているから。宮殿にいる医者じゃ、君の言いなりだから」

……穏やかな顔して、有無を言わせない男だな……。引きずられていくサワダを、イズミもティアスも苦笑いしながら見送っていた。

「やられたな。完全にミハマに混ぜっ返された」

部屋に戻ろうとしたティアスを、引き留めるために彼女の肩に手をまわす。

「馴れ馴れしいぞ、お前！」

オレですら、昨夜はニイジマの監視が怖くて彼女には指一本触れられなかったのに、そんな簡単に肩を抱いて!!

「五月蠅いな。大事な話の途中だったろうが」

「終わったじゃない。何もない。今日、全部話すから。ちゃんと。私が悲劇の姫君なんかじゃないってこともね。あの王子様が、私のことを何か誤解してるんじゃないかと思って心配なんですよ？それ

から、その守護者を誑かす悪い女なんじゃないかって、心配？」

さっきまでのティアスとは違う。影と毒のある女の顔を見せた。サワダと二人の時とも、ミハマの前とも、オレの前とも違う顔。

「そうだな。前半はかなり心配だな。大分掴んではいるけど、真相は君しか知らないし、現場に行かないと判らない。後半に関しては、自業自得だよ。ミハマを裏切るような真似はさせないし、するなら……いや、それはいいや」

自己完結。何か含んでるよな、イズミのヤツ。それをティアスが見逃すはずもなく、彼女もまた含んだ笑顔で彼に問うた。

「シンは、随分我が儘なのね？ミハマがあんなにサワダ中佐のことを守っているのに、彼らの間を引き裂こうとする。知らない方が、引っかけ回さない方がいいこともあると思わない？」

「そうだね。守ってるけど……」

「そうでしょう？ミハマはサワダ中佐を守ってる。サワダ中佐はそれに負い目を感じながらも、それに甘えている。でもそれに関してはある程度、その程度の差こそあれ、同じ状態だと思うけど」

「テツほどではないさ。けれど、……そうだな」

「ミハマが、サワダを守ってる？逆じゃなくて？」

オレの疑問に、ティアスは笑顔で応えた。その真意は、その表情からは読めなかった。作られた笑顔を浮かべる彼女からは。

「そうよ。ミハマはね、サワダ中佐を懐に入れることで、彼を守っているの。その行為によって、彼は以前にも増して攻撃を受けるだろうコトを、そのリスクを理解していながら。彼の親友は、自分の政敵である男のたった一人の息子なのよ。しかも、彼のすぐ下にい

る、数少ない王位継承権を持った、ね」

彼女の言葉の意味を、おそらくオレなんかより、イズミは遙かに理解をしていたのだろう。見たこともないような悲痛な面持ちを見せていた。

「よく……判らないけど……」

おそらく、またイズミが怒りそうだったから、オレは小さな声でしか聞くことが出来なかった。それに気付いたのか、イズミがオレの顔を見て苦笑いを見せた。

「サワダ中佐は、派閥争いにも、権力争いにも、残念ながら全く興味のない人だわ。閉じちゃってるのよ、良くも悪くも。だから、ミハマはそれを理解して、彼にはあの態度だし、彼を自分の懐に入れている。ミハマは、サワダ中佐のためのシェルターになってるのよ、この狭い世界で攻撃に晒されないように。サワダ中佐にだけじゃない、彼の護衛部隊全てを、彼は守ってる」

その言葉が、限りなく真実に近いことを、イズミの表情が物語っていた。イズミやサワダが不自由の中で、自由に考え動けるのも、彼らの主である、ミハマが彼らの盾になっているから。そしてその盾を守るために彼らは戦う。

その状況を、ミハマはどんな思いで作り出したのだろう。

だけど、オレの頭には、彼の笑顔しか出てこない。

こんな状況でも、「敵も味方もいるから幸せ」だと、彼は笑うのだろう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4757b/>

---

Switch【モラトリアムを選ぶということ】続・序章

2010年10月8日21時29分発行